2018 年度　奈良教育大学 ESD-SDGs コンソーシアム

全国版 ESD ティーチャープログラム報告書

近畿 ESD コンソーシアム／

奈良教育大学 ESD-SDGs コンソーシアム

ごあいさつ

奈良教育大学

学長　加藤　久雄

「持続可能な開発のための教育」（ESD）を実践できる教員の育成は、本学の大きな使命の一つです。

2002 年にヨハネスブルグで国際連合により開催された「持続可能な開発に関する世界会議」で、日本政府および NGO が「持続可能な開発のための教育」（ESD）を提唱してから 17 年、この間、様々な実践が生み出され、ESD 研究が進んでいきました。日本の教育にも ESD は徐々に浸透し、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」（2016.12）には、「持続可能な開発のための教育（ESD）は次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念である」と述べられています。答申に基づいて策定された小・中学校学習指導要領には、前文及び総則において、「持続可能な社会の創り手」の育成が謳われています。

日本の教育の基盤となりつつある ESD ですが、学校現場では、課題も明らかになってきました。その一つが、ESD を実践できる教員が少ないということです。「何を学ばせるのかがわからない」「授業の組み立て方がわからない」という悩みの声をよく聞きます。学習指導要領完全実施に向けて、ESD 実践者の育成は急務です。

本学は平成 27 年度日本／ユネスコパートナーシップ事業を受託し、ESD を実践する教員に求められる資質能力を明らかにし、研修プログラムを開発しました。そしてこのプログラムを「ESD ティーチャープログラム」と位置づけ、毎月のように ESD を学ぶために学生、教員、研究者がすすんで集まり、学び合っています。セミナーでは、互いの実践について、何時間も熱のある対話が続きます。より良い授業を作るために何度でも指導案検討会がなされます。これはセミナーが始まった 8 年前からずっと変わらない景色です。「学び続ける」という文化が、参加者の先生たちの中に根付いているように感じます。

ESD の目標は、「価値観と行動の変革である」と言います。そう簡単に変わるものではありません。対話を重ねて、実践して、また議論して、少しずつ少しずつ担い手としての変容が見られるものです。それは教員も同じです。ESD の実践者を育成する、とはこうした学び合う文化をいかに根付かせるかにあるのではないでしょうか。

今年度は、全国 5 地点で「全国版 ESD ティーチャープログラム」を展開いたしました。初めての試みに、多くのリソースパーソンの先生方にご協力いただきました。深く感謝申し上げます。先生方の講義に刺激を受けて、各地で熱のこもった対話がなされたと聞いています。「学ぶ」ということは一過性のものではありません。変わり続けていくために「学び続ける」ことが重要だと考えます。全国版 ESD ティーチャープログラム第一期の皆様が、今後も ESD を学び続けていってくださること、そして各地の ESD 実践者たちの核となられることに、少しでもお役に立てればと考えております。一緒に持続可能な社会づくりの担い手を育てていきましょう。

ＥＳＤティーチャープログラムとは

平成 30 年度文部科学省ユネスコ活動費補助金「グローバル人材の育成に向けたＥＳＤの推進事業」
（2）ＥＳＤの深化による地域のＳＤＧs 推進事業
［2］学校教員及びユースを対象としたＥＳＤの実践力強化

ESD に関する理論と実践力の両方を身に付けるために、単発的な研修ではなく、系統的・継続的な研修を構成しています。

【研修Ⅰ】ＳＤＧｓセミナー（30 名程度）

参加費無料

～明日から使える！ＥＳＤの基盤となる授業・学級づくりの講演～

・ＥＳＤ有識者を講師に招いて、先進的な取り組みや新学習指導要領とＥＳＤの関わりなど多様な視点からアプローチ。環境教育、国際理解教育から、学級づくりまで…テーマは地域の実態に合わせて！

宮城県仙台市	東京都	長崎県長崎市	北海道羅臼町	奈良県広陵町
6 月 2 日 宮城教育大学 附属小学校	6 月 30 日 NATULUCK 神田北口駅前店	7 月 22 日 長崎県立勤労 福祉会館	7 月 24 日 羅臼町公民館	8 月 31 日 広陵町 かぐや姫ホール

【研修Ⅱ】ＥＳＤティーチャープログラム（先着 10 名程度）

参加費無料
（宿泊費が必要な場合は自己負担。）

～ＳＤＧｓ・学習理論・ファシリテーション・事例検討・
教材開発をセットにした密度の濃い 2 日間の研修プログラム！

（内容）ＳＤＧｓの理解促進、ＥＳＤの理論（能力・態度）、ＥＳＤの理論（ファシリテーション）、先進地での実践事例分析・検討、ＥＳＤ教材開発。

（参加者）教員、教員志望の大学生または高校生（同じ学校からの複数参加も歓迎）

宮城県仙台市	東京都	長崎県長崎市	北海道羅臼町	奈良県広陵町
8 月 10.11 日 宮城教育大学 （予定）	8 月 2.3 日 東京ウィメンズ プラザ	8 月 23.24 日 長崎市内	8 月 6.7 日 羅臼町 郷土資料館	9.10.11 月頃 広陵町役場

2 日間のプログラム終了後、指導案を各自作成

【研修Ⅲ】ＥＳＤティーチャープログラム　事後研修

～作成した指導案を持ち寄って検討し合うことで、ＥＳＤ実践力を高める 120 分。

夏休みに集まったメンバーが、自身が作成した指導案を持ち寄り、互いにねり合うことでより良い指導案、授業づくりへと近づけます。**日程は参加者間で相談。（10～11 月）**

宮城県仙台市　東京都　長崎県長崎市　北海道羅臼町　奈良県広陵町

3）奈良教育大学での ESD コンソーシアム実践交流会（12 月 26 日）

～各会場の優良実践を実践報告

優良実践を報告し合うことで、他府県の優良実践に学び、ユース間の全国的なつながりを深めます。

プログラム内容

SDGs 理解、ESD で育みたい資質・能力、ESD の授業づくり、実践事例検討、をテーマに二日間の研修を行った。各地のリソースパーソンから学ぶとともに、参加者が相互に学び合うことを重視したプログラムを計画した。

SDGs 理解

ESD のこれまでと、SDGs を意識した学校教育の在り方や教育の変化について学びます。

ESD で育みたい能力・態度

新学習指導要領と ESD の関係をひもとき、育みたい能力・態度や見方・考え方について学びます。

ESD ファシリテーション

子どもの学びに向かう力を高め、持続させる学習づくりについて学びます。

実践事例検討

SDGs への貢献、ESD で育みたい能力・態度がどのように実践に表れているかを学びます。

実践力を高めるためには、理論を学だけでなく、自身で実践をつくり、さらに他者の視点を取り入れより良いものへと作りかえていくことが求められる。４つの研修を踏まえて、指導案作成、検討会、そして実践報告会を行った。

指導案検討

４つの研修を生かして自身で指導案を作成、２か月後に持ち寄り、互いに検討し合うことで、授業を見る目を養います。

成果発表会 実践交流会

全国から参加者が集まり、互いの実践を発表・学び合います。

目　　次

ごあいさつ
ESD ティーチャープログラムとは
プログラム内容

第１部　研修記録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１
・ＥＳＤで育みたい能力・態度　未来をつくる教育の力～知床から発信する・・・・・・・・・　２
・新学習指導要領に掲げられた『持続可能な社会の創り手づくり』を
　　学校はどう実現するか～スクールリーダーとしての役割～・・・・・・・・・・・・・　７
・ＥＳＤの学びで得られる資質・能力とは何か」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１１
・持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）の達成を目指したＥＳＤの進め方・・・・・・・・・・・・　１５
・ＥＳＤで育みたい能力・態度・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　１７
・ファシリテーション力を身に付けよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２１
・ＳＤＧｓと広陵町・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２３
・主体的に学ぶ授業づくり・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２６
・ＥＳＤティーチャープログラム　－　ＳＤＧｓ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　２９
・ＥＳＤで育みたい力　大牟田市の取り組みを例に・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３３
・実践報告から研究報告へ―実践の質を高めるために―　・・・・・・・・・・・・・・・・・　３７

第２部　指導案集・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　３９
・須佐の魅力発見隊～須佐の豊かな海～（小学校第三学年　総合）・・・・・・・・・・・・・　４０
・須佐の魅力発見隊～田植ばやし～（小学校第三学年　総合）・・・・・・・・・・・・・・・　４３
・米づくりのさかんな地域　―　山形県庄内平野　―（小学校第五学年　社会科）・・・・・・　４８
・自動車をつくる工業（小学校第五学年社会科）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　５２
・日本の主食「米」を見直そう　～第２部　水田を守ろうプロジェクト～
　　（小学校第五学年　総合）・・・・・・・・・・・・　５７
・I like my town. 自分たちの町・地域（小学校第六学年　外国語科）・・・・・・・・・・・・　６５
・近畿地方　－大都市圏と私たちのまち－（中学校第二学年　社会科）・・・・・・・・・・・　６９
・共に生きよう まわりと世界と（中学校第二学年　総合）・・・・・・・・・・・・・・・・・　７３
・私たちの暮らしと民主政治（中学校第三学年　社会科）・・・・・・・・・・・・・・・・・　７９
・すべての人が笑顔で過ごせる社会へ
　～ セクシャルマイノリティの人たちについて考える ～（中学校全学年　道徳）・・・・・　８７
・チャリティー（中学校　課外活動）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　９１
・文章の叙述に即して的確に評論を読み，
　自らのものの見方，感じ方，考え方を豊かにしよう。（高等学校第一学年　国語科）・・・・　９６
・防災教育（高等学校第三学年　特別活動）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１００

第 1 部

研修記録

平成 28 年８月６日　羅臼町郷土資料館

研修Ⅱ－２．ＥＳＤで育みたい能力・態度

「ＥＳＤで育みたい能力・態度　未来をつくる教育の力～知床から発信する」

羅臼町教育委員会　自然環境教育主幹
金澤　裕司　先生

「いかなる問題もそれを生み出したときと同じ意識では解決することは不可能である」

Ａ・アインシュタイン

別海町でも気候変動を感じられる。例えば、台風 12 号のコース、最高気温が 40 度突破したこと、日本海の海水温が高くなったこと（冬に日本海から供給する水蒸気が多くなるのでは？と言われている）このような気候変動を生んだ価値観・社会の変化は、このままでは解決できないのではないか。ＥＳＤがその回答を持っているのではないか、そういった意識でＥＳＤに取り組んでいる。

地域学／地元学の興隆と知床学
地域創生と知床学
ＥＳＤ「知床学」で育みたい能力・態度

１．ＥＳＤで育みたい能力・態度

国立教育政策研究所（「ＥＳＤの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」）が提示した６つの構成概念は以下の通り。

人を取り巻く環境	**人の意思・行動**
多様性	**公共性**
相互性	**連携性**
有限性	**責任制**

こういう概念が浸透した社会をつくっていくことがいま求められている。個別に見ていくと、

多様性…自然・文化・社会・経済は起源、性質、状態、などが異なる多種多様な事物から成り立ち、それらの中では多種多様な現象が起きていること。

相互性…自然文化・社会・経済は、互いに働きかけ合い、それらの中では物質やエネルギーが移動・循環したり、情報が伝達・流通したりしていること。

有限性…自然・文化・社会・経済は有限の環境要因や資源（物質やエネルギー）で支えられながら、不可逆的に変化していること。資源や時間空間には限りがあり、それらを偏りなく持続的に活用しなければならない。

公平性…持続可能な社会は、基本的な権利の保障や自然などからの恩恵の享受などが、地域や世代を渡って公平・公正・平等であることを起案としていること。

連携性…持続可能な社会は、多様な主体が状況や相互関係などに応じて順応・調和し、互いに連携・協力することによって構築される。

責任性…持続可能な社会は、多様な主体が将来像に対する責任あるビジョンをもち、それに向かって変容・変革することにより構築される。

同じく国立教育政策研究所（「ＥＳＤの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」）はＥＳＤで育みたい能力・態度も提示している。

①批判的に考える力…合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、大体的に思考・判断する力。他人のいうことを鵜呑みにせず、自らの頭で考えて判断すること。批判力を重視した代替案の思考力。

②未来像を予測して計画を立てる力…過去や現在に基づき、あるべき未来像（ビジョン）を予想・予測・期待し、それを他者とともに共有しながら、ものごとを計画する力。

③多面的・総合的に考える力…ひと・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり（システム）を理解し、それを多面的・綜合的に考える力。

④コミュニケーションを行う力…自分の気持ちや考えを伝えるとともに、他者の気持ちや考えを尊重し、積極的にコミュニケーションを行う力（英語を教えることが、正しいのか。一方で英語の翻訳機能が充実してくる。翻訳の仕事は少なくなる。方法ではなく、コミュニケーションが重視。度胸も大事。）

⑤他者と協力する力…他者の立場に立ち、他者の考えや行動に共感するとともに、他者と協力・協同してものごとを進めようとする態度。私たちの生活の基盤である身の回りの自然や社会、文化に関心を持ち、きちんと認識すること。

⑥つながりを尊重する態度…ひと・もの・こと・社会・自然などと自分とのつながり・かかわりに関心をもち、それらを尊重し大切にしようとする態度。

⑦すすんで参加する態度…集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち、自分の役割を理解するとともに、物事に主体的に参加しようとする態度。

この能力・態度と構成概念は、リンクさせて考えていくことができるのではないだろうか。

（図　金澤先生策による）

	Ⅰ多様性	Ⅱ相互性	Ⅲ有限性	Ⅳ公平性	Ⅴ連携性	Ⅵ責任制
批判的に考える力	様々な角度から合理的客観的にものごとを考える。	自然や社会の相互関係をダイナミックに捉えて客観的に考える	いつまでもこのままか、時間の軸でものごとを考えている。	地域や世代間で公平であるかを考えることが習慣化されている。	多様な主体が協力できているか総合的に考える。	将来の世代に対して責任が持てる
未来を予測し計画する力	どうなるかを考えて行動できる。	関わる全てを考えて結果を予測できる。	環境要因や資源の有限性を正しく理解している。	現在のやり方が将来の世代にも配慮されているかを考える。	目の前の事象がどうなるか考えられる。	結果を予測して行動を決められる。
多面的総合的に思考する力	様々な方向から考え、根本に迫る	現象だけにとどまらず、構造を理解して思考する。	人・もの・ことの有限性を理解し、その利用を多面的に考えられる。	全体をよく見て偏りのない考え方をもてる。	様々な角度から物事を考えて連携できる。	個々の事象や空間、時間のつながりを包括的に捉える。

コミュニケーションを行う力	異なる価値観との話し合いができる。	違いを楽しむ心を持つ。	利益が相反するような関係でも調整したりされたりできる。	一人一人の意見を大切にする。	他者と円滑な協力ができる。	自分の考えはきちんと伝える。
他者と協力する態度	異なる考えの人と協働できる。	構造を共有し、一致点を見つけて協力する。	様々な立場の人と協力し、有限な資源の賢明な利用に努める。	他者の良いところを引き出せる。	それぞれの特徴を活かして協力する。	他者と協力して取り組みつつ、揺らぎのない価値観を保つ。
つながりを尊重する態度	物事のつながりを考えて行動できる。	多様な立場を理解し、互いに共感し合える	自分達を支えている環境要因や資源のつながりを理解できる。	分け隔てのないつながりを作り自己を拡張できる。	独善に陥ることなく多様な主体との連携を尊重する。	盲従ではなく自立した主体として関わる。
進んで参加する態度	積極的に違いを意識する。	様々な文化や社会に好奇心を持ち積極的に関わろうとする。	環境保護や資源の利用について自分で考え、積極帝に行動する。	差別や不条理をなくすよう行動する。	進んで多様なつながりをもとめる。	自分の意思で進んで参加し、自分の頭で責任を持って考える。

社会は少しずつ持続可能な社会を必要としてきている。かつてはファシズム（強力な権力によって統制され、一つの価値観を強制され、特定の方向へ向かわされる社会）が台頭し、昭和的民主主義社会（強力なボスをリーダーとしていただき、ボスの意向を忖度して自らの考えを周りの人々に合わせることで、民主主義的形式をとりながら、実質的には強い者に支配されて安定しているようにみえる社会）が起こり、現在持続可能な社会に向かおうとしている。その社会は、「互いに尊重し合いしつつ自分の意見をはっきりと主張し行動する自立した個人からなる社会」であり、これらの能力や構成概念が求められる社会である。

知床では高校の自然の利用の仕方をめぐって、するどい対立がある。例えば、知床岬に観光客を連れていくべきかどうかという問題である。自然保護を進めたい人にとってはとんでもない、でも生業とする人にとっては経済面でやってほしい。このような対立を見ると、知床の素晴らしさとは、素晴らしい自然でもなく、両方の立場にいる人が一つのテーブルについているということではないだろうか。それが一つの方向性を示唆していくのではないか。こうした事例はほかでも見られる。漁業者が世界遺産登録の反対をし、世界遺産科学委員会を作った。その中の一つにエコツーリズム委員会が利用の方法を考えるために委員会を作った。観光協会からも、遊漁船組合、など色々なステークホルダーが集まって、４，５０人で会議を開き、決めていく。例えば羅臼湖は 2.5 ㎞で歩いてしか行けない。観光再度としては駐車場を作ってほしい、遊歩道を作ってほしい、などの要望が出る。羅臼湖の保全がどういう形が望ましいのか、が熱心に話し合われ一つ一つ対策が講じられた。例えば、人が歩くと溝が掘れてしまうので、一部石をつんで歩道を作ったが、それすら羅臼の石をつかって（環境保護の糸から）組むというように、両者の立場をどのようにバランスを取るかが重視されている。

２．学力をめぐって

「知識偏重から考える授業の転換」というが、正しい知識がないと正しい判断はできないともいえる。重要なのは身に着けた知識と技術と実験観察で認知される事象を結び付ける力である。知識や技術は身

に付ける目的が明確になれば、もはや「知識偏重」ではないだろう。

「何のために学ぶのか」を問えば、立身出世のため、という答えが依然多い。本来の知的好奇心にもとづいて学ばせることができないだろうか。例えば、NHK「夏休みこども科学電話相談」では、子供たちの素朴な疑問がたくさん出てくる。それに対して専門家が一生懸命応えている。例えば4歳の子が「わたしがお風呂に入ってもあふれないので、お父さんがあふれるのはなぜ？」という疑問を出したことがあった。その疑問が子供たちから出てくるのが素晴らしい。最初の「知りたい！」という情動を満足することに快感がある。そういう学びをしてやるのが理想ではないか。羅臼では、それを知床学で生み出したい。

３．地域学／地元学と知床学

「地元学」は地元を学ぶことである。ないものねだりをやめて、あるものを探し、地域の持っている力、人の持っている力を引き出し、あるものを新しく組み合わせ、ものづくり、生活づくり、地域づくりに役立てていく。それぞれの風土とくらしの成り立ちの物語という個性を確認し、大地と人と自分に対する信頼を取り戻し、自分たちでやる力を身に着けていく。

知床学の特徴は、「場」の学びであることだ。つまり、「In 知床、 About 知床、 For 知床」を通して学ぶ。これは環境養育の基礎でもある。その内容は、自然環境、地理と歴史、産業と包括的なものになっている。ここから得られる「自然リテラシー」をもって知を愛に持ち直し、社会参画へと発展する。これは“教える側と教わる側の双方を変容させる学び”である。

羅臼での実践例として

○クマ学習（知床財団）

出会うことはないかもしれないけれど、そういう遭遇するかもしれない可能性がある。心構えは持ってもらいたい。大人に話すよりも子供に話すことで理解してもらえるのではないかと考え、スタートした。「クマから知床が見える」「クマから自然が見える」「クマから人間が見える」「クマから地球が見える」ようになってほしい。そのためには、「危険」「こわい」だけでなく、先住者としてのリスペクトをもたせ、またクマも生きていけるような、豊かな場所であることを伝えたい。ここには、相反する命題を教えることの難しさが存在する。

具体的には、

幼稚園・低学年…ヒグマを知る、食べ物くらし、大きさ
小学校中高学年…ヒグマを理解する　繁殖・行動　もし出会ったら
中学高校…目撃情報、調査方法、共存の在り方
・・・これらを踏まえて知床の自然への愛情と誇りを獲得させる

羅臼の人にとってクマは、現実的な存在。そういう感覚を持っていてほしい。野生動物との付き合い方について、日本人は遅れている。知床にくる一部の大人たちは、カメラを抱えて近づいていく。逆に必要以上に恐れたりもする。そういった人々に必要なのが「野生動物リテラシー」だ。どういう付き合い方をすればよいか、を身に付けておくことが共存への第一歩だろう。

○生態系学習

世界遺産に登録された背景に「陸上・淡水域・沿岸・海洋の生態系や動植物群集の進化、発展にお

いて、重要な進行中の生態学的過程又は生物学的過程を代表する顕著な見本である」というクライテリア（登録基準）をみたしている、というものがある。物質循環の一端に触れ、体験的に学ぶことが生態系学習の目的である。

知床半島の物質循環を総合的に学習する。
知床半島に人が入っていった歴史があった。どのように
川の中の食物連鎖を学ぶ。

〇他にも、羅臼高校自然環境科目群、知床概論、知床学士検定などの取り組みがある。

４．知床学綱要

知床にはたくさんの課題がある。最大の課題の一つは、羅臼高校の入学者数の減少である。そして町の人口流出である。これら町の抱える課題に高校生も立ち向かう必要がある。

地球規模の課題も明らかだ。台風の大型化、海水温の変化、漁獲量の減少、魚種の変化など気候変動の影響が目の前に現れている。羅臼町はこの課題を直撃を受けている。地域の課題は地球の課題である。高校生はその当事者になる。

課題に立ち向かうためには、「何のために学ぶか」という問いに生徒を真剣に向き合わせなければならない。「学ぶ」とはなにかを考えさせなければならない。気候変動や地球環境の変化は、これまで誰も経験したことがないものである。今噴出している課題を生み出した教育によって、それらを解決することはできない。今まで誰も経験していない学びに取り組まなければならない。

知床学の目標「知床学綱領より」

- 知床という場において、そこで生きる多様な生き物の暮らし、繰り広げられる生き物同士のつながり、環境からの影響と環境への影響などを体験的に学び、科学的に整理しながら、生命や自然に対する豊かな感性を身に付けること。
- 知床半島を舞台に続けられてきた人々の多様な生活と歴史を学び、そこから現代社会を考え、未来を洞察する力を身に付けること。
- さらに、知床から地球全体の問題を考え、持続可能な未来への展望を見出すこと。
- これらの過程を通して、知床を愛し、生命を尊重し自然を恐れ敬い、人間の未来を洞察できる人格を育てる。

平成 28 年８月 10 日　宮城教育大学

研修Ⅱ－１．ＳＤＧｓ理解

「新学習指導要領に掲げられた『持続可能な社会の創り手づくり』を学校はどう実現するか～スクールリーダーとしての役割～」

前宮城教育大学　学長
見上　一幸　先生

ＳＤＧｓが広がるにつれて、教育界だけでなく経済界など一般社会においてもＳＤＧｓに目が向いている。こうした社会の変化にも敏感でありたい。

社会の在り方のとらえ方が大きく変化しつつある。経団連は第 4 次産業革命の潮流の中で「Society５．０」を推進しようとしている。狩猟社会(Society1.0)、農耕社会(Society2.0)、工業社会(Society3.0)、20 世紀後半から始まった情報社会（Society4.0）に続く、新たな社会を示す考え方。第 5 期科学技術基本計画において、我が国が目指すべき未来社会の姿として初めて提唱された。

これまで 4.0 で個別課題の解決への模索、個別産業の効率化を目指していたが、5.0 では複雑化する社会問題の解決、社会・国民の豊かさの実現を目指す。これは「課題解決」と「未来創造」の視点を兼ね備えた新たな成長モデルであり、国連で掲げられたＳＤＧｓの達成にも大いに貢献するもの。

１．新学習指導要領とＥＳＤ

平成 29 年度に公示された新学習指導要領では、幼稚園、小学校、中学校の前文に「これからの学校には、一人一人の生徒（幼児・児童）が・・・自分のよさや可能性を認識するとともに、・・・持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが・・・求められる。」という文言が入った。また総則には、「・・・豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手となることが期待される児童に、・・・教育活動の充実を図るものとする。」と記述されている。この他、各教科では、【社会（中)】地理的分野、公民的分野、【理科（中)】第１分野、第２分野、【家庭（小)】、【技術・家庭（中)】、【特別の教科　道徳（小）（中)】などにＥＳＤに関わる文言が入った。

中央教育審議会では、数名の委員からＥＳＤという言葉を入れてほしいという意見もあった。普遍性という視点で考えると、英字を入れるよりも日本語で、という結論になり、「持続可能な社会の創り手」という言葉にとどめている。指導要領に、ＥＳＤが入ることで、現場で「また新しい教育が始まったと負担に感じられることのないようにしなければならない。

ＥＳＤが求められる社会的背景としては、知識基盤社会（Knowledge-based Society)と、グローバル社会が挙げられる。平成 17 年（2005）の中央教育審議会答申「我が国の高等教育の将来像」では、21 世紀は,「知識基盤社会」の時代であると述べている。それは「新しい知識・情報・技術が、社会のあらゆる領域で飛躍的に重要性を増す社会」であり、答申ではその特徴として、(１) 知識には国境がなく,グローバル化が一層進む。(２) 知識は日進月歩で、競争と技術革新 (理数教育) が絶え間なく生まれる。(３) 旧来のパラダイムの転換を伴うことが多く, 幅広い知識と柔軟な思考力に基づく判断が重要。(４) 性別や年齢、国も問わず参画が促進。の４つを挙げている。

こうした社会の変化に即して重視されてきたのが、コンピテンシー（能力）である。コンピテンシーとは、「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な要求 (課題) に対応することができる力」である。OECD の調査などをして、よく言われることが、日本の生徒は、オープンエンドの問題、つまり解が一つでない問いが不得意だと

いうことである。

つまり、これまで知識・技能が大切といわれてきたがそれだけではすまなくなってきたということである。「これからの学校教育を担う教員の資質・能力の向上について」には、『変化の激しい時代を乗り越え、伝統や文化に立脚し、高い志や意欲を持つ自立した人間として、他者と協働しながら価値の創造に挑み、未来を切り開いていく力が求められる。』『そのような新しい時代に必要となる資質・能力の育成のためには、「何を教えるか」という知識の質や量の改善に加え、「どのように学ぶか」という学びの質や深まりを重視することが必要であるとの認識のもと、課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の充実や、そのための指導の方法等を充実させていく必要がある。』とあるように、思考力・判断力・表現力や学びに向かう力と人間性も重視されるようになってきた。ただし、これは知識・技能が軽視されるようになったということではない。アクティブ・ラーニングとは何か？ということにふりまわされてはいけない。私たちはこの問題に対して、教員養成大学としていかに貢献できるかを考えている。

２．アクティブ・ラーニング

文科省用語集によれば、①教員による一方向的な講義形式の教育ではなく、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法②発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれ、グループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブ・ラーニングの方法、③アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善として、「対話的な学び」、「主体的な学び」、「深い学び」という三つの視点がある。

ここで、子ども同士の対話的な学びの意味について、ふり返ってみる。対話的な学びは Wonder の共有が大切である。ワンダーwonder という感覚は、子供は敏感、年とともに弱くなると言われている。年齢と共にすべてが当たり前の日常となり、ワンダーの感覚が弱まるのではないかということである。子ども同士のワンダーの高め合いは、子供たちの成長につながる。ワンダーを失いつつある大人は、子供たちの言動から学ばねばならない。子供たちから鏡として受け止めなければならない。

先生との対話はどうか。先生との対話の中で、子供の学びを深めていくためには、先生の姿勢がポイントになる。また子供の感性を生かしてファシリテーションを実践していくことが重要である。つまりすべてを教えるのではなく、疑問を疑問として残してあげることも大事。「面白いこと気づいたね、不思議だね。」と返してあげればそれでよい、という場合もある。教師がこれから進めたい方向だけを取り上げたり、同調したりしてしまいがちだが、個々の疑問を大事にするべきだ。加えて、学校に来るまでの個々の経験を拾い上げてやることが大事。自分の体験に根差して出てくるものを大切にしてあげることが求められる。こうして主体的な学びが生まれていく。

Wonder の力を養うには、体験や感性が重要である。なぜだろう？ほんんとうだろうか？という思考の始まりのためには、感動する感性が不可欠である。この感性の源となるのが、体験や経験や知識だといえる。レイチェル・カーソンは「センス・オブ・ワンダー」(1965) の中で、“知ることは感ずることの半分も重要ではない。”と述べている。

３．教員に求められる能力

・2013 年の中央教育審議会ワーキング・グループでは、「これからの教員に求められる資質・能力」についても取り上げられた。「思考力・判断力・表現力等を育成するような学びのデザイン力」「社会の変化に伴う新たな課題に柔軟に対応できる広い視野や応用力」などが挙げられ、『これからの教員には、知

識・技能の修得にとどまらず、高度の専門性に基づく実践力・応用力が要求されるものであり、教員は教職生活全体を通じて学び続け、高度な資質能力を身に付けていく専門家である。』と述べられる。

まとめると、①指導計画の立案・カリキュラムデザインの力、②教師のコーディネーター力、③校長や仲間、支援サイトへの説得力、④支援サイトへのアクセス力、⑤校種間・地域内の連携、の４つである。カリキュラムマネジメントについては、「学校自身が地域の課題を取り上げなさい」ということがいわれている。その基テーマがＥＳＤになるのではないか。ただし、それぞれの基礎は総合的な学習の時間ではなく、各教科でやるべきだ。

４．持続可能な社会とは何か？ＥＳＤとは何か？

持続可能な開発の概念は、ブルントラント委員会による報告書「Our Common Future（1987)」において、“将来世代のニーズを損なうことなく、現在の世代のニーズを満たすこと”と定められた。これを受けて、ユネスコ国内委員会では、ＥＳＤを“持続可能な社会をつくるための担い手づくりのための教育”と規定している。（見上一幸（2017）教育委員会月報 27 年 5 月号, 特集「持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ)のさらなる推進に向けて」もしくは、見上一幸（2017）文部科学省『中等教育資料』27 年 12 月号, 特集「ＥＳＤの更なる推進」を参照）

ＥＳＤのわかりにくさはその間口の多さにある。国際理解教育、環境教育、人権教育、エネルギー教育、平和教育、多文化共生教育、世界遺産教育、ジェンダー教育と様々な入り口がある。しかしいずれもゴールは「持続可能性」にあると言える。ＳＤＧｓの 17 の目標も同様で、入り口と捉えられるかもしれない。自分たちの地域は、ＳＤＧｓの 17 の目標のどこに一番深く関わっているか。複数と関わるかもしれない。ピンポイントの問題ではなく、何に関わっているかを考えていけばよい。

まとめとして、二点。

一つは、人類は、様々な環境条件が許容可能な平衡の上で進化し、持続してきた。新たな変化要因が生まれると、持続可能な社会の在り方も変わる。１７のゴールもいつか変わるかもしれない。つまり常に取り組み続けることが重要である。

二つ目に、人の智は時代とともに、蓄積されてきたはずである。しかし、人は前時代に獲得したものを忘れることがある。だからこそ、常に温故知新の考え方を大切にしていきたい。例えば、過去の大震災、ライフスタイル、成功体験から学ぶことは多い。過去の言い伝えには、ちゃんと意味があるはず。（例：夜につめ切ってはいけない…夜に刃物を置くと、外来の侵入者があるかわからないから／世つめ／など）常に地域に根差した教育、過去から学ぶ姿勢（世代間のギャップに取り組む姿勢）が大切である。

ＳＤＧｓにおいて、取り組むべき課題として、「我々は、2030 年までに以下のことを行うことを決意する。」として「誰一人取り残さない」ということをとても大切にしている。そのうえで、「あらゆる貧困と飢餓に終止符を打つこと。」「国内的・国際的な不平等と戦うこと。」「平和で、公正かつ包摂的な社会をうち立てること。」「人権を保護しジェンダー平等と女性・女児の能力強化を進めること。」「地球と天然資源の永続的な保護を確保すること。」を強調している。

５．ＥＳＤで育まれる子供の力

国立教育政策所（学校における持続可能な発展のための教育（ＥＳＤ)に関する研究〔最終報告書〕）によると、持続可能な社会づくりの構成概念「I 多様性 II 相互性 III 有限性 IV 公平性 V 連携性 VI 責任性」とＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度「①批判的に考える力②未来像を予測して

計画を立てる力③多面的,総合的に考える力④コミュニケーションを行う力⑤他者と協力する態度⑥つながりを尊重する態度⑦進んで参加する態度」があげられている。

これらを踏まえて重視したいと思える力、持続発展教育（ＥＳＤ）で培われる力（生きる力の育成）を挙げるならば、整理すれば、「コミュニケーション能力、クリティカル・シンキング（批判的思考）、システム・シンキング（システム思考）、ホリスティック・シンキング（包括的思考）、ディシジョン・メイキング（意思決定）、実践力・実行力、アクティブ・ラーニング、感謝する心の醸成の 8 つを考えたい。

コミュニケーション能力とは言語能力であり、感じたことを伝えられる力である。ウルスラ学園で 10 年間言語能力の育成に取り組んだところ、活動の質が高まるという様子が見られた。日本語で“考え方のバックボーン”を持っていないと文化的な背景を理解できなくなり、全ての思考に影響があると考えられる。

クリティカル・シンキングは、相手を批判する能力と捉えられがちであるが、あらゆる情報に対して批判的な思考を働かせて分析する習慣を身に着けるという事である。システム・シンキングはものごとを考察する際に単に要素に還元するのではなく、“システム”という概念を用いて、対象全体を包括的にとらえることである。ディシジョン・メイキングは、その時点で最善の判断を行うことができる能力である。

６．学外の支援サイトへのアクセス

学校のＥＳＤが成功するためにはいくつかの条件があるように感じられる。例えば、中心となるリード教師がいること、リード教師が孤立しない仲間の支援、学校長の理解とリーダーシップ、教育委員会の理解、学校・教師を支援する知識ベース、保護者の理解、支援者に丸投げしない、などである。

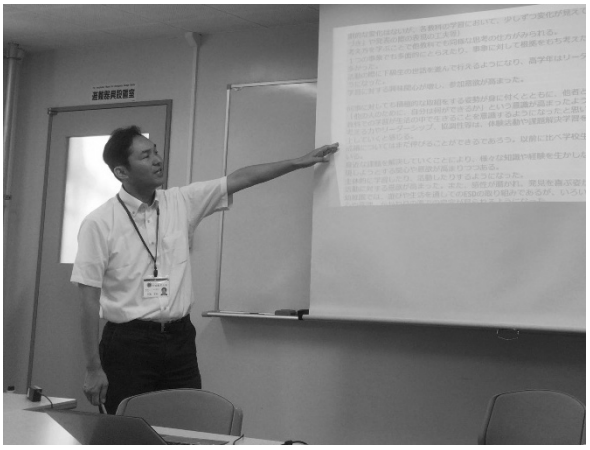
学校だけではなかなか進まないという現状もある。先生が孤立していることもある。その課題の克服のためにも、大学や大学ネットワークが役に立つ。大学を「支援する知識ベース」として、ＥＳＤのコンテンツや課題の発見、専門的知識や教師教育の支援などを大学が担うこともできる。これらの支援の場をうまく使って、学校でのＥＳＤ推進に尽力いただきたい。

平成 28 年８月 10 日　宮城教育大学

研修Ⅱ－１．ＳＤＧｓ理解

「ＥＳＤの学びで得られる資質・能力とは何か」

宮城教育大学
市瀬　智紀　先生



ＳＤＧｓが広がるにつれて、教育界だけでなく、Society5.0に見られるように経済界など一般社会においてもＳＤＧｓに目が向いている。例えば東北地方では、特に「災害をどのように身近にとらえるか。」という視点でこれまで学習が積み重ねられてきた。

東日本大震災の経験を踏まえ、東北地方や宮城県内では防災に関わる学習がやはり一番の切迫感をもっている。しかし、一方で震災の恐ろしさを伝え怖がらせるだけに終わるのではなく、どこかわくわくするような発見が子供たちの中にある学習をつくりたい。

具体的には、地域を歩いて観察して災害を予測する、マップを作る、地域の方と共同して川の氾濫を考える、生徒が主体的に地域に対して何ができるかを考える、するなどの活動を挙げることができる。より高学年になれば、復興に関する活動（農地の回復、防災林の植樹など）に携わることや、切迫感をもたらす津波とか地震などの対策、震災後の人口減少などの課題解決に向けて地方活性化の取り組みをしている高等学校もある。

このような取り組みは非常に価値高いものだと言える。しかし国際理解教育、開発教育…などの○○教育はこれまで何度もブームになり都度下火になってきたというのも事実である。これは時代の流れに応じた教育的課題の性ともいえる。一過性のものにしてしまってはもったいない。これこそ持続的に実践されるべきだ。そのためには、教育的課題つまり“何”を学ばせるかに終始するのではなく、どのような“資質・能力”を“いかに”育むかという点をしっかりと念頭において教育に取り組んでいかなければならない。今回の研修では、ＥＳＤにおいてどのような資質･能力を育むべきかを考えていきたい。

１.学力の三要素とＥＳＤの関係

国内の様々な場面で、ＥＳＤの重要性が説かれ始めている。

「これからの時代に求められる資質・能力と、それを培う教育・教師の在り方について（第七次提言）」（H27.5.14 教育再生実行会議）においては、資質・能力は、与えられた課題を早く、正確に解決することに重点を置く学習から、「『なぜ、 そうなるか』という疑問をつことから始まり、発見した課題に対応するため、知識・技能を駆使して、失敗を恐れず積極的に実践し、失敗から原因を分析して次につなげる経験を積んでいくという体験型・課題解決型の学習（p4)」の重要性が述べられている。こうした学びを実現するため、課題解決に向けた主体的・協働的で、 能動的な学び（アクティブ・ラーニング）へと授業を革新し、学びの質を高め、その深まりを重視することが必要教育内容・方法の抜本的な革新が不可欠としている（p4)。そのような学習の一例として、ＥＳＤの推進が勧められ（p5）新たな教育の潮流として描かれている。

こうした動きを踏まえて平成29年度に公示された新学習指導要領の前文には、「…一人一人の児童が，自分のよさや可能性を認識するとともに，あらゆる他者を価値のある存在として尊重し，多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え，豊かな人生を切り拓き，持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる。(p15)」と述べられている。これは、自己を認識することや他者との協働を通して持続可能な社会の作り手となっていく、という道筋が示されている。平成 23 年の改定においても、「持続可能な社会」という文言がいくつか掲載され、ＥＳＤの価値を浸透させることに狙いがあったように感じられる。そこに加えて平成 32 年の学習指導要領においては、教科においてＥＳＤの価値を浸透させることから進展して、課程設計の編成（カリキュラム・デザイン）、社会との関係、資質能力といった方面で、ＥＳＤ実践の意義が認識されていることがわかる。社会との関係・社会に開

中学校学習指導要領－第 2 節社会－（２）日本の地域構成－ウ日本の諸地域－（エ）環境問題や環境保全を中核とした考察

「地域の環境問題や環境保全の取組を中核として，それを産業や地域開発の動向，人々の生活などと関連付け，持続可能な社会の構築のためには地域における環境保全の取組が大切であることなどについて考える。」

中学校学習指導要領－第 2 節社会－（４）私たちと国際社会の諸問題－イよりよい社会を目指して

「持続可能な社会を形成するという観点から，私たちがよりよい社会を築いていくために解決すべき課題を探究させ，自分の考えをまとめさせる。」

中学校学習指導要領－第 4 節理科－（７）科学技術と人間―ウ自然環境の保全と科学技術の利用－（ア）自然環境の保全と科学技術の利用

「自然環境の保全と科学技術の利用の在り方について科学的に考察し，持続可能な社会をつくることが重要であることを認識すること。」

かれた教育課程については、「こうした社会とのつながりの中で学校教育を展開していくこと、特に、子供たちが、身近な地域を含めた社会とのつながりの中で学び、自らの人生や社会とより良く変えていくことができるという実感を持つ」ことについて述べる中で、「ユネスコが提唱する持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）や主権者教育も、身近な課題について自分ができることを考え行動していくという学びが、地球規模から身近な地域の課題の解決の手掛かりになるという理念に基づくものである」としている。資質能力、総合的な学習の時間との関連においては、答申の「総合的な学習」について述べた部分で、「持続可能な開発のための教育（ＥＳＤ）」は、次期学習指導要領改訂の全体において基盤となる理念であると言える」とまて書かれている。

こうした資質・能力を重視する教育界の潮流は世界的な流れであり、その多くは三つの要素すなわち①基礎的なリテラシー、②認知スキル、③社会スキルに分類されている。これを取り入れた国立教育政策研究所の「21 世紀型能力」も同じく①基礎力（言語スキル、数量スキル、情報スキル）、②思考力（問題解決・発見力・創造力、論理的・批判的思考力、メタ認知・適応的学習力）、③実践力（自律的活動力、人間関係形成力、社会参画力、持続可能な未来づくりへの責任）の三つの段階で示されている。これら世界的な資質能力の代表例ともいえる、グローバルコンピテンス（OECD）PISA の中にも持続可能性が関わっていることを述べておきたい。知識・技能・態度が周りにあって、国際社会で生きていくための資質（グローバルコンピテンス）がその中心にあるとイメージすると良いだろう。

２．国際的な資質・能力の議論とＥＳＤ

日本のＥＳＤと海外のＥＳＤの姿を様々な角度から比較した上で、日本のＥＳＤの実態を捉えてみた

い。まず問いたいのは、ＥＳＤ固有の資質能力とは何か？ということである。ユネスコがこれまでどんなメッセージを発信してきたかを見てみると、もともとは平和、人権教育、市民性教育、民主教育、国際理解教育が重視されている。ＥＳＤが出てきた 1987 年以降は、ＥＳＤという価値教育はユネスコの主要な教育となっている。

ＥＳＤと親和性のある教科についても、学習指導要領への書き込み具合を検証すると、参考にしあったわけではないと思うが、だいたい日本と海外の実態は似ていることがわかる。どのような学習が為されているのかを見ると、社会・環境・経済を総合的に、地域・日本（国）・世界を総合的に、過去・現在・未来を総合的に考えることが行われているようである。また資質・能力についても、「知識を修得して、態度を変容して、行動に移す。」ということがヨーロッパでも広く実践されている。思考に関わって、批判的・創造的思考力やシステム思考（有機的に関連性を想起して考える）が重視されていると言える。

これらを踏まえた上で次のような調査結果をご覧いただきたい。

〇ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度…他者との協働やつながり、進んで参加する態度は育ったという結果が多くみられる一方、批判的思考力の成果が見えにくい。（クリティカルシンキングは“立ち止まって考える力”なので、それが理解されていない場合もある。）

〇「持続可能な社会づくり」の構成概念…多様性、連携性は高い評価が得られているが、責任制や公平性については低く。

〇生徒の変容…基礎・基本の定着には大きな変化が見られにくいが、協調性や学習への意欲の向上が確認できた。

〇学習の方法（どんな教え方をしているのか）…小・中学校では体験学習が多く、高校では探求型学習が多い。小学校も探究学習が重要だが、“体験を通した探究”が必要だ。

〇学校の変化…地域人材が参画するようになった、外部機関への開放がすすんだ、などの結果が見られた。小中だと学年を越えた関りが多くなった。

〇主体的・対話的で深い学びとＥＳＤについて…ＥＳＤは答えがない課題を取り上げることが多い。しかし、小・中学校は答えがない問題に取り組むのは難しく、今後の指導方法の一層の工夫が求められる。地域に根差した学習は小学校でも可能であり、今後も期待したい。

３．ＥＳＤの目指す資質・能力とは

総合的な学習の時間でこれまで各学校でやってきたことを、ＥＳＤの視点から意味づけしていくことが求められている。多忙な学校現場の中では、一からＥＳＤをやっていこうというのは難しい。しかし、これまでやっている内容を整理し直すことができれば、持続可能な地域社会づくりと地球的な課題の解決に結びつくはずだ。

資質・能力についても、「これをさせたい！」と資質・能力を想定してとらわれすぎてしまうことは問題だ。身につく資質・能力は子どもたちの状態を見て明確になってくる。子どもたちが持続可能な社会をつくっていこう、そのための問題はなにか…と興味・関心をもってすすんで学習していけば、自ずと能力が働く場面が出てくる。教師はそれをちゃんと見つけてあげればよい。

このように「地域に根差した探求型・課題解決型学習」という学習の在り方が資質能力を育む一つの授業の方として重視されると言える。「地域の課題を見つけ、個人またはグループで課題の検証と解決策を見出して、課題解決を提案するとともに、個人のキャリア形成（進路）に結びつけていく」という点で様々な実践に共通性がみられる。

こうした学習を進めていこうと思えば、ワークシートを埋めて提出するだけだとテストと変わらない。

生徒の創造性を生かすような手立てが必要である。ワークシートなどで学習の手助けをするにしても、「何を書かせるか」に注力しすぎるのではなく、インターネットで調べたりする手法を示してやればよいのではないだろうか。

また探究の課題を設定していくためには、例えばチャートを書かせて関心を明らかにするという方法がある。そのうえで課題を明確にし、自分でやらせてみる。要は、課題の設定、検証、実践というプロセスを教えてやるということである。ここに教師もチームの一人として関わって、「なぜそこに行くのか」「なぜそれをやるのか」を一緒に見直すつもりで参加してあげたい。これらの活動の経緯を子どもに記述させるなどして、学びの足跡を実感させたい。外部との出会い、現実社会に生きる人との出会いも課題発見の手助けとなる。

４．最後に

人類が追求すべき普遍的価値は時代の要請によって変わっていく。平和や人権は普遍的な価値であるが、重視されたのは戦後だった。途上国との貧富の格差が明らかによって、貧困撲滅が、国連人権の 10 年がはじまったことで人権も取り上げられるようになった。

ＥＳＤにおいては、そういった時代の変化に目を向けていきたい。つまり、現世代だけでなく、次世代との間の公平に怒りをもてるようになってほしい。そのための思考法がバックキャスティングである。次世代のニーズを考えるということは、直接的な感情が起こりにくいということでもある。つまり、子どもが危機意識をもつことができるかという授業づくりの課題にもつながる。そういった意味で、ＥＳＤの特徴的な思考として、長期的思考が根幹になると言えるのではないだろうか。

平成 28 年８月２日　東京ウィメンズプラザ

研修Ⅱ－１．ＳＤＧｓ理解

「持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）の達成を目指したＥＳＤの進め方」

東京大学 海洋アライアンス 海洋教育促進研究センター
主幹研究員　及川幸彦先生

１．国連・持続可能な開発目標（ＳＤＧｓ）

ＳＤＧｓは、ミレニアム開発目標（MDＧｓ）をふまえて、2030 年までに達成すべき先進国も含めた世界共通のグローバル目標として 17 の目標を設定した。４つ目に質の高い教育、４．７にはＥＳＤに関するターゲットが掲げられている。(目標４「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し、生涯学習の機会を促進する」)

しかし、ＥＳＤは目標４の「教育」だけやればよいわけではなく、より広い視野で考える必要がある。「日本ユネスコ国内委員会（教育小委員会)」では、2018 年に学習指導要領の改訂やＳＤＧｓの登場を踏まえ，ＥＳＤに取り組む教育関係者を対象にメッセージを出した。そこには、３つの柱（ＳＤＧｓとの関連、ユネスコスクールの更なる推進、ＥＳＤと学習指導要領との関連）が書かれている。まずは，ＥＳＤは新学習指導要領の基盤となる理念であり，これからは新学習指導要領の文脈でＥＳＤをどう取り組むかが重要であり、ＥＳＤに取り組むことで新学習指導要領の理念を実現することにつながる。

次に，学校現場はＥＳＤに加えてＳＤＧｓが、出たことで、教員は混乱している可能性があり、整理していく必要がある。その整合性を取る上で、「ＥＳＤはＳＤＧｓを達成するための教育」と捉えなおしていくことが確認されている。

２．ＳＤＧｓの達成に貢献する教育（ＥＳＤ）

今までは〇〇教育という名前で学校現場に複数あり、内容と教育が一緒になっているので、何をやればいいのかわかりやすかった。逆にＥＳＤは内容が書いていない。当初は、何をやる教育なのか、わかりづらいと考えられていた。

従来の〇〇教育の視点からの ESD は、教育ベースで考えた捉え方である。その全体を俯瞰するのがＥＳＤと考えてほしい。ＳＤを達成するためのＥである。その達成に向かうのであれば、防災をやってもいい、環境教育をしてもいい。ただし、環境教育だけをやればいいわけではない。ＳＤＧｓにも環境の話は出てくるが、環境だけで解決できるわけではない。山に例えれば、〇〇教育は「持続可能性」という山の登山口にあたり、すべての〇〇教育の頂にＳＤＧｓがあると考えてよい。その頂上から俯瞰しｙ魔の頂をめざす教育活動が，ＥＳＤと考えていただきたい。つまりＳＤを達成するためにどういう学びをするか、持続可能な社会をつくるという価値観と行動の変容を導くのがＥＳＤである。そうすると、環境だけ学べばよいというものではなくなる。それですべてカバーできるかと言われれば違う。経済、社会、環境を統合的にとらえるような学びが必要である。

一方で、学校教員以外の多くの人は、ＥＳＤというより、ＳＤＧｓで考えることが多い。世の中にどのような課題があるかを整理した 17 のＳＤＧｓのほうが一般の人にとっては、腑に落ちる。だから自治体や企業の方もＳＤＧｓを積極的にすすめている。ＳＤＧｓは世界の課題を整理したものであり、Issue(課題)ベースのとらえ方と言える。Ｅ for ＳＤということを考えれば、それは「①ＥＳＤは持続

可能な社会の担い手づくりを通じて、17 全ての目標の達成に貢献するもの。②ＥＳＤをより一層推進することが、ＳＤＧｓの達成に直接・間接につながっている。③ＳＤＧｓはＥＳＤで目指す目標が国際的に整理されたもの」ということができる（ユネスコ国内小委員会メッセージ）。ＥＳＤは「ＳＤＧｓのすべてのゴールに貢献する」ということができる。（地域や国によっては 17 以外にもあるかもしれない。）

最終的な目標をＳＤＧｓに置いたり、社会が Issue ベース、ＳＤＧｓ基盤として考えたりしていることを考慮すれば、先生たちにとっては①自分たちのＥＳＤの様々な活動が、国際的に整理された目標であるＳＤＧｓの各目標にどのように貢献しているのかを考えることが重要である。そうすることで、ＳＤＧｓによって自分自身のＥＳＤの活動に新たな意義付けや価値づけを行い、ＥＳＤの目標を明確化することができる。これまでＥＳＤの定義（ブルントラント委員会「将来世代のニーズを損なうことなく現代社会のニーズを満たす開発」）はあったが、ＥＳＤにおいて今まで何をやればわからなかった。ＳＤＧｓで明確化されたことで、ＥＳＤの方向性が明確になったと考えられる。同時に、ＥＳＤはグローバルな話であるが、それが国際社会にどのようにつながっているのか、もしくは地域とどのように繋がっているのかが分かりづらかった。しかし②ＳＤＧｓは人類共通のグローバル目標である。そのレンズを通してＥＳＤの活動に取り組むことは地域に根差した身近な ESD の活動が世界につながることであり、地球規模の問題解決に貢献したことになり，その達成のために SDGs を地域にカスタマイズすることも可能になる。（ＳＤＧｓに貢献するということは国際課題に貢献するということでもある）、さらに③この自覚と誇りをもって、学校や地域で、ＳＤＧｓを見据えながら足元の課題解決を大事に、ＥＳＤを推進していくことへの道標、と言える。

３．ＳＤＧｓを取り入れたＥＳＤの推進

ＳＤＧｓに関わる学習には４つの型がある。

①ＳＤＧｓについての学習（Education about ＳＤＧｓ）とは、ＳＤＧｓそのものがどういうものなのかを教えるやり方である。でも第一ステップであってすべてではない。ＳＤＧｓを理解させることが目的か、ＳＤＧｓを推進するための教育か、をしっかり考えさせないといけない。

②ＳＤＧｓ全体への貢献を意識した取り組みでは、一つの学校ですべてのゴールを対象に取り組んでいるところもある。しかしこの場合は、つながることを意識させるのはよいが、包括的すぎて学習が薄まる可能性もある。17 のＳＤＧｓを結ぶだけではいけないのではないか。そこで、効果的なのは、③特定のＳＤＧｓの課題に貢献する取り組みを足元から実施すること。自分の地域に関係があることに着目して具体化して実践していくことの方が、自分たちのものになってくる。うちの地域だったら…という優先順位をつけてやることがいのではないか。大牟田版ＳＤＧｓのように，学校や地域にカスタマイズしたＳＤＧｓを達成するＥＳＤを進めることが大である。（○○市版ＳＤＧｓ、○○校版ＳＤＧｓ）。また，その場合は，児童生徒の発達段階を考慮して、取り組んでいくことも大事である。

最後に，自分がやっていることが 17 のゴールのどこにつながるかを考えることは、先にも述べた通り重要であるが、このつながりは１対１対応ではないことに留意してほしい。海洋教育ひとつ取り上げても、目標 14 海の豊かさ×目標４教育で狭義の海洋教育にはなるが、そこからさらに目標８働きがい、目標 11 持続可能な都市、目標 12 生産と消費、目標 13 の気候変動など，いろいろな SDGs の目標につながる。持続可能な社会の構築にあたっては，このように現実に起きている課題に即して SDGs の各目標をイメージ豊かにつなげていくことができる人材が求められている。これからの人材育成，すなわち ESD は、つながりを認識できないことではありえない。課題、人材、社会、未来、自分がどのように繋がるのかを整理できるようにならなければならない。

平成 28 年８月２日　東京ウィメンズプラザ

研修Ⅱ－２．ＥＳＤで育みたい能力・態度

「ＥＳＤで育みたい能力・態度」

奈良市立飛鳥小学校
大西　浩明　先生

奈良と言えば

奈良市には、世界遺産が３つある。10 年前に世界遺産学習が始まったことが奈良市のＥＳＤの始まりと言え、世界遺産学習は、奈良市版ＥＳＤと考えている。つまり、世界遺産のことを学ぶだけではなく、世界遺産や地域遺産（ひと・もの・こと）を通して、持続可能な未来・地域社会について考え、実践することを続けてきた。今日は私の実践を通してお話しさせていただく。

たとえば、シカが町の中をうろうろしていて観光客はとても喜んでいる。世界的に見ても稀な地域である。でもそれは飛鳥小学校の子供たちにとっては当たり前であり、なぜそれが大事にされてきたのか、その価値はわかっていない。東大寺、興福寺について「素晴らしい世界遺産やで」と話したところで伝わらない。普段当たり前のように見ているものでも、どんな意味があるのか、どんな思いがあるのか、それを学びの中で感じていくことで、地域を見つめなおし、地域に誇りと愛着をもてるようになるのではないか。そういう思いでＥＳＤをやってきた。もちろんＥＳＤにはいろいろな切り口があるので、世界遺産学習だけでなく、さまざまな教科の切り口で実践してきたことをお話しさせていただく。

ＳＤＧｓが出るまでは、世界遺産学習やＥＳＤを何のためにやっているのか、と聞かれれば、持続可能な社会の担い手を育てるための教育だと考えてきた。でも今は「持続可能な社会の担い手を育てることを通して、17 の目標のどれかに貢献する教育である」といわれるようになった。

１．新学習指導要領とＥＳＤとの関係

前文には、持続可能な社会の担い手を育てるというＥＳＤの内容が盛り込まれた。さらに主体的・対話的で深い学びという文言に注目が集められている。

①　学ぶ意味と自分の人生や社会の在り方を主体的に結び付けていく主体的な学び
…「大西先生なりに言い換えれば…自分事として考える」→価値観と行動の変革
②　多様な人との対話や先人の考え方（書物など）で考えを広げる対話的な学び…【どのように学ぶか】「学び合い・ねり合い」→教師が前に立って中心に立って授業するばかりではだめ、そういう時間も必要だろうけれど、子供たちの中から考えがねりあいながら出てくることが必要。
③　各教科等で習得した知識や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせて学習対象と深く関わり、問題を発見・解決したり、自己の考え方を形成し表したり、思いを基に構想・想像したりする深い学び…【ＥＳＤで何に到達させたいか】「概念的な知識の獲得」→他にも応用できるような汎用的な知識

まさに、この３つめの深い学びなどは、ＥＳＤで最終的にたどり着かせたい姿に近いものと考える。

この前の二つについては、学び方について描かれていると思うが、これはＥＳＤの学び方とまったく重なるといってよいのではないか。

主体的な学び

学ぶことに興味や関心をもち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返ってついにつなげる、ということである。

簡単に言い換えれば、「自分事として考える」ことと言える。教師は「ここが大事やねんで！」と言ってしまいがちである。これは学ぶ内容が自分事になっていないときに起こることではないだろうか。例えば 4 年生の社会科で、「いつでも蛇口から水が出るのはなんでだろう？」と考えていくことが、スタートになり、浄水場へ見学に行ったり水道局で話を聞いたりして学んでいく。しかしその学習を終えた後に、蛇口を閉めずに流しっぱなしにしてしまう児童らは、自分事になっているとは言えない。「そこまで大変な思いをして作っている水なら、大事にしなきゃ」という価値観をもって行動を変えていってこそ、自分事の学びと言えるのではないか。価値観と行動の変革につながる学びだろう。

「先生、なんで勉強しなあかんの？」という子も少なからずいる。そこに応えるよりも、私は「勉強したい」と思わせたい。知的好奇心をくすぐるような、子供の学びに即した良い教材を開発していきたい。何をネタに、何を教材とするかを、子どもに乖離しないように気を配りながら考えていただきたい。

対話的な学び

子ども同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えることを通じ、自己の考えを広げふかめる、という学びである。

これも簡単に言い換えれば「学び合い」だろう。先生が主導するのではなく、子どもたちの考えをいろいろ引き出すことが必要だ。教師はファシリテーターになって、子どもの考えをいろいろ引き出し、うまくねり合わせながら、教科の目標・内容に到達させる。しかもその最後の結論も、教師が「こうなんだね」と言わせるのではなく、子どもたちが学び合いの中から大事な部分を引き出していく。こういう対話的な学びをしようと思えば、あまり教師が前に立ってばっかりではだめではないか。もちろんそういう時間も必要だが、子どもが「自分たちで学んでいる」と感じることも大事ではないか。

自分自身との対話もとても重要。そのツールの一つが、振り返り。研修前後では何かの変化があるはずだ。自分のどこが、どんな風に変わったのかを、自分自身に問いかけることで、子どもの学びはぐっとあがる。そのための振り返りを書く活動は重要だと考える。

深い学び

習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に想像したりすることに向かう。

深い学びについては、知識を活用すると書いてある。その知識は具体的、個別の知識ではなく、応用・活用できる、汎用的、概念的な知識まで高めたい。いろんな知識を統合することで獲得できる知識のための深い学びではないかと思う。

新学習指導要領においては、「見方・考え方」がクローズアップされている。それは、各教科等の特質に応じた物事をとらえる視点や方法、言い換えれば教材や社会的事象に対する構え、アンテナということができる。見方・考え方を、指導者側がどうとらえて、学びの中にどう落とし込んでいるかが非常に重要。これを働かせることで、深い学びはより質の高い学びになるのではないかと考えている。今回の指導要領には、各教科の見方・考え方が解説に書かれている。しかし、子供たちは白紙の状態で教室にいるわけではない。我々もそうであるように、子供はそれぞれの生活経験の中で見方・考え方を身につ

けている。だから、授業を始めるときには、その時点で既有の見方・考え方を働かせて、子供たちは課題を発見したり仮説を立てたりする。それを働かせて学ぶことで、より洗練され、また汎用性のあるいろいろなところで応用・活用できる見方・考え方になる。

どのような『見方・考え方』で、どのように学習の充実を図るかについては、教科ごとにこのように書かれている。

（社会科）**問題解決への見通しをもつこと、社会的事象の見方・考え方を働かせ、事象の特色や意味などを考え概念などに関する知識を獲得すること、学習の過程や成果を振り返り学んだことを活用することなど、学習の問題を追究・解決する活動の充実を図ること。**
社会的事象の見方・考え方＝位置や空間的な広がり、時期や時間の経過、事象や人々との相互関係などに着目して社会的事象を捉え、比較・分類したり総合したり、地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること。

（総合的な学習の時間）**児童や学校、地域の実態等に応じて、児童が探究的な見方・考え方を働かせ、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習や児童の興味・関心等に基づく学習を行うなど創意工夫を生かした教育活動の充実を図ること。**
➔　各教科等における見方・考え方を総合的に働かせること、総合的な学習の時間に固有な見方・考え方を働かせること。
→　特定の教科等の視点だけで捉えきれない広範な事象を、多様な角度から俯瞰して捉えること、また、課題の探求を通して自己の生き方を問い続けるという、総合的な学習の時間に特有の物事を捉える視点や考え方

今回の指導要領は、ＥＳＤの学び方も、ＥＳＤの学びそのものも書かれているのが特徴として挙げられるのではないか。資質・能力の三つの柱には、「どのように社会・世界と関わり、より良い人生を送るか」という主体性・多様性・協調性などの学びに向かう力と人間性等、「何を知っているか、何ができるか」という個別の知識・技能、「知っていること・できることをどう使うか」という思考力・判断力・表現力等が描かれている。こういうことをカリキュラムマネジメントしていこう、アクティブラーニングしていこう、というのであるが、そこで実施される「思考・判断・表現」とは、ＥＳＤ的な問題解決プロセス、すなわち「情報を他者と共有しながら、対話や議論を通じて互いの多様な考え方の共通点や相違点を理解し、相手の考えに共感したり多様な考えを統合したりして、協力しながら問題を解決していく」というＥＳＤの学びと言えるのではないかと感じる。それは協働的な学びであり、汎用的な知識の獲得のことではないだろうか。さらに、学びに向かう力や人間性については、やはりＥＳＤの実践の後にはＥＳＤ的な価値観と行動を変革させてほしい。すなわち「ＥＳＤの学びを通じて多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度などを育み、持続可能な社会の構築に貢献する」という、より良い自分や社会を創る態度・行動が生まれる学びにしていこうとしている。これはすなわち新学習指導要領の改訂に即しているのではないか。

２．ＥＳＤで育みたい見方・考え方、資質能力、価値観

ＥＳＤで育てたい見方・考え方とは何か。国立教育政策研究所によれば、６つある。Ⅰ多様性「いろいろある方がいい」Ⅱ相互性「つながっている、つながりを尊重する」Ⅲ有限性・循環性「限りがある、それが（なくな

ることなく）循環していればいい」Ⅳ公平性「世代内と世代間の公平を考えていることが重要」Ⅴ連携性「異なるものとも妥協点を見出し協働する」Ⅵ責任性「最後までする、協力する、リーダーシップを発揮する」。これを視点と概念とで分けると右のような表になる。

	多種多様な要素からなる視点	互いに作用し合う視点	ある方向へ変化している視点
自然環境･社会環境【実態概念】	多様性	相互性	有限性 循環性
人･集団の意思や行動【規範概念】	公平性	連携性	責任性

この視点は取り扱う教材とその扱い方によって、見方が変わってくる。

ＥＳＤで育みたい資質・能力については、５つ挙げられている。①Critical Thinking（批判的・代替案の思考力）②Systems Thinking（多面的・総合的思考力）③長期的思考力（100 年先、500 年先を見越して考える）④コミュニケーション力（対話を通して考察を深める・広げる、開かれた態度で他者を包摂する）⑤協働的行動力（他者と協力して、また責任をもって行動できる）。

ＥＳＤで育みたい価値観は、見方・考え方の背景になる、言うなれば生き方の基準である。①世代内・世代間の公正②生物多様性などの自然環境の保全を尊重する③互いの人権・文化を尊重するの三つである。ＥＳＤは価値観や行動を変革させたいという学びだから、とても重要。しかし、人は知識として理解していても、行動できないことがよくある。例えば、食品ロスのことを考えれば、牛乳は奥のものではなく手前のものを買うべきだ。それぞれで大事だと思うことやらなければならないなとなる。そうしなければいけない、そうしなきゃ、と思うけれど、そう行動できないことは、たくさんある。でも、それをしていかないと持続可能性はうまれない。行動の背景となるものが価値観。価値観を身に着けることによって、最後に行動を変えていくことができる。見方・考え方や資質・能力より、もっと人の根幹に関わるものが価値観。

ＥＳＤの学び方は、課題の発見・教師による提示、既有の見方・考え方を用いた仮説の作成、調査活動、調査結果に基づく話合い、留保条件付きの解決（自分の生き方への問い直し）、発信・行動化していく。それを協働的に学習し、活動として続けていくこと、さらに最終的にその学習がＳＤＧｓのどれかに達成に貢献することができれば、ＥＳＤの授業になるのではないか。

３．ＥＳＤの授業を構想する際には、

記事一つでも、教材のとらえ方、学習の持ちようは様々。人によって捉え方も様々。だからこそ教員も、協働的に学び合うことは大事ではないだろうか。その題材（教材）を通して学習することで、どんな見方・考え方を働かせることができるのか、どんな資質・能力を育てることができるのか、どのように価値観を変革させようとするのか、最終的にどのような行動化を求めようとするのか、を考えることでＥＳＤの指導案はできると考えている。

平成 28 年８月３日　東京ウィメンズプラザ

研修Ⅱ－１．ＳＤＧｓ理解

「ファシリテーション力を身に付けよう」

元八名川小学校校長　日本ＥＳＤ学会副会長
手島　利夫　先生

１．ファシリティーチャーになろうじゃないですか。（その役割等について）

ファシリティーチャーは学びの進行役。その役割は、ＥＳＤに対する重要性を実感させ（知識・理解）、やる気、パワーを育て（意欲）、どのように進めたらいいのか納得してもらい（見通し）、（内発的な）実践への強い意志が育てることにある。加えて、目標に向かう学びの場をつくり（温かな人間関係）、みんなを参加させ（問題の共有）、ひとりひとりの意見を活かしつつ、合意（方向性）を形成し、視点をもって学ばせ、対話を通して（協創的に）学び合わせ、実践への意欲を高めるとともに、学びの中で、成長を実感させる　ことも重要である。これは、「主体的・対話的で深い学び」そのものでもある。今回の研修参加者がＥＳＤファシリテーター、ＥＳＤファシリティーチャーとなっていただきたい。

ハーバード大学のエリック・マズール教授は、「授業で残った内容の半年後の記憶」を調査し、ラーニング・ピラミッドを提示した。実際の数値については検討の余地があるものの、講義を聴くだけでは５％、読書で１０％、視聴覚機材を使うことで２０％、デモンストレーションを行うことで３０％、グループ討議で５０％、自ら体験することで７５％、他者に教えることで９０％と、自律的な学習ほど学んだことが頭から離れにくいと言える。

２．激しく変化する社会の中で、学校教育をどのように変えていく必要があるのだろうか。

近年は、社会そのものが大きく変わってきており、どのような未来を創るのかは教育にかかっている。通信・情報、文化、食べ物、災害、世界状況、気候、少子化、テレビ、交通、AI など変化の激しい時代であり、グローバル化の時代である。これらは便利であるが、危うい時代であるともいえる。子供たちの生きていく世界を持続不可能にしかねない多くの課題をはらんでおり、この世界でどのような教育を進めればよいのか、それを考え取り組むのがＳＤＧｓであり、その中心にあるのがＥＳＤである。

そのためには、実際に社会がどのような状況にあるのか、子供たちが実感を伴って理解する必要がある。「地球温暖化」というが、地球は本当に温暖化しているのか、どのくらい温かくなってるのか、何が原因なのか、温かくなっても、喜ぶ人もいるのではないか、暖かくなることで何が困るのかを捉えさせなければ、いつまでも他人事で終わる。こうした変化の激しい時代では、学ぶことも大きく変わる。これまでは少しずつ成長する穏やかな世界だったが、これからは激変の時代、グローバル化のじだいである。これまでは正解があったが、正解がどんどん変わる時代になる。これまでは 20 世紀型能力として記憶力や情報処理能力が必要とされていたが、これからはどのような「21 世紀型能力」が求められるのか。少なくとも、今までのどおりの読み書きそろばんの基礎学力だけでは不十分である。

３．日本の政府はこのことをどのように考えているのだろうか。

学習指導要領では、10 年前の指導要領では、個人の成長を目指していた。すなわち「児童の人間として調和のとれた育成を目指し・・・（個性を生かす）」が目的だった。しかし新学習指導要領（前文）においては、個人の成長「自分の良さや可能性を認識する」とともに、社会人としての役割「あらゆる他

者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協議しながら様々な社会的変化を乗り越え」が求められ、その結果、個人の成長として「豊かな人生を切り開」くことと同時に、社会人としての役割として「持続可能な社会の創り手となる」ことが求められている。この指導要領の考えはＥＳＤそのものである。

具体的に指導要領を見ると、知識・技能だけでなく、「(厳しい時代をたくましく)「生きる力」を育むこと、すなわち①課題解決に必要な思考力・判断力・表現力、主体的に学習に取り組む態度、多様な人々との協働（コミュニケーション能力)、②豊かな心や創造性（道徳)、③健康で安全な生活と豊かなスポーツライフ（17 ページ）を育む必要性が述べられている。そのためには学んだ知識を活用し、①教科横断的に学ぶ（18～19 ページ）（カリキュラム・マネジメント）や、②主体的・対話的で深い学び（問題解決的な学び）（22 ページ）が求められる。このような教科横断的で、主体的・対話的で深い学びを実現するには、各教科や生活科・総合、特別活動、外国語、道徳などをつなげて学ぶことが求められる。例えば、ＥＳＤカレンダーを作成する際にも、環境の教育、国際的な教育、多文化の教育、人権委の知の教育という「持続可能な世界のための４つの視点（教科領域の学びをつなぐ４つの視点）がそれぞれ関連づいていることを意識したい。環境の問題は自分たちだけが取り組んではダメで、国際的な今日 ry 区のシステムが必要であり、国際的な教育のためにはお互いの国の文化や生き方を尊重できなくては協力できない、いろいろな国の文化や生き方を知る土台には、人間として尊重し合う信頼関係が大切であり、人が人として生きていくには環境が重要である。この４つの視点はそれぞれ関連し合っている。

指導要領の話に戻すと、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善によって、生きる力の育成をめざすのが新学習指導要領である。すなわち、基礎的・基本的な知識・技能の習得と活用、思考力・判断力・表現力等の育成、主体的学習態度や多様な人々との協働、豊かな心や創造性の涵養が実現しなければならない。これらを自然に身に付けるには、詰め込み教育ではいけない。それでは、主体性も、豊かな心も育ちにくい。そのために必要なのは、ＥＳＤカレンダーを工夫して学習をつなげることと、問題解決的な学習過程を重視して、その中に対話的協働的な場面を位置付けることである。

４．具体的には、何をどのようにすればいいのだろうか。

八名川小学校では、学習過程を４つに分け、「学びに火をつける」「調べる」「まとめる・実行する」「伝え合う」とした。

「学びに火をつける」には、単元全体に関わる大きな問題意識を共有することが重要である。目標に向けて、教師の仕掛ける能力が成否を分ける。そのために「火をつける３つのステップ」を意識して指導する。３つのステップとは、①出会う…体験活動や資料をもとに基本的な事実と出会い，共有する＋体験や資料から多様な気づきや感想を共有する、②気づく…①教師が提示したり、子どもが調べたりして合った矛盾する事実や意表をつく話や資料等から疑問を感じ、書き出す、③問題意識を持つ…グループや学級全体で疑問を出し合い、分類・整理して学習問題化する＋問題について予想する、である。

「調べる」は、「計画する→調べる」というステップ。予想を立て、何時間で、どんな方法で、誰に聞いて、どこに行って、どうやって調べるか、どのようにまとめ、それを誰に伝えるかなどを調べる。

「まとめる・実行する」は、ポートフォリオ等を活用しながら、効率よくまとめる。発表練習では、助言カード等を活用する。友達と練習の交流をさせることで、説得力のある結論が導き出せる。

「伝え合う」では、〇〇報告会、八名川まつり（ＥＳＤ学習まつり）など、子どもたちが、学年や学校・地域を越えて発表したり、行動したりする場を設定する。自ら考えたことを進んで実行させる。これをコーディネートするのがファシリティーチャーの役割であろう。

平成 28 年９月 16 日　広陵町中央公民館・かぐやひめホール

研修Ⅱ－１．ＳＤＧｓ理解

「ＳＤＧｓと広陵町」

奈良教育大学　准教授
河本　大地　先生

奈良県広陵町での開催となったため、その機会と条件を生かすべく、広陵町を事例に「身近な地域の学習」を通じて SDGs（持続可能な開発目標）を理解するための方法を中心とするワークショップを行った（図１）。

まず、SDGs 策定に至るまでの経緯と、ESD の概要を述べた。これまでの日本のかかわりや、従前の MDGs（ミレニアム開発目標）から何が変わったのかを中心に扱った。

図１　ワークショップの様子

図２『わたしたちの広陵町』

次に、広陵町教育委員会が発行している小学生向け副読本『わたしたちの広陵町』(2016 年改訂版、図２）を使って、SDGs の 17 目標（ゴール）に関わる題材を探すワークショップを行った。社会科の「身近な地域の学習」では、こうした市町村単位の副読本が主に小学校３年次において使用されることが多い。４年次や５・６年次の社会科、そして総合的な学習の時間や理科などでも使われることがある。中学生向けの副読本が編まれることもある。これらを SDGs の観点でみることは、ローカルとグローバルをつなぐ学びを創出するうえで意義がある。

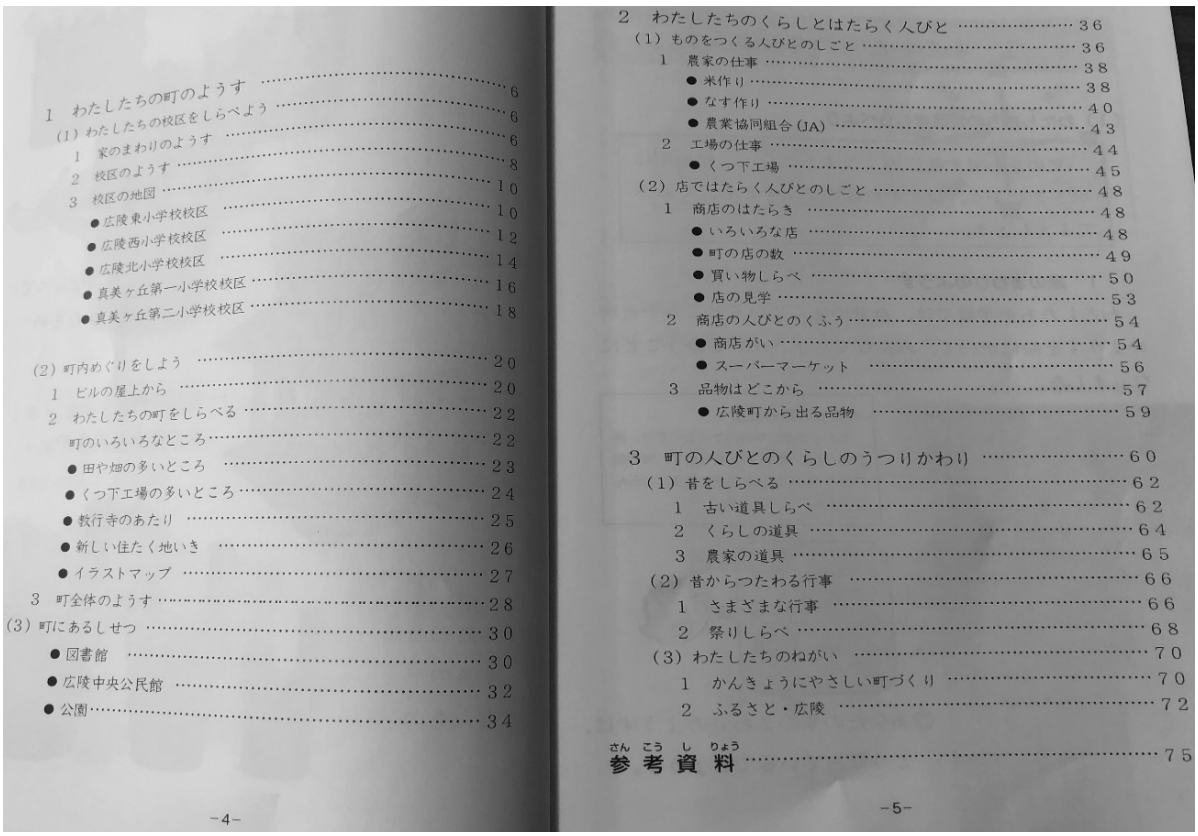
表１に、受講者が SDGs の 17 目標と関連すると考えた同書の項目を、各目標のロゴとともに示す。図３は同書の目次である。

以上の結果から、受講者は SDGs の 17 目標がいずれも何らかの形で『わたしたちの広陵町』の内容と関連していると考えたことがわかる。ただし目標によって著しく多寡があり、目標 11「住み続けられるまちづくりを」が突出している一方で、目標１・２・５・６・13・14・16 は１項目ずつしか出ていない。最も該当項目を探すのが難航したのは、目標５「ジェンダー平等を実現しよう」である。「町の人びとのくらしのうつりかわり」の「おかあさんが子どものころの学校（1985 年ごろ)」に掲載されている、体育行事と思われる写真において、運動場で女子だけが何かの踊りを披露している様子が該当すると判断された。

特筆されるのは、地域の伝統行事や歴史について扱われた項目が、目標 1「貧困をなくそう」、目標 2「飢餓をゼロに」、目標 6「安全な水とトイレを世界中に」、目標 16「平和と公正をすべての人に」といった、主に途上国・地域を対象とし MDGs から引き継がれてい

表 1　SDGs の 17 目標と関連する『わたしたちの広陵町』の項目

1 貧困をなくそう	・昔からつたわる行事	10 人や国の不平等をなくそう	・町にあるしせつ ・昔からつたわる行事
2 飢餓をゼロに	・百済百姓一揆　…参考資料　私たちの町の歴史	11 住み続けられるまちづくりを	・くつ下工場 ・町にあるしせつ ・商店のはたらき ・昔からつたわる行事 ・ごみゼロ社会をめざして…かんきょうにやさしい町づくり ・馬見古墳群と葛城氏　…参考資料　私たちの町の歴史
3 すべての人に健康と福祉を	・公園 ・町にあるしせつ ・ごみゼロ社会をめざして　…かんきょうにやさしい町づくり	12 つくる責任つかう責任	・くつ下工場 ・農家の仕事
4 質の高い教育をみんなに	・町にあるしせつ ・町の学校の歴史　…町の人びとのくらしのうつりかわり	13 気候変動に具体的な対策を	・農家の仕事
5 ジェンダー平等を実現しよう	・おかあさんが子どものころの学校（1985 年ごろ）　…町の人びとのくらしのうつりかわり	14 海の豊かさを守ろう	・かんきょうにやさしい町づくり
6 安全な水とトイレを世界中に	・昔をしらべる	15 陸の豊かさも守ろう	・米作り ・なす作り
7 エネルギーをみんなに そしてクリーンに	・昔をしらべる ・ごみゼロ社会をめざして　…かんきょうにやさしい町づくり	16 平和と公正をすべての人に	・町にあるしせつ ・昔からつたわる行事
8 働きがいも経済成長も	・くつ下工場 ・農家の仕事 ・広陵町から出る品物	17 パートナーシップで目標を達成しよう	・町にあるしせつ ・農業協同組合（JA）
9 産業と技術革新の基盤をつくろう	くつ下工場 ・品物が届くまで　…品物はどこから		



1　わたしたちの町のようす …… 6
（1）わたしたちの校区をしらべよう …… 6
1　家のまわりのようす …… 6
2　校区のようす …… 8
3　校区の地図 …… 10
● 広陵東小学校校区 …… 10
● 広陵西小学校校区 …… 12
● 広陵北小学校校区 …… 14
● 真美ヶ丘第一小学校校区 …… 16
● 真美ヶ丘第二小学校校区 …… 18
（2）町内めぐりをしよう …… 20
1　ビルの屋上から …… 20
2　わたしたちの町をしらべる …… 22
町のいろいろなところ …… 22
● 田や畑の多いところ …… 23
● くつ下工場の多いところ …… 24
● 教行寺のあたり …… 25
● 新しい住たく地いき …… 26
● イラストマップ …… 27
3　町全体のようす …… 28
（3）町にあるしせつ …… 30
● 図書館 …… 30
● 広陵中央公民館 …… 32
● 公園 …… 34

2　わたしたちのくらしとはたらく人びと …… 36
（1）ものをつくる人びとのしごと …… 36
1　農家の仕事 …… 38
● 米作り …… 38
● なす作り …… 40
● 農業協同組合（JA） …… 43
2　工場の仕事 …… 44
● くつ下工場 …… 45
（2）店ではたらく人びとのしごと …… 48
1　商店のはたらき …… 48
● いろいろな店 …… 48
● 町の店の数 …… 49
● 買い物しらべ …… 50
● 店の見学 …… 53
2　商店の人びとのくふう …… 54
● 商店がい …… 54
● スーパーマーケット …… 56
3　品物はどこから …… 57
● 広陵町から出る品物 …… 59
3　町の人びとのくらしのうつりかわり …… 60
（1）昔をしらべる …… 62
1　古い道具しらべ …… 62
2　くらしの道具 …… 64
3　農家の道具 …… 65
（2）昔からつたわる行事 …… 66
1　さまざまな行事 …… 66
2　祭りしらべ …… 68
（3）わたしたちのねがい …… 70
1　かんきょうにやさしい町づくり …… 70
2　ふるさと・広陵 …… 72
参考資料（さんこうしりょう） …… 75

図３『わたしたちの広陵町』の「もくじ」

る目標につながると考えられたことである。これは、広陵町の過去に、現在の途上国・地域のおかれている状況が重ねられたと解釈できる。身近な地域の開発（発展）の軌跡や過去の人々の願いに、現在の途上国・地域との共通性があると考えることで、ローカルとグローバルをつないだ学びが実現できる。

地場産業について扱った項目である「くつ下工場」が該当する SDGs の目標が多いことも、注目に値する。長い歴史をもつ地場産業について、ローカルな視点だけにとどまらない価値づけができる点も、SDGs をとりいれる利点と言える。

さらに、広陵町は香芝市にまたがる真美ヶ丘ニュータウンなどの住宅団地と旧来の農村地域とに二分される。住宅団地で育つ子どもにとっては、靴下工場のみならず農業なども縁遠い存在になりがちである。しかし SDGs の目標と照らし合わせると、目標 12「つくる責任つかう責任」や目標 13「気候変動に具体的対策を」、目標 15「陸の豊かさも守ろう」、目標 17「パートナーシップで目標を達成しよう」など多くの箇所に農業関係の項目が位置づく。学びの動機付けや広がりに活用することも可能性として考えられる結果となっている。

このように、地域教材を通じて SDGs を理解する、あるいは地域学習に SDGs をとりいれることは、身近な地域の成り立ちや在り方を多角的にみることになる。それはまた、地域学習に世界の課題について考えるための基盤づくりという役割を付与し、その観点から再構成することにもつながる。

研修Ⅱ－２．ＥＳＤファシリテーション

「主体的に学ぶ授業づくり」

元奈良市立都跡小学校校長
植島　佳子　先生

主体的学びを妨げるものは何だろうか。教室では、様々な理由が挙げられる。例えば、話すのが苦手な子が多い、なかなか手が上がらない、細かく全部教えた方が安心、授業進度が遅い、などである。結果、教師主導や一問一答式の授業が多くなる。

そもそも、主体性とはどんな姿だろうか。「主体的に」とは、自分の意思・判断にもとづいて行動する様、活動の中心となる様、のことをいう。加えて授業では能動的でもありたい。つまり、自分から積極的に働きかける（対話したり、コミュニケーションしたり、体験したり、書いたりする姿）ことである。これらは、表情、しぐさ、姿勢、かたり、視線、笑顔（わかった！）などから感じることができる。こうした姿を生み出すためには、説明に終始するのではなく、子供たちに意見を求め、フロア形式を用いて対話していくことが必要ではないだろうか。

よく言われることに、「一時間の中に 3 回の波をつくる」というのがある。同じ授業、同じテーマでは一時間の集中はもたない。そこで三回程度違う活動を取り入れよ、ということである。1 回目は「認識の時間」であり、ここでメインターゲットを一つに絞り、学ぶことについて見通しを持つ。2 回目は「対話の時間」であり、メインターゲットを子供たち自身につかませるような思考し表現する機会である（共同的に学習したり追う論したり、思考過程をノートに残したりする場面）。3 回目は、「内在の時間」であり、振り返りを通して自分の変容を知り、次の学ぶ意欲をもつ時間である。

１．主体的な学びの根底には学級づくり。

上記の理由にあるように、教え込むと安心してしまうものである。しかし、完璧を目指して教え込むことがよいわけではない。みんなで答えを考えて、話し合いながら結論を導いていくような授業に、自分自身も話さなければならないのだ、という状況にみんなの前で慣れていくことが大事。そういうクラスの雰囲気が授業を作っていくことを考えれば、主体的な学びの根底にあるのは学級づくりではないかと考える。

それでは、どのような学級づくりを行っていけばよいのか、を以下に数点にまとめる。

まず一つ目は学習規律である。学習規律は最低限のものとして大事にしていかなければならない。。ルールがないと子供は安心して学校に通えないからである。例えば、“立った声”であいさつをすること、相手を意識した話し方・聞き方を考えさせ姿勢の育成などは対話を意識した学習規律である。こういう姿勢は、すでにできている子に焦点化させてやると、良いお手本として他の児童も学んでいく。話しにくい子は早めにあてる（一回話すと次も話しやすい）などの支援も必要だろう。最近では「話型」を意識した学級も多い。一定の効果があるので有効に利用すればよいが、すべての場面で…と考えるよ

りも、必要な時に使う、程度で考えておいた方が良いだろう。それこそ型にはまった対話しかできなくなってしまう恐れもある。

二点目に、学級に、受容の雰囲気があるということである。失敗することもある。しかし、それに対して周りの子がどのように反応するか。下品な笑いではいけない。周りの友達にその子自身が安心してゆだねることができるような関係づくりが求められる。

このような教室をつくっていくための教師の関わりとしては、大きく二つの手立てが考えられる。「子どもの思いや考えを引き出す（渡す、教えるではない)」ことと、「一人一人の思いや考えをつなぐ」ことである。

「引き出す」ためには、①考えたくなる課題の設定と提示、②自分で決定する場の設定、③学び合いにむけて発言の準備、④山場の揺さぶり、⑤個に応じた指導・支援、⑥大事なことは子どもの言葉で言い換える、などの具体的な手立てが考えられる。

また「つなぐ」ということは、子どもを生かすことで、子ども間の信頼が生まれ、さらに任せることができ、周囲の友達や教師から承認・称賛され、自信をもち、自主性が育まれ…と継続的に主体的な学習はつくられていくことを意図している。具体的には、①深め合う場での説明を意識させる声かけ、②思考する場の設定、③一問一答式の克服、④構造的な板書、⑤子どもの言葉の中につなぐポイントを見出す、などがあげられる。

これらの「引き出す」「つなぐ」といった手立ての中で、ほめることによってさらに子どもを支援する場合も多く考えられるが、その際には「個をほめる」のではなく、「個の伸びをほめる」ということを大切にしたい。個々の成長を認め、個々の思いを引き出し、共有していくことを大切にするということである。また両方に通じて子供の言葉を生かす、という点が挙げられる。「良い！と思ったことを自分の言葉でメモしてごらん」というように、自分なりに言い返させていくことで考えは引き出され、つながっていく。自分の言葉でかけっということが「つなげられた」ということである。

教師と児童との関係づくりについても、少し述べておきたい。「鵜飼い型コミュニケーション」の教室では、はじめは先生と子供がつながっていることが条件である。しかし、中にはなかなかつながりにくい児童もいる。その場合には、「ネット型コミュニケーション」という甲地が有効だ。B 児、C 児を通じて A 児の情報が教師に入るということである。逆に B や C にメッセージを依頼することもできる。ここから A を支援しながら B、C と教師の関係も深まる可能性がある。

２．授業づくり　授業はゴールから作る「ドラマとしての授業」

授業を料理に例えると、「どうやってこの栄養を食べさせるか」を考えることである。まずは、素材の栄養や特徴を知る必要がある。授業においては、教材研究・教材の内容の意味を知ることである。ここでは、どんな目的、目標で教えるかを理解すること、教科書以外のプラスアルファの内容・知識を得ることも積極的に行いたい。

教師は、学ぶ場を作り、学習内容を決め、学ぶべき方向性を決め、子供たちが必要な栄養を摂取すると同時に、「誰とどういう場所でどうやって食べるか」までを考えることが教材研究である。よりおいしく食べるには、みんなで食べたほうがおいしいのと同様、「どのように学級集団での学びを作っていくか」までを含めて考えていく必要がある。

授業は 4 段階で考えると良い（課題をつかむ、自力解決、学び合い、ふりかえり)。その中に、めあて、見通し、自分で考える、交流する、まとめる、ふりかえる、を位置付け、先述の 3 つの波、認識の時間・対話の時間・内在の時間を位置付けると良い。

①課題をつかむ

導入時に多く設定される「ねらい」「めあて」そして授業終了時の「まとめ」の整合性について、考えてみよう。「ねらい」はどんな力をつけさせるのかを示したものであり、「めあて」は学習後に実現された子供の姿を具体的に表記する。「まとめ」はその授業で分かったこと、明らかになったことである。板書には、既習学習、めあて、学習活動の可視化、まとめなどを記述する。

「めあて」がないと、指導内容が広がりすぎ、指示が多くなりやすい。そうかといって、児童に一から設定させるとなかなか定まらないことも多い。そういう時には例えば、必ず身に付けさせたい事項を提示し、その上でどのように取り組むかを考えさせるのも一つの方法だ。例えば算数の学習のめあてで、「きまりをみつけて…」の後を考えさせる（考えよう、決まりを使ってみよう、決まりを使って計算しよう）といった具合である。「めあて」は、問題解決型（…を見つけよう、調べよう、考えよう）、課題達成型（…できるようになろう）、教師説明型、に分かれる。

②自力解決の時間

「脳みそに汗をかく」ようなアクティブな学びを作りたい。子どもは書きながら考え、考えながら書くものなので、ノートは“思考の作戦基地”であることを体感させたい。そこで練った考えを発言によって共感し合う。発言には四相（音声、ノート、表情、音読）がある。すでに何を言うべきか用意されている発表と違い、発言はその場で考えて出せる言葉である。書くことは体内語を引き出すので、自分の考えと向き合い、理解を深めることができる。より思考を促すノート作りのためにも、視点を定めさせたり、反論、予想を書かせたり、文字数を規定したり、キーワードを入れさせたり、などの手立てが感がられる。

自分の言葉で詳しく具体的に書けるよう、書くことに慣れることが大事である。高学年では読み手、効果を意識して書くことも重視したい。。

③学び合い

個人・グループ・全体（可視化）と様々な学び合いがあるが、いずれも変容がキーワードである。アクティブラーニングは授業づくりの視点であり、大切なのはアクティブラーナーを育てること、つまり授業後も自ら他者と関りながら学び続けられる資質・能力をもった人を育てるということを目的としたい。現行の学習指導要領でいえば、見通し・振り返り・言語活動をしっかり行おうということである。旧来の伝達型の授業ではなく、子供たちに考えさせたり、友だちと関わったりする活動を通してコンテンツ・ベース（知識・技能）だけではなくコンピテンス・ベース（思考・判断・表現）の力を育み、そして能動的に学び続けられる子どもを育てていくことを求めている。

対話に必要な言語スキルを身に付けさせたい。説明する、質問する（自分なりに解釈するときに質問が生まれる。「つまり」を使って説明させるとわからないところが見えてくる）、主張する、反論する、などである。このような話し合いをすることを目的とするのではなく、その話し合いの結果「どうするか」まで考えさせたい。一番良いと思った意見を選ぶ、参考になった言葉をメモする、たくさん出し合う、違う意見をまとめる、相違点を見つける、そのような指示をすることができれば、子どももなにをすればよいのかが明確になる。

④ふりかえり

何を学んだか、何を理解したか、をふり返る。めあてに照らし合わせて、わかったことを書くのだが、そのときには、「なぜわかったのか」まで書かせたい。また、変容を見取るためには、「新しく気づいたこと」「自分と違うと思ったこと」まで書かせると良い。

平成 28 年８月 24 日　長崎県勤労福祉会館

研修Ⅱ－１．ＳＤＧｓ理解

「ＥＳＤティーチャープログラム　－　ＳＤＧｓ」

福岡教育大学　教授
石丸　哲史　先生

１．ＥＳＤの本質的な問い

ＥＳＤに求められることは学習者が次の４つの段階を踏めるようにすることである。すなわち、

１．知る（知ろうとする）＝持続不可能な事実、実態、状況の理解、

２．わかる（わかろうとする）＝持続不可能になった要因、背景、メカニズムの理解、

３．できる＝どうすれば持続可能かという課題を解決できる資質や能力、

４．やる＝行動意欲、

という 4 段階である。こうしたステップを踏むようにするためには、【ＥＳＤの本質的問答】を学習者と対話的に行っていくことが必要になるだろう。それは

・持続不可能性に気づくか気づかないか
・この持続不可能性が問題であると思うか思わないか
・どうすればこの問題をかいけつできるかと考えるか考えないか
・この課題方法を思いつくか思いつかないか
・解決に向けてやるかやらないか

である。例えば、「究極の持続不可能性」である災害の持続不可能性を断ち切るためには、教育が取り組むことで、災害に対する“持続可能ボケ”を解決する必要がある。多くの被災者が「なぜ逃げなかったのか」という質問に対し、「知っていたが備えていなかった」と答えている。ＥＳＤによって、地域のレジリエンス（復元力・回復力）と国家のレジリエンスを向上させ、防災力を高める必要があるが、特に地域のレジリエンスにおいては、共助や近助が重要であり、これらは教育によって育まれると考えられる。

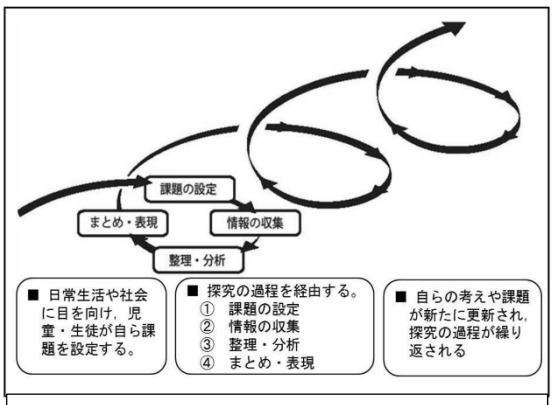
２．学習指導要領前文・総則に掲げられた意味

持続可能な社会の創り手を育成するならば、各教科・領域は何ができるかという問題意識で考えていかなければならない。つまり、ＥＳＤは特定の教科・領域ではなく、持続可能な社会をめざした教育全体ととらえていただきたい。それは、教科・領域の論理や使命を越えた視角が求められているからであるが、一教科・領域でこの教育課題を解決できるものではない。現実の社会では教科の枠組みで仕事をすることはない。持続可能な担い手を育てる上では、教科横断的にみていくことがＥＳＤには求められる。持続可能な社会の追求を縦軸、教科等を横軸としてとらえること、教科横断的にＥＳＤを捉え、実践していくことが求められる。

さらに、平成 29 年度に公示された学習指導要領総説（１改定の経緯及び基本方針（１）改定の経緯）には「…急激な少子高齢化が進む中で成熟社会を迎えた我が国にあっては、一人一人が持続可能な社会

の担い手として、その多様性を原動力とし、質的な豊かさを伴った個人と社会の成長につながる新たな価値を生み出すことが期待されている」とある。これまでは“自己実現”が学習指導要領の大きな目標であった、これからは“持続可能な社会の構築“が目標となるといってもよいのではないだろうか。同様の意味で、探究のスパイラル（課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現）のゴールは持続可能性　＝持続可能性を追求することによる持続可能性の追求が探究である。

総合的な学習の時間における児童の学習の姿



文部科学省「学習指導要領解説　総合的な学習の時間編」,p9

○逆向き設計

ＥＳＤの学習展開は、持続可能な社会の構築をゴールの一つとした逆向き設計の教育課程が適切ではないかと考えられる。西岡香奈枝（2005）「ウィギンズとマクタイによる『逆向き設計』論の意義と課題」による考え方である。

西岡氏の考える逆向き設計論の課題は、重大な観念を具体的に明らかにすることだった。ＥＳＤにおいてその課題は「持続可能性」と言え、明確になっていることで、この課題を乗り越えることができる。逆向き設計論を取り入れるということは、カリキュラムも生徒の思考も、バックキャスティング的に考えるということである。持続可能な社会の構築のために、どうあらねばならないか、そのために何をしなければならないか、いま何をしなければならないかを考えることでカリキュラムを形成し、学習者に問うことで担い手を育てていくことになる。

○ＥＳＤ的「主体的・対話的で深い学び」とは

平成 29 年度に公示された学習指導要領において、知識及び技能、思考力・判断力・表現力、とならんで、学びに向かう力・人間性という柱が明記された。これをＥＳＤでとらえるならば、「持続可能性を追求する力・人間性等」と言えるだろう。これは、どのように「ひと・こと・もの」と関わり、持続可能な社会づくりを追求するか、ということと言える。

ＥＳＤに関わって、内容を理解していくことはもちろん、「どのように」という方法知も学んでいく必要がある。そこで着目されるのが、国立教育政策所[1]（2012）が定めた、ＥＳＤの構成概念である。

表２　「持続可能な社会づくり」の構成概念の関係

視点 ＼ 上位概念	①多種多様な要素からなる視点	②互いに作用し合う視点	③ある方向へ変化している視点
[1]人を取り巻く環境（自然・文化・社会・経済など）に関する概念	「多様性」	「相互性」	「有限性」
[2]人（集団・地域・社会・国など）の意思や行動に関する概念	「公平性」	「連携性」	「責任性」

これからの社会は、１いろいろある、２関わりあっている、３限りがある、４一人一人大切にするべきだ、５力を合わせていくべきだ、６責任をもって、・・・取り組んでいくべき社会であると言い換えていると考えられる。そのような社会で生きていくために、身につけたい力すなわち「ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」を身に付けていくことが必要とされている。

このように構成概念と能力・態度は、相関的に捉えることが重要であり、またこれからの持続可能な社会のつくり手となっていく上で求められる要素と捉えたい。

[1] 国立教育政策研究所（2012）「学校における持続可能な発展のための教育（ＥＳＤ）に関する研究最終報告書」

1批判的に考える力「他にいい方法はないか？」…合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、ものごとを思慮深く、建設的、協調的、大体的に思考・判断する力。ゴールに向かうための代替案をいかに多く出せるかが重要になってくる。

2未来像を予測して計画を立てる力「これからどうなるのだろう？」…過去や現在に基づき，あるべき未来像（ビジョン）を予想・予測・期待し，それを他者と共有しながら，ものごとを計画する力。バクキャスティングに関係している。予測不可能ではなく、予測困難なのである。だから予測に努めないといけない。

3多面的、総合的に考える力「…ということは？」…人・もの・こと・社会・自然などのつながり・かかわり・ひろがり（システム）を理解し，それらを多面的，総合的に考える力。ホリスティックアプローチによって、様々な事象を関連付ける。

4コミュニケーションの行う力「どう思う？」…自分の気持ちや考えを伝えるとともに，他者の気持ちや考えを尊重し，積極的にコミュニケーションを行う力。

5他者と協力する態度／共同的思考力「一緒にやろう」…他者の立場に立ち，他者の考えや行動に共感するとともに，他者と協力・協同してものごとを進めようとする態度

6つながりを尊重する力「…のおかげで」…人・もの・こと・社会・自然などと自分とのつながり・かかわりに関心をもち，それらを尊重し大切にしようとする態度

7進んで参加する力／行動力「やってみよう！」…集団や社会における自分の発言や行動に責任をもち，自分の役割を踏まえた上で，ものごとに自主的・主体的に参加しようとする態度

３．ＥＳＤ実践のための 10 のポイント

①「～教育」とはあえて言わない。

…ＥＳＤは教科ではない。○○教育は教育課程における分類に過ぎない。子供たちが学ぶのは、○○学習であり、それは環境や平和や、国際理解や気候変動などが入り混じって実践されていくものである。

②ＥＳＤは新たなことをやるのではなく、教科内容の「再編」である

…新たなことをやるのかと考えると教師の負担は大きい。しかしこれまでの学校ごとの取り組みをＥＳＤの枠組みで再構成し、持続可能性を位置付け，差し込むことと捉えた方がやりやすい。

③各教科・領域へ視野を広げる。

…２は、教科間においても同じことが言える。総合的な学習だけでＥＳＤが収まらないことがある。社会科や理科などの実践は多いが、国語や算数など他の教科においても、一度持続可能性という観点で見てみると実践の幅は広がるのではないか。

④発達段階を堅持しながらもリアリティから逃避しない

…リアリティを追究することがＥＳＤの特徴。発達段階を堅持しながらも本物に出会うための冒険もいとわない。なぜなら、SD には子供版事象というものはあり得ない。大人にとっても子供にとっても、持続不可能な事態は平等にやってくる。（もしかすると、子供の方がその影響は受けるかもしれない。）事実を一部しか見せなかったり、わかりやすく丁寧に書き換えて提示したりすることで、リアリティが失なわれている可能性を留意すべきだ。例えば、生活科としては，命の尊さと責任をもって飼育させることの意義を伝えるために飼っていたザリガニを観察の後に元の水路に戻すことはありうるが、生物多様性という観点から考えれば、必ずしも正しい判断とは言えない。

⑤内容面だけでなく方法面にも広げる。

…国立教育政策研究所（2012）は、持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだすための視点とこれを

解決するために身に付けたい力を示している。「ＥＳＤの視点に立った学習指導で重視する能力・態度」は「方法知」に相当する。ＥＳＤは，コンテンツとコンピテンシーによって構成されている。持続可能な社会の担い手は、内容知も、また方法知も身に付けておくべきである。

⑥かかわる・つなげる・むすびつける

…持続不可能な事象は，さまざまな要素が複雑に関係しているため、持続不可能な事象を理解するには、自然科学から人文科学，さらには社会科学の各専門分野の知識が必要になる。さまざまな要素を繋げ，関わらせ，結び付けていかなければならない。国立教育政策研究所（2012）は，ＥＳＤの指導を進める上での留意事項として，三つのつながり、すなわち教材，人，能力・態度をあげている。

⑦ＥＳＤの手法はグローカル・アクティブ・ラーニングである。

… “think globally, act locally”は，考えたことを地域で収束するのではなく，地球的視野をもって活動することを求めている。現在の社会は、グローバルとローカルが密接な関係にある。たとえば，先の「逆向きの台風」や西日本豪雨などは、極めてローカルな現象であるが地球温暖化といったグローバルな問題が背景にある。地域学習を踏まえた地球的課題の学習、またその逆を取り入れていくべきだろう。

⑧「知っているけどわからない，わかっているけどできない，できるけどやらない」から子どもを解放させる。

…この点については、研修Ｉにおいても、少し話をさせていただいた。教師は力が入るものである。子供たちのいいところを見せようとするあまり、強引に子どもを導いている、さらには操っているような場面も見受けられることがある。ＥＳＤは，主体的な学習でなければならない。教師の自動操縦は解除しなければならない。“子供の姿”と言われるといい姿を見せなければならないと考えてしまうが、その呪縛から脱却し、子供を操らずに子供を導く授業にしていきたい。そのためにも、「想定された活用場面と盲従的習得」を再考することが求められる。

⑨ＥＳＤのストーリーを作り，シナリオを描く

…「ＥＳＤカレンダー」は，年間指導計画を立てる際に，また，総合的な学習をはじめ，さまざまな教科・領域をＥＳＤの視点で結びつける好適なツールといえる。 このＥＳＤカレンダーをより実効性のあるものにするためには，児童・生徒が持続可能性を追求するための方途を追究するストーリーを作り，授業をデザインすることである。「ストーリーマップ」は単元計画にストーリーを持たせている。

⑩今みられる「子どもの姿」は将来へ持続可能か？ と教師は自問する。

…ＥＳＤの目的は，持続可能な社会の創り手づくりであるので，創り手としての適切な姿が来るべき時代においてみられないといけない。そのためには，単なるアウトプットの評価だけでなく，将来へのベクトルが見えるか？という問いを立てながら，プロセスの評価も必要となる。課題を教育資源とし、課題から次の社会の在り方を学んでいく姿勢が求められる。

平成 28 年８月 24 日　長崎県勤労福祉会館

研修Ⅱ－２．ＥＳＤで育みたい能力・態度

「ＥＳＤで育みたい力　大牟田市の取り組みを例に」

大牟田市教育委員会
安田　昌則　教育長

１．ユネスコスクールのまち　おおむた

平成 27（2015）年 7 月に「明治日本の産業革命遺産　製鉄・製鋼、造船、石炭産業」がユネスコ(国連教育科学文化機関)の世界文化遺産に登録された。大牟田市内の遺産としては「宮原坑」、「三池炭鉱専用鉄道敷跡」、「三池港」の三つが登録されている。この世界遺産は、８県 11 市 23 の資産で構成されている。日本が幕末～明治にかけて西洋以外で初めて近代工業化を果たし、飛躍的な発展を遂げたことを示す施設。当時使用されていた燃料「石炭」、それをもとに発展した「製鉄」「造船」を取り上げている。素晴らしい景観としても評価を受けている。この講義の冒頭に、まずこの世界遺産を取り入れた大牟田市のＥＳＤについて紹介させていただく。

大牟田市は、これら世界遺産を見てもわかる通り炭鉱の町として栄えた過去をもつ。そのことは、現在の人口減少につながり、少子高齢化という課題が生まれている。まさに持続可能な社会づくりがもとめられている町であり、ユネスコスクールの理念と一致を見た。「大牟田市学校教育振興プラン（平成 28～31 年)」では『まちづくりはひとづくりから』という考え方を大切にしている。

平成 24 年には市内の全ての小・中学校・特別支援学校がユネスコスクールに加盟した。今年１月には、ユネスコスクール・ＥＳＤ子どもサミットを開き、「ユネスコスクール・ＥＳＤのまち　おおむた」宣言を行った。市長もＥＳＤは市にとって重要であるとの考えから、大牟田市ＥＳＤ推進本部（全国初）を設置し、市長が本部長に就いている。教員研修も重要な役割がある。Ａ研修（ＥＳＤ/ユネスコスクールに関する理論研修)、Ｂ研修大牟田市内の実践交流、Ｃ大牟田市以外の実践交流、Ｄ授業実践を通した研修、Ｅ大牟田外の研修会を活用した研修、Ｆリーダー養成研修、Ｇ日常的な研修と多様な研修を実施できるようにしている。多くの研修で重視しているスタイルは、実際の授業と似ているところがある。まず『ふれる』(優良実践から理論を導き出す)、『しる』(理論と実践を組み合わせる)、『やってみる』（目標を定め教材研究を行う)、『ふりかえり』(評価）という流れである。

２．持続可能な社会の構築の観点

持続可能な社会をつくるためのゴールとしてＳＤＧｓ（持続可能な開発のための 2030 アジェンダ）が採択された。ご存知の通り 17 のゴールと 169 のターゲットが定められている。これは日本国内においても、様々な影響を与えている。また、第二期教育振興基本計画の中にくりかえし持続可能な開発のための教育が入っている。

このようにみると、新しい教育が始まったと負担感を感じる先生も多いだろう。一からすべてを作り上げることは確かに大変である。むしろ今まで実践してきた教育をＥＳＤという観点、つまり「持続可能な社会の担い手を育むため、地球規模の課題を自分のこととしてとらえ、その解決に向けて自分で考え、行動を起こす力を身につけるための教育」という観点でとらえ直し、整理すると考えた方が良いだ

ろう。

大牟田市の場合は、2017 年に教育委員会が中心となって、ＳＤＧｓをもとにした「大牟田市版ＳＤＧｓ」を作成した。これはもともとの１７の目標の内、大牟田独自の課題を重点化したものである。２つの基盤目標（４質の高い教育、17 パートナーシップ）と、８つの重点目標（３健康と福祉、７エネルギー、11 都市、12 生産と消費、13 気候変動、14 海洋資源、15 陸上資源、16 平和）を挙げている。市で重点化するだけでなく学校ごとに比重を変えることもありうるだろう。地域や学校によって取り上げるべき課題は変わってくる。全てを取り上げなければならないと考えるべきではない。

３．ＥＳＤでどのような力を育むか

では、ＥＳＤにおいてどのような能力・態度を育むか。これについては、大牟田市の吉野小学校の実践を例にしてお話したい。

吉野小学校では、ＥＳＤで大切にしたい価値観として、生命の尊厳、自他共栄、報恩感謝、尊敬を挙げている。ＥＳＤは空間的広がりと時間的広がりの両方を意識して行われる実践であり、これらの価値観もそれを意識して定められている。例えば感謝とは先人の営みを尊重し大切に受け継ぐということであり、自他共栄や、尊敬は未来を構築していくために重視したい価値観である。同時に共生していくためには、自分とは違う他者の存在を考慮することでもある。つまり空間的な差異や多様性に対する理解が求められているということである。

こうした児童像をイメージして、そのために身に付けさせたい力は大きく４つ、問題解決力、関わる力、伝え合う力、行動力を挙げた。国立教育政策研究所（2012）が定めた能力をもとにしながら、学校独自で定めた能力である。例えば、問題解決力とは、①問題を見出す力、②批判的に考える力、③未来像を予測して計画を立てる力、④多面的・総合的に考える力が位置づく。伝え合う力は⑤コミュニケーションを行う力、関わる力は⑥他者と協力する態度、行動力は⑦つながりを尊重する態度と進んで参加する態度、である。

さらにこれらを低学年、中学年、高学年とそれぞれの発達段階に応じて整理し、計画的に育成しようとしている。先ほど地域によって課題は変わると述べたが、発達段階に応じても、段階的にかつ系統的な学習が求められる。系統的な学習を学校のものにしていくためには、それらを一元化して整理しておくことは有効だ。大牟田市の場合はＥＳＤカレンダーに着想を得て『ＥＳＤストーリーマップ』を作成している。総合的な学習の時間・生活科を中心として、他教科とのつながりを明示し、子どもたちの学びの姿を一つのストーリーとして整理している。このことが魅力ある教育課程をつくることになり、またすべての教員が共通理解をしてすすめていくことができる。

このストーリーマップには、先ほど述べた①～⑧の能力・態度を明記し、めざす子供の姿を具体化・焦点化しようとしている。また教科とのかかわりについても、線でつなぐだけでなく、どのように関連するのかを明記している。たとえば、その総合の学習と内容面において関連する場合は「視点Ａ」、方法面で関わる場合は「視点Ｂ」とし、さらにその関りによって学習が強化される場合はア、付加される場合はイ、補完される場合はウというような形である。吉野小学校の取り組みの一つである総合的な学習の時間「桜プロジェクト」では、吉野小学校の桜に関わってきた人の思いを知る場面において、国語科「意見と理由を聞き取ろう」の学習において、方法面での強化・補完（関連：Ｂ-ア・ウ）されるというような形である。

もちろん、ストーリーマップを作成することで満足してはいけない。これを生かしてどのような実践を行うかである。まず教材分析と単元で目指す姿を設定することが重要である。さらに、標記した能力・

態度を参考にしながら、ＥＳＤで育みたい能力や態度を育む活動を取り入れなければならない。さらに、他教科・領域等のつながり、地域とのつながりを確認し、これらのつながりを生かした主体的な学びを生み出す体験的活動を設定することである。

４．地域とのつながり・関わり

これまで、ストーリーマップを作成し、単元の見通しや他教科との関連を整理し、その上で系統的・段階的に能力・態度を育成することをお話してきた。最後に、子どもの学びに大きな影響を与える地域とのつながりについてお話したい。

地域のまちづくりへ働きかけるためには、地域の人と協働することが大切だ。そのためには、地域とのつながりを深める活動を取り入れていかなければならない。そこで、主に４つの視点からその活動を学習 等に位置づけながら取り組んでいる。吉野小学校では、この地域とのつながり、かかわりについて、次の４つの視点を大切にして学習に生かそうとしている。①子どもたちから地域へ働きかける活動。②地域の方から子どもたちへ教えてもらう活動。③子どもと地域間において双方向（交流など）の活動、④共通の目標を持って、それぞれの立場から活動したり一緒に活動したりすることである。

地域には素晴らしい人がたくさんいる。彼らと一緒に協働することで、その価値や意味をつかんでいくことができる。それが持続可能な社会の担い手として大切なことだと考えている。

平成 28 年 10 月７日　ＪＩＣＡ地球村ひろば

研修Ⅲ　指導案検討

「実践報告から研究報告へ―実践の質を高めるために―」

日本ＥＳＤ学会会長
長友　恒人　先生

１．ＳＤを歴史的に理解する　ＳＤを理解することがＥＳＤのバックボーン、ＳＤ≒≠＞ＳＤＧｓ

ＳＤを理解するとＥＳＤがわかりやすくなる。「何のための」教育なのかを理解することが重要。ＳＤ(Sustainable Development)は「持続可能な開発」と訳されている。

歴史的にみると、1970 年代に、「開発と環境」という問題意識が生まれている（1972 ストックホルム会議）。これは 1960 年代の公害問題への反省を生かしていると考えられる。高校時代に北九州で過ごしていた時に、八幡製鉄所（現在の新日鉄）の煤煙でひどく黒い空と真っ黒になった雀を見たことを今でも覚えている。

1980 年代以降には「持続可能な発展」「持続可能な社会」「気候変動枠組み条約」「生物多様性条約」などのキーワードが出てきている。1987 年のブルントラント委員会では、「将来の世代のニーズを満たす能力を損なうことなく、今日の世代のニーズを満たすような開発」という定義もなされた。1992 年の地球サミット（リオデジャネイロ）では、教育にスポットがあてられるようになった。2002 年のサミット（ヨハネスブルグ）では、地球規模の課題が個別の独立したものではなく、相互につながっていることに着目され、2005 年のＥＳＤの 10 年、2015 年のＧＡＰにつながった。（矢口克也「持続可能な社会の構築」総合調査報告書 2010 年 3 月参照）

ＥＳＤは公式には「持続可能な開発のための教育」、指導要領では、「ひとり一人の児童が持続可能な社会の創り手となることができるようにする教育」と書かれているが、こうした歴史を踏まえて自分なりに理解したＥＳＤをもって授業に臨むことが大切なのではないかと考えている。私は、環境、経済、文化と関連しつつも、人が生を営む「社会」に焦点を当てるべきであると考えるので、「持続可能な社会の実現を目指す教育」という理解をしている。

２．新指導要領とＥＳＤについて一言

改めて新指導要領とＥＳＤとの関連に目を向けてみる。事務次官通達（H28.3. 31）の中に、「持続可能な社会」、「教科横断的な学習」というキーワードがでてくる。教科横断的な学習という考えはＥＳＤに合致する。総合的な学習の時間だけでは限界があり、カリキュラムマネジメントを取り入れることで学力の向上につながるが、一方で、教科横断的な学習やカリキュラムマネジメントだけでは、ＳＤの視点入らないとＥＳＤではない。そのためにＳＤの歴史的な理解を持っておく必要がある。

ESD の学習において留意すべきキーワードは変容である。価値観の変容とそれに伴う行動の変容が伴うことで、初めてＥＳＤの実践ということができるのではないか。変容は授業前のアンケートと授業後

のアンケートだけで計れるものではない。5 年後、10 年後に変容が持続していたら、または一旦忘れても 20 歳になったときにもう一度思い出せたときに、ＥＳＤの価値が見いだせる。

もう一つ着目しておくべきは、資質・能力である。生きて働く「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力と人間性」という三つの柱がある。これに一つ追加するとすれば、「つながる力」「つなげる力（自分と他人、物と他の物）」がＥＳＤに必要ではないか。先の３つは個人の能力である。それは大事ではあるが、それだけではＥＳＤとは言えない。つながることが必要である。

３．研究の視点：ＥＳＤ実践を深めるために

研究に必要なことは、オリジナルであること、目的と方法が明確であること、実証的であること、分析的であること、結論と課題が明確であること（主観や思いが結論になってはいけない）の５つのポイントが重要だ。

オリジナルであることについては、「まったく新しい」ということは難しいかもしれないが、先行研究に類似しても新規の視点、分析点などがあればオリジナル性は担保される。関連資料と先行研究（事例）を精査することが求められる。先達の仕事をリスペクトし、自分の研究を相対化することである。

目的と方法が明確であること、については、何のための研究かを明確にしなければならない。また、条件を具体的に明示することが必要だ。授業実践においては、クラスの規模、地域性、困難児の在、不在などは、他の人が実践の場の条件に合わせて応用するためにも必要である。

実証的であるためには、客観的なデータや事実が不可欠であり、また分析的であるためには分析の手法を明示することが求められる。その上で、単なる報告や主観や希望を結論に置くことを避け、目的に添った結論であることが必要である。分析に基づく結論であるということである。

自然科学の論文では、同じ方法または別の方法で再現できることが必要である。例えばＳＴＡＰ細胞は再現できなかったし、ムー大陸は証明できなかった。恐竜土偶は古代人が恐竜と共存していた証拠ではない。ところが人文科学の場合は、厳密に再現することはできない。条件が同じなら再現可能なはずだが、子どもの様子は刻々と変わっていく。時間を元に戻すことはできないし、過去の社会を再現することはできないからだ。ただし普遍性はあるべきだ。

研究に必要な心構えとテクニックとして、まず「資料と他人の研究、特に先人の研究を調べ尽くすこと」が重要である。これは、自分の研究を俯瞰的に位置づけて研究するために必要である。その際、「なぜそのような理論があるのか」を追求することが重要である。例えばＧＡＰの５つの行動分野があるが、それを明記しただけでは調べたことにはならない。なぜこの５つなのかを考察しておく必要がある。

２つ目に、分類しそして統合することが必要である。これは精緻化と総合化のために必要である。

３つめに、これはテクニックに類することだが、メモをすること。自分が読めるメモでよい。

４つ目に、一見無駄なことをしよう、ということ。知識と経験の幅を拡げるという点からは、世の中に無駄なことはない。ただし無駄なことに長時間没頭するなということは述べておきたい。

５つ目に、恥をかくことを恐れない、ということ。他人の批判には傾聴すべきものもある。

６つ目に、楽しくない、達成感がない時には、方向転換を考えるべきだということである。

みなさんにＥＳＤの研究を推奨しているわけではない。ＥＳＤの実践を高めるために研究の視点が有効である。自分の実践と類似する事例を数多く調べて、自分の実践を俯瞰的に眺め、相対的に位置づけることから始めるとよいのではないか。そのことによって、自分の実践の特長と弱点が見えてくるはずだ。研究のマインドをもつことによって実践の質を高めていくことを期待したい。

第２部

指導案集

小学校第３学年　総合的な学習の時間　学習指導案

萩市立育英小学校
教諭　　石田　千陽

１．単元名　　「須佐の魅力発見隊～須佐の豊かな海～」

２．単元の目標

・須佐湾の豊かな海と人々の生活とのかかわりの深さに気づき、須佐湾の現状を調べる活動を通して須佐湾を守ろうとする人々の思いに気づく。（知識及び技能）

・須佐湾の課題やその魅力を守ろうとする人々の工夫や努力について考え、自分達にできることを考える。（思考・判断・表現）

・調べ学習で得た情報を整理したり、友達と考えを交流したりすることを通して、これからもその魅力や自分たちにできることを伝えつなげていこうとする意欲を高めることができる。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（教材観）

萩市の東部に位置する須佐地区は、国指定天然記念物及び名勝「須佐湾」に面している。この須佐湾はホルンフェルスを有し、地域ブランドとして須佐漁港で水揚げされる男命いかを特産物としている。しかし、その須佐湾は近年、藻場の減少や磯焼け、貧酸素状態となり、ウニの増加による食害や漁獲量の減少など多くの課題を抱えている。その要因として、海水温の上昇や 2013 年７月に起こった集中豪雨災害の影響で湾内海底に土砂が堆積したことなどが挙げられている。このような状況の中、藻場の再生に向けて取り組んでいる須佐漁協や海の森を守る会などの地域の方がいる。本単元では、身近な存在である須佐湾の現状や課題などの話を聞く機会を取り入れたり、自分達で調べたりする活動を行った後、須佐湾のために自分たちができることについて考え、整理し、家族や他の学年、地域の人に伝える活動を行う。この教材は、「豊かな須佐湾」が復活し、10 年後 20 年後もきれいで多くの漁獲量がある海であり続けるために自分ができることを行っていこうとする意欲を高めることができる教材であると考える。

（児童観）

本学級の児童は、夏休みに毎日のように海に遊びに行ったり、須佐漁港や近くの他の漁港で水揚げされた新鮮な魚を食べたりするなど海と深いつながりをもっており、日記の記述や日頃の発言から海が好きという思いを強く感じる。そして、須佐湾はきれいでたくさんの魚が獲れることを須佐の魅力だと考えている。しかし、今年４月に海の森を守る会の方と一緒に行ったブロックペイントの際に、藻場の減少や磯焼けなどの現状を聞き、魚の住処の減少や漁獲量の減少等、自分が想像していた「豊かな須佐湾」の様子とは異なっていることに気付いた。そして、なぜそうなのかと疑問に思っていたり、自分たちにできることはないだろうかと考えたりする様子が見られた。また、理科の「昆虫のくらし」で学習したことと関連させて、「ナナホシテントウはアブラムシがいなくなったら生きていけないということは、昆虫だけではなくて魚の世界も同じなのだろうか。」という疑問をもち、須佐湾について調べてみたいという思いを多くの児童が抱いている。

（指導観）

児童にとって、今住んでいる須佐が「ふるさと」となる。「ふるさと須佐」を大切に思うには、２年

生の生活科の町探検で見つけた須佐の良いところを基礎とし、さらに見つけた須佐の魅力に自分から関わることが必要であると考える。そうすることが、自分が住んでいる地域にある豊かな自然をみんなで守っていく大切さを知り、そのために自分ができることを考え実行していく力につながる。

本単元では、須佐湾の現状や海が抱えている課題、その課題を解決しようとする人々の思いや願い、努力について、上級生や地域の方、保護者の方へのインタビューや地域の方との意見交換会を行うことで、関心を高め、それまで近くで生活しながらも気づいていなかった課題に目を向けさせる。また、自分にできることを家族や友達、地域の方に伝える活動を通して、須佐地区に住んでいるからこそ地域の方と協力して取り組んでいこうとする気持ちを育てていきたい。

４．ＥＳＤについて

（ＥＳＤの視点）

この学習を通して、須佐の海と人の生活との深い関係に気づくことができると考える。自分たちの生活が知らず知らずのうちに須佐湾に影響を与えていることに気づかせ「相互性」という視点で須佐を捉えさせたい。またこれからの須佐湾について考え、次代に残していくためにできることを考える活動は、「公平性」に関わる見方・考え方である。

（ＥＳＤで育みたい資質・能力）

須佐の魅力について、男命いかを通して学ぶことで、人の営みと自然環境、そして消費者である我々の暮らしがつながっていくことを理解することができ、【システムシンキング】の育成につながる学習である。また須佐湾を守ろうとする人々や保護者など、大人たちの思いを通して、児童は【批判的思考力】を働かせて地域を見直し、今まで知らなかった須佐湾の現状や課題に気づく。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

地域の豊かな自然は、今の世代だけのものではなく、次の世代に残すべき「未来の遺産」である。須佐の素晴らしい自然はこれまで大切に受け継がれたものであり、地域の大人たちが守ってきた。このことを学習することで、世代間の公正を重視することができると考える。また、その良さは人の営みだけでなく海とそこに生きる様々な生き物がつながっていることが必要であり、このことを学習することは生物多様性などの自然環境の保全を尊重する価値観を育てることにつながる。

（ＳＤＧｓへの貢献）

この単元は、「14 海の豊かさを守ろう」を目標とし、また「14.2：2020 年までに、海洋及び沿岸の生態系のレジリエンス強化や回復取り組みなどを通じた持続的な管理と保護を行い、大きな悪影響を回避し、健全で生産的な海洋を実現する。」をターゲットとする。須佐湾の課題に向き合い、３年生なりに生態系のレジリエンス強化や回復の活動に取り組ませたい。今後、豊かな須佐湾を取り戻すために、長期的な見通しの元、須佐湾のために家庭内で行動することができるように学習を進めたい。

５．評価規準

ア知識・技能	イ思考・判断・表現	ウ主体的に学習に取り組む態度
①収集した情報から、須佐湾の課題に気づく。	①情報収集の手段を選択し、収集した情報を分析し、課題を見つけている。 ②見出した魅力・自分ができることを適切に伝えたりしようとしている。	①須佐湾のために取り組んでいる人の思いに関心をもつ。 ②地域の魅力を守るために、自分ができることを考えようとしている。

６．単元展開の概要（全 16 時間）

次	主な学習活動	学習への支援	◇評価　　・備考
一	①地域の料理店で男命いかを食べ、インタビューを行う。 ②これから先、須佐湾環境悪化したときの状況をイメージする。 ③目指すべき海の姿をイメージする。 ④課題解決のための計画を立てる。	・須佐湾でとれた魚や男命いかを食べることで、おいしい海産物を生み出す須佐湾の豊かさに興味を持たせる。 ・ウニの増加や魚の減少等により食物連鎖が崩れた場合の須佐の海を想起させることで、須佐の海を守ることに関心を持たせる。 ・児童が目指すべき須佐湾の状況をイメージすることで、情報収集を選択することができるようにする。 ・課題を解決するために、どのような情報が必要か考え、計画を立てさせる。	◇男命いかのおいしさを知り、海への関心を高める。（ウ①） ◇調べる活動について見通しをもつ。（イ①） ◇須佐の海について、より良い姿を考える。（ウ②） ◇課題解決のために必要な情報を選択している。（イ①）
	学習課題　須佐の海に魚を呼び戻すために何ができるだろうか。		
二	⑤⑥須佐湾の現状について知る。 ⑦　情報を整理し、成果と課題を友達と交流する。	・いか漁師の方に須佐湾の状況について、写真を交えながらお話をしていただくことで、環境の悪化が魚の生息に影響していることなど、児童が思い描いていた海と現状の違いを理解することができるようにする。 ・これまで収集した情報を整理し、友だちと交流することで、男命いかを獲るためには、海の環境や他の生物たちとの関係性も大切であることに気付いたり、自分たちにできることを見出したりすることができるようにする。	◇ＧＴの話から、須佐湾の課題を理解する。（ア①） ◇収集した情報をまとめる活動を通して、課題を解決するために必要な情報を見出す。（イ①）
三	⑧⑨魚がたくさんいる須佐湾に戻すために、自分たちに何ができるのか考える。 ⑩意見交換会を行う。 ⑪自分たちにできることを吟味する。 ⑫調べたことの発表を行う。	・これまで収集した情報を整理することを通して、魚がたくさんいる須佐湾に戻すために、自分ができることを考えることができるようにする。 ・自分が考えたことを須佐漁協の方に伝え、アドバイスを受けることで、よりよい考えを見出すことができるようにする。 ・意見交換会でいただいたアドバイスをもとに、自分ができることを再度考えることができるようにする。 ・日常生活の中でのの実践を目指そうと自分の考えを堂々と伝えることができるようにする。	◇これからの自分の行動にどう生かしていくか考える。（ウ②） ◇考えた取り組み案を地域の方に、自ら進んで発表することで、さらに良い考えを見出す。（イ②） ◇意見交換会でのアドバイスをもとに、自分の考えを再構築する。（イ②） ◇積極的に家族や他の学年の児童に自分の考えた取り組みを伝える。（ウ②）

小学校第３学年　総合的な学習の時間　学習指導案

萩市立育英小学校
教諭　　石田　千陽

１．単元名　「須佐の魅力発見隊～田植ばやし～」

２．単元の目標

・田植ばやしを継承している人たちの思いを理解することができる。（知識・技能）
・田植ばやしについて収集した情報や、受け継いできた人々の思いを考えることを通して、その魅力を見出し、人に伝えることができる。（思考・判断・表現）
・調べ学習で得た情報を整理したり、友達と考えを交流したりすることを通して、これからもその魅力を伝えつなげていこうとする意欲を高めることができる。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（教材観）

本単元は、須佐地区の伝統芸能である田植ばやしについて調べる。田植ばやしには、地域文化を学ぶことや、地域の結束力高めることなどの魅力があるが、3 年生の時点では、400 年受け継いできた上三原地区の思いや田植ばやしに込められた願いなどに気付くことで、これから先も長く続くために自分が出来ることを考えたり、学校で下級生につなげていったりしようとする意欲を高めることを目指している。

萩市の東部に位置する須佐地区は、昭和 60 年には 4750 人であった人口が、平成 30 年には 2022 人に減少している。育英小学校の児童数をみても、田植ばやしに取り組み始めた平成９年度には全校児童 147 人であったが、平成 30 年度には 63 名と大幅に減少している。また、この状況は無形文化財となった田植ばやしを継承していくために発足した田植ばやし保存会も同様で、10 年後には保存会の継続が厳しくなるだろうと言われている。このような現状の中、総合的な学習の時間に田植ばやしの学習に取り組んでいる。この田植ばやしは、動きを覚えて踊るだけでなく、学習過程の各段階で、保護者や地域の方の話を聞く機会を取り入れたり、アンケートを行ったりすることを通して、新たな情報を得たり、その得た情報を他の学年の児童に伝えたりすることで、田植ばやしを大切にし、学校でも受け継ぎ、つなげていこうとする意欲を高めることができる教材だと考える。

（児童観）

本学級の児童は、これまで上級生が田植ばやしに取り組んでいる様子を見てきて、「かっこいいな。」「私もやってみたいな。」という思いを強くもっている。しかし、7 月から練習に取り組み始めたところ、所作の難しさや上級生との習得の格差によって、「面倒くさい。」「伝統芸能をしても、意味がないのではないか。」という思いを抱く児童が出てきた。そこで、子どもたちの思いを受け止めつつ、田植ばやしの魅力に気付かせ、進んで田植ばやしに関わったり、その素晴らしさを人に伝えていったりする活動を通して地域を見つめ直すことができると考えている。

（指導観）

児童にとって、今住んでいる須佐という場所が「ふるさと」となる。「ふるさと須佐」に愛着をもち、自分達も町の担い手としての在り方を考えていくためには、２年生の生活科の町探検をはじめとするこれまでの学習や生活の中で見つけた須佐の良いところを基礎とし、さらに見つけた須佐の魅力に自

分から関わることが必要であると考える。自分が住んでいる地域には豊かな自然がある、地域の伝統芸能がある、みんなで守っていくものがある、ということを知り、大切にしていきたいと思うことは、そのために自分ができることを考え実行していく力につながるだろう。

本単元では、須佐に400年伝わる田植ばやしについて、上級生や地域の方、保護者の方へのアンケートやインタビューを行い、田植ばやしについての関心を高める。この活動を通して、児童は今まで知らなかった田植ばやしの由来や目的、継承してきた人の思いについて気付くことだろう。そして、自分が見つけた魅力を友達と伝え合う活動を行うことで、昔から大切にしてきた文化や、それが人と人とのつながりの上に成り立っていることなどに気付かせたい。

４．ＥＳＤについて

（ＥＳＤの視点）

田植ばやしを継承していこうとする思いにふれることによって、保護者や地域とつながって取り組む「相互性」、継承していくに当たって妥協点を見出しながらも継承を目指す「連携性」、最後まで協力しながら取り組む「責任性」の３つの構成概念に関わる教材である。

（ＥＳＤで育みたい資質・能力）

本単元においては、田植ばやしについて、人々の思いや地域の文化など、様々な視点をもって、これまで続けられてきた理由や現在途絶えようとしている理由などを考えることができる。これは田植ばやしだけでなく、田植ばやしに影響を与える地域社会や人々の生活までを全体的に捉えることが必要であり、システムズシンキングを働かせて取り組む学習である。また地域の人の思いを受けとめ、感じたことを互いに伝え合う中でコミュニケーション能力の育成にも関わると考えている。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

田植ばやしは世界遺産や自然遺産ではないが、山口県無形文化財として指定されている。これは、須佐に継承されている神楽舞などと同様に、人と人とのつながりの上に成り立っている伝統芸能であり、須佐にとっては継承していくべき文化であると考える。また、これを調べることは、当時の地域文化を学ぶことにつながり、文化の尊重という価値観の情勢につながる単元であると言える。

（ＳＤＧｓへの貢献）

この単元は、「11 住み続けられるまちづくりを」、特に「11.4：世界の文化遺産及び自然遺産の保護・保全の努力を強化する。」に関わる実践である。少子高齢化により継承困難となりつつある田植ばやしが、これからも末永く続いていくことができるように、さらに長期的な見通しの元、本学級の児童が将来ふるさとである須佐に戻ってきたときに活躍し、田植ばやしを継承したり、町づくりを担ったりすることができるように学習を進めていきたい。

５．評価規準

ア知識・技能	イ思考・判断・表現	ウ主体的に学習に取り組む態度
①田植ばやしについて収取した情報を整理・活用して調べる。 ②収集した情報から、継承している人々の思いを理解している。	①田植ばやしが継承の危機にある原因を考える。 ②地域の人にとっての田植ばやしの意味や魅力について考え、適切に伝えている。	①田植ばやしの由来や目的、継承している人の思いに関心をもつ。 ②田植ばやしの魅力を伝えたり受け継いで踊ったりしようとする意欲をもっている。

６．**単元展開の概要**（全 15 時間）

次	主な学習活動	学習への支援	◇評価
一 ②	①　田植ばやしについて、体験して感じたことを交流する。	・田植ばやしを体験したときの演じることの難しさを想起させたり、田植ばやしの現状を聞いたりすることで、継承することの大変さに気づくことができるようにする。	◇田植ばやしを体験した思いや継承の難しさに気付くことができる。（ウ①）
	学習課題　田植ばやしが長く続くために、自分たちには何ができるだろうか。		
	②　課題解決のための計画を立てる。	・課題を解決するために、どのような情報が必要か考え、計画を立てることができるようにする。	◇継承していくためには、どのような情報が必要か考えることができる。（イ①）
二 ④	③　自分たちが知っている情報を整理する。	・児童が知っている情報をウェビング図に整理させることで、田植ばやしの知識が少ないことに気付くことができるようにする。	◇自分が知っていることをまとめたり、知らないことを整理したりする。（ア①）
	④⑤上級生へのアンケートを実施し、結果を集約する。	・昨年度まで経験している上級生へのアンケートを実施して、田植ばやしの情報を集約し、新たな情報を得ることができるようにする。	◇上級生へのアンケートを分析し、必要な情報を収集する。（ア①）
	⑥　情報を整理し、これからの計画を修正する。	・経験した上級生の情報だけでは、不十分であることに気付かせ、今後の計画をもう一度見直すことができるようにする。	◇課題を解決するために必要な情報を見出す。（ア①）

三⑤	⑦⑧田植ばやし保存会の方の話を聞く。	・田植ばやし保存会の方をGTに招くことによって、由来や目的、現状や展望、田植ばやしへの思いについて気付くことができるようにする。	◇田植ばやしが人と人がつながりあって成り立っていることに気付く。（ア②イ②）
	⑨　保護者・地域の方の田植ばやしへの思いを聞く。	・保存会の人だけでなく、地域の人たちにとっても地域の文化を継承し、地域の結束力を高めるという意味のある伝統芸能であることに気づかせる。	◇地域の大人の思いと自分の思いを比較して、魅力について考えている。（ア②イ②）
	⑩⑪情報を整理し、成果と課題を交流する。	・友達との対話を通して互いの気づきを交流し、発見した魅力について整理する。	◇収集した情報や友達との交流から、魅力を見出す。（イ②）
四④	⑫⑬自分たちの取り組みを学習発表会で発表する。	・収集した情報をどのように伝えると良いのか考え、発表に向けて準備を行うことができるようにする。	◇収集した情報を伝えるために、より良い発表方法を考えている。
	⑭　田植ばやしが続いていくために自分たちができることを考える。	・今後３年間の取り組み方について考えることで、自分の関わり方についての意欲を高めることができるようにする。	◇自分が見出した魅力を、これからの自分の行動にどう生かしていくか考える。（イ②）
	⑮　学習の振り返りを行い、自己の成長を実感する。	・学習の最後に田植ばやしについての情報を再びウェビング図に整理することで、自分の変容に気付くことができるようにする。	◇最初と最後のウェビング図を比較し、自分の変容に気付く。

７．考察　　○・・・成果　△・・・課題

○　「やりたくない。」から、「自分にできることはないか。」へ

７月から田植ばやしの練習が始まった。最初は意欲的であったが、失敗が続いたり上級生との技術の違いが大きかったりしたことから、目の前に大きな壁ができてしまい、練習に臨む際のモチベーションづくりに悪戦苦闘した７月、９月となった。そこで、「田植ばやしがなくなったらどう思う？」という問いかけをしてみたところ、「なくなったらどうなるのだろう」と悩む姿が見られた。そして、子どもたちは、話し合いをしていく中で、「須佐の魅力が１つ減るということは、須佐が面白くなくなって、もっと人が少なくなってしまう」「それは、だめだ」と、田植ばやしの継承が、上三原地区だけではなく、須佐地区全体に影響することに気付いていった。

また、上級生に田植ばやしの魅力を教えてもらったり、上三原地区で何十年も継承している田植ばやし保存会の方のお話を聞いたりする学習に取り組んだ。すると、単元の学習を始めて１か月経った１０月頃から、「早く練習が始まらないかな」「練習日が待ち遠しいな」と、やる気に満ちた顔で田植ばやしと関わる姿が見られるようになってきた。このような活動を仕組んだことで、子どもたちが田植ばやしに対する思いや意欲を再び奮い立たせ、自ら壁を打ち破り練習に取り組むようになったことは大きな成果だと考える。

GT のお話の様子

○　自分たちにできることを精一杯やり切ろうとする姿

田植ばやしに関する学習を進めていると、「たくさんの人の思いのこもった田植ばやしを自分たちだけに留めておくのはもったいないよ」と、一人の子どもがみんなに話しかけている姿が見られた。この発言をきっかけに、多くの人に田植ばやしのすばらしさを伝えるために学習発表会で発表しようということが話し合いの中で決定した。そして、どのように発表するのか、内容をどうするのかを考える姿、役割分担をし、自分の担当する仕事を責任もって準備する姿など、発表会に向けて一所懸命に取り組む姿を見ることができた。「田植えばやしの衣装を着て発表するのはどうだろうか」と考えた子どもは、衣装を着ることに少し消極的な子どもに対して、「魅力をより伝えるためだ」と、何度も説得する場面もあった。３年生なりに、田植ばやしに対して自分ができることに一生懸命取り組もうとしたことで、大きく成長できたと感じる。

△　小学校卒業後の田植ばやしとの関わり方

単元の終末では、「田植ばやしのすばらしいところや保存会の人の思いや願いを下級生に伝えていきたい」「これからも継承できるように、積極的に取り組んでいきたい」等、育英小学校での残り３年間の取り組み方についての発言が多かった。しかし、育英小を卒業した後の継承について尋ねると、「田植ばやしは、これからもずっと続いてほしい。だけど、１０年後、自分が田植ばやしをやりたいかと思うと悩んでしまう」「誰かが続けてくれたら、うれしい」等、他人任せな発言が多く、自主的な思いを育てることができなかったのが、課題である。

学習発表会の様子

将来、６人の子ども達は須佐に残ったり、他の地で生活したりするなど、それぞれの道の歩むことになる。しかし、この地で集まったときに、この単元で学習したことが、田植ばやしについて語り、その魅力について改めて伝え合うことで、継承の一助となる存在になることを願いたい。

小学校第５学年　社会科　学習指導案

上越教育大学大学院
修士課程１年　後藤　将徳
富岡市立富岡小学校（置籍）

１．単元名　「米づくりのさかんな地域　―　山形県庄内平野　―　」

２．単元の目標

・地図帳や地球儀、各種の資料で調べ、まとめることを通して、食料生産に関わる人々は、生産性や品質を高めるよう努力したり輸送方法や販売方法を工夫したりして、良質な食品を消費地に届けるなど、食料生産を支えていることを理解する。（知識・技能）

・生産の工程、人々の協力関係、技術の向上、輸送、価格や費用などに着目して、食料生産に関わる人々の工夫や努力を捉え、その働きを考え、表現する。（思考・判断・表現）

・主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとするとともに、多角的な思考や理解を通して、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚をもつ。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（教材観）

本単元では、新潟県内の「水稲」と「大豆」の作付面積の推移を表したグラフを用いて、稲作農家が「生産調整（減反政策）」にどのように対応したかを探る。生産調整には、「農作物の国際的競争力の低下」や「水田で転作を行うことの技術的な難しさ」という短所があったが、その一方で「長期間に渡っての米の価格が維持できる」という長所もあった。かつて生産調整に協力した農家の中には、水田を放棄する者もいたが、現在では大豆を転作し、枝豆として出荷することで農家としての活路を見出そうとしている者もいる。この事例は、現状とは異なる農業政策や消費行動になっても、それらを柔軟に受け止め、妥協点を見出し、仲間と共に協働しようと努力する農家の姿を学ぶことができる教材である。

（児童観）

前単元の「くらしを支える食料生産」を学習した後の本単元の学習であるため、児童の知識・技能は一定の水準にあると考えられる。しかしながら本校の保護者の多くは、第３次産業で働く人々であり、児童の多くは農業とは無縁の生活を送っていると考えられ、その知識・技能は自分たちの生活と直結しているものではないと考えられる。また現在、児童は学校園で水稲の栽培を行っており、田植えや草取りなどの主要な農作業については体験を通して理解しており、児童も意欲的に栽培活動に取り組んでいるようである。しかし、学校園で栽培できる米の生産量はわずかであり、稲作農家が直面するような「米余り」「生産調整」という状況までには至らないと予想される。本実践では、水稲の作付面積の推移のグラフを取り扱うが、そのグラフのもつ意味を稲作農家の思いも込めて読み取ることが必要である。

なお授業実践者の後藤は、現在、現職派遣で大学院在学中であるため、授業実践は置籍校の富岡市立富岡小学校で行う。単元計画の第１時から第８時及び第 10 時は富岡小学校の山村英二教諭が担当し、第９時は後藤が担当する予定である。

（指導観）

本単元では、新潟県内のスーパーマーケットの米菓売り場の様子を写した写真や枝豆を使った米菓を具体物として示し、なぜそのような売り場になっているのか、なぜそのような商品が開発されているのかを探る活動を設定する。新潟県の米菓売り場の面積が広いのは小売業者が米の消費量を少しでも増やそうと努力しているためであり、米菓業者が枝豆を使った米菓を開発することは「米と枝豆の消費拡大」という二重の意味で農家を支援しようとしていることに気づかせたい。その事例を知ることにより児童は、加工用の米にはどのような需要があるのか、また、米菓業者や小売業者からも稲作農家を支援する動きがあることにも気づかせたい。

４．ＥＳＤについて

（ＥＳＤの視点）

農家が農業を継続していくためには、減反政策や消費者の消費行動等様々な変化に対応していかなければならない。それらの変化はそれまでの仕事を大きく変化させることもあるが、本実践で出会う農家は仲間と共に協働的に解決しようと努力している。彼らの姿から、児童は「連携性」について考えを深めることができると考えられる。

（育みたいＥＳＤの資質・能力）

近年の農業は複雑化していると言える。農家と消費者だけの関係ではなく、稲作農家と関わる様々な業者の思いと関係性を総合的に捉えることが、日本の農業の姿を理解することにつながると考えている。また米の消費量が減ることでどのような影響が生まれるかを考えることも大切にしたい。こうした学習を踏まえて、児童のシステムズシンキングの資質・能力を高めることができると考えられる。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

稲作農家が、米以外の製品を生産することは、農業文化が変化していることと捉えることもできる。他方、稲作農家の取り組みは、何とか米の消費量を維持しようとする取り組みと捉えることもできる。この見方の相違は農業文化を尊重する価値観に関わる問題であり、また稲作が減ることによる自然環境の保全を尊重する価値観とも関わる。

（ＳＤＧｓへの貢献）

本単元の学習を行うことにより児童は、稲作農家の努力だけではなく、米菓業者や小売業者と協力することによって将来にわたって持続可能な農業を行う可能性が開けることを理解できるであろう。これはＳＤＧｓの「目標１７：パートナーシップで目標を達成しよう」の達成に貢献できると考えられる。また児童は、持続可能な農業を行うことが日本の食料自給率の改善にもつながることを理解できるであろう。これは日本が災害や有事に見舞われたとしても、食の安全保障を維持できることにもつながり、ＳＤＧｓの「目標２：飢餓をゼロに」の達成にも貢献できると考えられる。

５．評価規準

ア知識・技能	イ思考・判断・表現	ウ主体的に学習に取り組む態度
①地図帳や地球儀、各種の資料を使って、生産性や品質を高める工夫について理解している。 ②良質な食品を消費地に届けるため、輸送方法や販売方法を工夫していることを理解することができる。	①生産の工程、人々の協力関係、技術の向上、輸送、価格や費用などに着目して、食料生産に関わる人々の工夫を考え、表現することができる。	①食料生産の実情に関心を持ち、主体的に学習の問題を解決しようとする ②よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする。

６．単元展開の概要（全 10 時間）

主な学習活動	学習への支援	◇評価　　・備考
１．写真や地図から、庄内平野がどのようなところなのかを読み取り、気付いたことや、わかったことを発表し合う。	写真や地図から庄内平野の様子について気付いたことやわかったことを発表させ、米の生産の様子に関心がもてるようにする。	◇我が国の米の生産の様子に関心をもち、庄内平野を事例として意欲的に調べようとしている。（ウ①）
２．鳥瞰図や統計資料を読み取り、わかったことや疑問に思ったことから学習課題をつくり、学習計画を立てる。	鳥瞰図や統計資料から、庄内平野が我が国を代表する米の産地であることに気付かせ、学習問題につなげる。	◇資料から読み取ったことをもとに、学習問題や予想、学習計画を考え表現している。（ア①イ①）
学習課題　庄内平野で米づくりをしている人々は，どのようにしてよりよい米を生産し，消費者にとどけているのでしょうか。		
３．庄内平野で米づくりがさかんなわけを、写真や地図、資料などをもとに調べて、米づくりと自然環境とのかかわりについて話し合う。	写真や地図、資料と教科書の本文を関連づけながら読み取らせ、米づくりと自然環境のかかわりについて気付けるようにする。	◇地図や統計などの各種の資料を活用して、米づくりに適した自然条件や人々の努力について必要な情報を集め、読み取っている。（ア①）
４．専業農家である岡部さんの話や資料、インターネットを活用し、米づくりの仕事について調べ、農作業暦にまとめる。	稲の生育にかかわる工夫と機械化などの効率化にかかわる工夫があることに気付けるようにする。	◇農家の手紙やインターネット、教科書の資料などを活用して、農家の工夫や努力について必要な情報を集め、読み取って表現している。（イ①）
５．庄内平野の農家の人たちが、よりよい米づくりのためにどのように協力し合っているかを調べ、協力し合うわけについて考えて話し合う。	高額な機械や特殊技能を要する機械、水の管理など、農家同士の協力が不可欠であることに気付けるようにする。	◇庄内地方の農家が、作業の効率化や技術の継承・向上のために、様々な作業や機械、設備の利用、生産技術の研究などの面で協力し合っていることを理解している。（ア②）
６．農業協同組合（ＪＡ）や水田農業試験場などが、どのように米づくり農家の人たちを支えているか調べて、わかったことを発表し合う。	農業協同組合や水田農業試験場の仕事を調べ、米づくり農家をどのように支えているか考えるようにする。	◇庄内平野の米づくりは、農業協同組合や水田農業試験場など、様々な仕組みによって支えられていることを理解している。（ア②）

７．庄内平野の米が消費者にとどけられるまでの様子を調べて、生産地と消費地を結ぶ運輸の働きや、米づくりにかかわる費用や価格について話し合う。	カントリーエレベーター内での米の流れを確認し、味を保ちながら保管する役割を果たしていることに気付けるようにする。	◇地図や統計などの資料を活用して、味を保ちながら早く全国に届けるための工夫について必要な情報を集め、読み取り、表現している。（イ①）
８．農家のかかえる問題について資料から読み取り、これからの米づくりについて自分が考えたことを伝え合う。	資料から読み取ったことと本文を関連づけ、消費量の減少が日本の稲作のかかえる様々な問題を引き起こしていることに気付けるようにする。	◇実際に行われている取り組みや他の児童の意見を参考にして、これからの米づくりの発展について考えようとしている。（ウ②）
９．生産調整に対応しようとする農家を応援するため、米菓業者やスーパーが協力して米菓の開発や販売を行っていることを知り、その働きを考え、表現する。	米や大豆の作付面積の推移の原因や大豆を使った米菓の開発理由などを追究することにより、稲作農家、米菓業者、スーパーの人々の工夫や努力を捉え、その働きを考え、表現することができるようにする。	◇稲作農家、米菓業者、スーパーの協力関係に着目して、食料生産に関わる人々の工夫や努力を捉え、その働きを考え、表現することができる。（イ①）
10．これまでの学習をもとに、米づくりがさかんな庄内平野の人たちの工夫や努力について考え、「米づくり事典」にまとめる。	「ことば」を活用して表現させることによって、これまで学習したことを生かせるようにする。	◇これまでの学習をもとに、庄内平野の米づくりは自然条件と深いかかわりがあること、また人々が生産を高めるために様々な努力や工夫をしていることを理解している。（ア②）

小学校第５学年　社会科　学習指導案

八千代市立大和田南小学校
教諭　篠巻　直輝

１．単元名　「自動車をつくる工業」

２．単元の目標

・工業生産に関わる人々は，消費者の需要や社会の変化に対応し，優れた製品を生産するよう様々な工夫や努力をして，工業生産を支えていること，また貿易や運輸は，原材料の確保や製品の販売などにおいて，工業生産を支える重要な役割を果たしていることを理解し，地図帳や地球儀，各種の資料を調べ，まとめる。（知識・技能）

・製造の工程，工場相互の協力関係，優れた技術などに着目して，工業生産に関わる人々の工夫や努力を捉え，その働きを考え表現し，また交通網の広がり外国との関わりなどに着目して，貿易や運輸の様子を捉え，それらの役割を考え，表現する。（思考・判断・表現）

・社会的事象について，主体的に学習の問題を解決しようとする態度や，よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに，我が国の産業の発展を願い我が国の将来を担う国民としての自覚を養う。（主体的に学習に取り組む態度）

〈学習指導要領　目標（３）内容（３）ア，イとの関連〉

３．単元について

（教材観）

この単元では，自動車工業を事例として工業生産に関わる人々や運輸に関わる人々の工夫や努力を取り上げて学習する。近年，各自動車メーカーは社会のニーズに応えるべく，様々な技術開発を行い，さらに消費者それぞれのニーズにも応えられるような工夫を凝らしている。また自動車は時代の変化や消費者のニーズに対応して作られていることを知り，更に自動車にはどれだけの部品が使われているのかを知ることで，それだけ多くの部品が使われている自動車を消費者のニーズに合わせて大量に生産しているのにはどのような工夫や努力があるのかという興味につなげていきたい。本教材を学習することで，ＥＳＤで育てたい見方・考え方のⅠ多様性が養わせていく。また，自動車に求める社会のニーズの一つに地球環境を意識したものが挙げられる。各メーカー，ハイブリットカーや電気自動車の開発に力を入れている。これらのことに着目させ，持続可能な社会を意識させ，ＥＳＤのⅢ有限性・循環性の見方・考え方を養わせていく。

（児童観）

学習の導入に際し、アンケートを行った。（９月 26 日（水）実施（５年４組　３２名））

①自動車は生活に必要だと思いますか。

はい　３１名

・移動に便利…１４名　・遠くに行ける…５名　・お出かけに行ける…４名

・買い物，荷物を運べる…３名　・電車より楽…１名

いいえ　１名

スーパーに歩いて行けるから。

②自動車を買うとしたら，どんな車が欲しいですか。

・広い車，キャンピングカー，…１５名　・スポーツカー…５名　・コンパクトなもの…２名

・静かなもの・安いもの・空を飛ぶもの…各２名

・運転しやすい・燃費がいい・環境に優しい…各１名

③環境を考えた車を知っていますか。

はい　８名

・電気自動車・プラグインハイブリット・水素・太陽光・廃棄ガスが少ない・静か・自動ブレーキ

いいえ　２４名

質問①より，ほとんどの児童は自動車を生活に必要であるものと考えていることがわかる。また，②より，児童一人ひとりがそれぞれのニーズをもっていることから，自動車への関心があると考えられる。

質問③では，環境を意識した自動車を知っている児童は８名と，想像していたより少なかった。児童たちはハイブリットカーや電気自動車という言葉を生活で耳にしていると思うが，それらが環境問題と関わっているということまで，認識していないのではないだろうか。

以上のことから，学習では，児童それぞれのニーズを挙げさせることで，人によってニーズは様々であり，多数存在していることに気づかせたい。また，消費者個人のニーズだけでなく，環境問題など社会が求めるニーズにおいても応えられるよう，メーカーは工夫や努力をしているという視点をもたせていきたい。

（指導観）

本単元では，児童たちにとっても身近である自動車を扱う。自動車の部品に興味をもたせるために，ハンドルやタイヤ，エンジンの部品など実物を用意し，直接触って観察させる。また部品の数や，工場で一日につくられる自動車の数の多さに実感をもたせるために，ＩＣＴ機器などを活用し，効果的に資料を提示する。

今回は自動車がどのようにつくられているのかを実際に調べるために日産追浜工場の見学を予定している。児童が「なぜだろう」「知りたい」と感じるように，自動車には人や社会が求めるたくさんのニーズがあり，さらに部品がたくさんあるにも関わらず，工場では毎日多くの自動車がつくられているという矛盾に注目させたい。

単元の第３次では，未来の自動車について考えさせる。日産のＣＭ（「やっちゃえ日産」シリーズ）を見せて，企業がどのような自動車をつくろうと努力しているのか，世の中はどのような自動車を求めているのかを考えさせ，環境問題や，消費者のニーズにも着目させ，未来に生きる人のためにどのような自動車が必要かを考えさせる。

４．ＥＳＤとの関連

（ＥＳＤの視点）

多様性：現在，自動車には様々な車種があり，一台一台にメーカーや消費者のこだわりがある。これは多様性の視点をもって捉えられる社会的事象である。また多数の部品工場と組み立て工場がつながっていることや、海外ともつながっていることは、私たちの生活に欠かせない産業が特定の企業のみの働きで支えられているものではないことに気づくことにつながり、相互性の視点を養うことができる。さ

らに、現代社会の問題の一つである環境問題に取り組む企業の姿や、ハイブリットカーや電気自動車，水素車が開発されていることは、循環性・有限性に気づかせることができる単元である。

（ＥＳＤで育みたい資質・能力）

地球的諸課題に向き合った自動車づくりを取り上げ、「未来に生きる人たちのための自動車」を考えさせる。これは、自分達が自動車をたくさん作ることで地球や社会にどのような影響があるかを考えさせることにつながる。つまり自動車生産に関わる多様な人の思いを考えさせることにつながり、システムズシンキング（総合的に，背後のシステムをとらえる）の育成に関わると考えている。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

自動車社会が進行するにつれて、私たちの暮らしは便利になりつつも、様々な生き物の生育環境を奪うことにつながっている。これは生物多様性などの自然環境の保全を尊重するという価値観を揺さぶることにつながるだろう。また、「未来に生きる人たちのための自動車」を考えることは、現代世代のニーズだけを考えるのではなく、将来世代のニーズを考えることであり、世代間の公正について考えることができる単元である。

（ＳＤＧｓへの貢献）

⑦エネルギーをみんなにそしてクリーンに

現在，各自動車メーカーは，ハイブリットカーや，電気自動車，水素車など，環境を考えた自動車を開発している。これらはＣＯ２の削減に貢献しているだけでなく，自動車の燃料に石油に代わる新たなエネルギー（持続可能なエネルギー）を使うことにもつながっている。未来の自動車を考えさせることで，現在世界が抱えているエネルギー問題についても考えさせることができるといえる。

⑨産業と技術革新の基盤をつくろう

自動車会社は，国内でつくった自動車を海外に輸出しているだけでなく，海外に工場をつくり，現地で生産し販売をしている。これにより，日本は海外に技術を輸出しているといえる。自動車工場（企業）と世界とのつながり学習し，日本の高い技術が世界で生かされていること，海外の地で技術の基盤をつくっていることを知ることができる。

５．　評価基準

ア知識・技能	イ思考・判断・表現	ウ主体的に学習に取り組む態度
①日本の工業生産の現状と課題について理解している。 ②日本の工業生産を発展させていくには，輸入と輸出のバランスをとる，持続可能な社会を目指すための取り組みを進めるなど，様々な課題の解決が必要であることを理解している。 ③　統計，写真，地図帳，地球儀などの資料を活用して，日本の工業生産の現状や課題について必要な情報を集め，読み取っている。	①日本の工業生産の現状と課題から，工業生産の発展について学習問題や予想，学習計画を考え表現している。 ②工業生産が国民生活を支える重要な役割を果たしていることについて，思考・判断したことを適切に表現している。	①日本の工業生産の発達に関心をもち，日本の工業生産の現状や課題について意欲的に調べようとしている。 ②日本の工業生産の発達に関心をもち，これからの工業生産の発展や持続可能な社会の実現について考えようとしている。

６．　単元の全体計画（全 11 時間）

学習過程 （時数）	主な学習活動・内容	指導上の留意点	◇評価 ・資料
ねかせ	・車のパンフレットを見て気づいたことについて話し合う。 ・前時で行った日本の工業の機械工業の内訳を確認する。	・自動車調べから，身の回りには多種多様な自動車があることに気付かせる。	◇ウ① ・車 ・車のパンフレット
つかむ 事象観察 問題構成 （1） 第１次	・どのような自動車が消費者のニーズに合っているのか考えさせ，日産の電気自動車に視点を置く。 ・一台の車にどれだけ多くの部品が使われているかわかる資料から学習問題を構成する。 ・短時間で生産することができる。	・現在の問題視されている環境問題に目を向けさせる。 ・自動車が多くの部品からつくられていることに気付かせ，日産追浜工場ではどのように自動車を生産しているか考え，予想をたてる。	◇イ① ・追浜工場の写真 ・航空写真 ・地図
追浜自動車工場ではどのようにして様々なニーズにあった自動車をたくさん生産しているのだろうか。			
調べる 自力解決 （4） まとめる	・追浜工場見学に行き，自動車の生産工程について調べ，工夫や努力について話し合う。 《見学の視点》 自動車の生産工程やそれぞれの段階でよりよい自動車をたくさん作るために工夫していること。／ロボットや機械／作業の分担／ライン生産／指示ビラ ・よりよい自動車を効率よくつくるための工夫について調べ，話し合う。 ・自動車の各部品がどのようにつくられているのか調べ，話し合う。 ・調べたことをまとめる。 ・学習問題を構成する。	・映像資料を活用し，機械の様子など具体的に生産方法を調べられるようにする。 ・実際に体験することを通して，効率よく生産するためには，どのようにすればよいかを考えさせる。 ・働く人々が，よりよい自動車を効率よく作るために様々な工夫や努力をしていることを理解する。 ・組み立て工場と関連工場の関係性についてとらえることができるようにする。 ・各部品がどのようにつくられているか理解している。 ・調べたことのみではなく，自分の考えも発表させるようにする。 ・輸送と製品の価格との関連についてもふれるようにする。	◇ア① ◇イ② ・航空地図 ・組み立て工場の仕組みの図 ・関連工場の仕組み図
比較 整序 （1） つかむ 事象観察	・完成した自動車と店頭に並んだ自動車の写真を比較し，どのように消費者のもとへ届けられるのか予想する。		

問題構成 （1） 第二次	工場でつくられた自動車はどのようにして店頭まで届くのだろうか。		
調べる 自力解決 まとめる （1）	・自動車生産から輸送の工夫 ・輸送費が含まれる自動車の費用 ・高速道路や船を利用した輸送 ・キャリアカーでの輸送 ・海外には自動車専用船で輸送する。 ・海外での現地生産 ・調べたことをまとめる。	・自動車の費用には，材料費だけではなく，輸送費なども関係して価格が決まっていることをとらえさせる。 ・海外でもニーズを生かした現地生産がされていることに気付くようにする。	◇ア② ・自動車工場から消費者に届くまでの経路（写真・地図）
第３次 （1） つかむ 事象観察 問題構成	・学習問題を構成する。	・地球環境に興味をもたせ，持続可能な社会のための自動車を考えさせる。	◇イ②
	未来に生きる人たちのための自動車を考えよう		
	・人と環境にやさしい自動車をつくるための工夫を調べ，話し合う。 ・安全性や福祉の視点から自動車の研究や開発，リサイクルしやすい車の発明にも目を向けさせる。 ・ハイブリッドカーや電気自動車などの環境にやさしい自動車の開発	・排気ガスの削減だけではなく，ごみを減らす工夫にも目を向けさせ，これからの工業生産には環境対策が不可欠であることに気付くことができるようにする。	
まとめる 比較 （2）	・調べたことをもとに学習問題に対する答えを考え，まとめる。	・自動車生産における工夫や努力のまとめとして，工業生産は公民生活の支えになっていることを理解する。 ・多角的に判断する。	◇ア② ・既習資料
	・これまでの学習を振り返り，日本の自動車づくりのよさをキャッチコピーで表し，話し合う。 ・努力と協力 ・地球環境にやさしい	・日本の自動車生産のよさについて調べたことをもとに，キャッチコピーにまとめることで，自動車工場で働く人々，研究開発に携わる人々などのいろいろな工夫や努力の上に成り立っていることをとらえさせる。	◇イ② ・既習資料

小学校第５学年　総合的な学習の時間　学習指導案

福岡市立愛宕浜小学校
指導者　　椎葉　拓朗

１．単元名　　「日本の主食「米」を見直そう　～第２部　水田を守ろうプロジェクト～」

２．目　標

・　プロジェクト学習の過程において，課題解決に必要な知識及び技能を身に付けるとともに，探究的な学習のよさを味わう。【知識・技能】
・　実社会や実生活の中から問いを見いだし，自分で課題を立て，情報を集めたり，整理・分析して，まとめ・表現したりすることができる。【思考・判断・表現力】
・　プロジェクト学習に主体的・協働的に取り組むとともに，互いのよさを生かしながら，積極的に社会に参画しようとする態度を養う。【学びに向かう力・人間性】

３．単元について

（教材観）

本単元は，３段階で構成されている本校の５年生総合的な学習の時間におけるプロジェクト学習『日本の主食「米」を見直そう』第２部にあたる学習である。

第１部では，社会科「米作りのさかんな地域」の中で日本の稲作や米作りの現状について学んだことと関連付けて，それぞれの興味・関心に沿って調べ学習を進め，交流を行った。また同時進行でバケツ稲の育成にも取り組んだ。米はもち米を選び，もちつき会に使うものとして，大事に育てた。１０月末には稲刈りを行い，実りの喜びを味わうことができた。

第２部でははじめに，水田は米を育てるだけでなく，自然環境や生き物の保全，自然災害の被害拡大防止などに役立っていること，そんな水田が減少している実態やその影響について学ぶ。他の自然環境と同じ様に，水田を守っていくことは重要であることを意識したところで「水田を守ろうプロジェクト」を創っていく。プロジェクトを創ったり，交流したりすることで，水田を含む自然環境の保全に対する意識を高めていく。

第３部では，育てた米を収穫することや，学校行事であるもちつき会の運営等を通して，実りの喜びを味わい，米への思いを深めることができる。

このように，米や水田の重要性と現状・未来について考え，それらの自然環境を守っていこうとする意識を育てる学習として，この教材は価値あるものである。

（児童観）

本学級の児童は，前期前半に社会科「米づくりのさかんな地域」を学習し，その中でパンや麺の広がりによる米の消費量の減少や，それに伴う国の減反政策が行われたこと，高齢化や後継者不足などについて学習しており，水田の現在の状況について多少の知識を持っている。

６月にバケツ稲の取り組みで苗植えを行った際に，ＧＴとして招いたＪＡの方から，水田のもつ役割についての話を聞いている。しかし，事前アンケートで水田が稲作以外の役割を果たしていることについて説明できた児童はおよそ４０％しかいなかった。（内訳：○気温の上昇を防ぐ…５名　○生物の住みかになる…５名　○水害を防ぐ…２名　○水を浄化する…１名　複数回答）

また，本校の児童の実態として表現力が課題となっている。学級でも文章力の差や発表する児童

の偏りなどは，大きな課題である。このような課題に対して，本校では昨年度から総合的な学習の時間に“プロジェクト学習”を取り入れ，どのような力を伸ばせるかを明確にして取り組んでいる。第１部の学習終了時のアンケートでは，○書く力（技能）が伸びた…８５％　○伝える力（表現力）が伸びた…７５％　とプロジェクト学習の成果が感じられる。今回の学習でも，考えの理由や根拠を明確にした発表資料や原稿を作る技能や，それを聞き手に分かりやすく伝えようとする表現力を高めさせていきたい。

（指導観）

本単元では，まず自然環境から「海・海岸線」「森林」「河川」「池・湖」「水田」の５つを提示し，これからも残したい順にランキングを行う。他の自然環境に比べて規模が小さい水田は下位になると予想される。ここで，水田が自然・生物環境の保全や自然災害の被害の拡大防止など稲作以外の役割を果たしていることを示す資料を提示し，水田も守らなければいけないという意識をもたせる。

そこで，自分の「水田を守ろうプロジェクト」を考えるというテーマと，それを学級（交流）や他学年児童，保護者や地域の人(掲示)に伝えるというゴールを設定する。まず，ウェビングマップでプロジェクトの方向性を広げた後，付箋紙を使ってグループ討議を行い，効果的な方法を考えた上で自分が効果的・面白いと思うものをテーマにプロジェクトの方向性を決定する。プロジェクトのアイデアは，水田の状況や課題に合ったものになるように留意させる。情報収集の際，調べ学習に利用できる図書・サイトなどを準備しておき，見通しが持てない児童，または進行が遅れている児童については個別指導を行い，モデルに沿ってプロジェクトを創ることができるように支援する。

整理・分析の段階では，自分が調べた情報に加え，等質グループでの情報交換も行うようにする。その中で，自分に使えそうな情報を得たり，不足している情報については再度情報を集めたりして，プロジェクトの効果をより証明できるようにしていく。

発表原稿を作る際には，国語「明日をつくるわたしたち」と関連付け，提案する文章の書き方や話し方を学習しながら交流会の準備を進めていく。

その後，プロジェクトの交流会を行う。交流は異質グループを基本に，自分と違うプロジェクトのアイデアを聞くようにする。発表後，聞き手から発表の評価やアドバイスを書いたカードを渡し，それらをもとにして次の時間で自分のアイデアを再構築し，プロジェクトを完成させる。

最後に，学習を通しての自己成長を確認し，学習のまとめを行う。

評価についてはルーブリックを採用する。①知識　②技能　③アイデア（思考・判断力）④発表（表現力）⑤主体性（学びに向かう力・人間性）の５観点について４段階の評価を行うこととする。学習のはじめの段階でルーブリックを提示することにより，今回の学習で目指す姿を知り，目標を定めることができると考える。また，評価は教師・自己・他者の３つの視点から行うことで，主観的・客観的な目線から，成長をより正確に評価できるようにする。

４．ＥＳＤについて

（ＥＳＤの視点）

導入段階において，水田が環境の保全やその周辺の生態系につながっており（相互性），それがいかに重要であるかを考えることができる。また，その環境が危機に直面している（有限性）ことを理解し，水田を守ろうというプロジェクトを創っていくことで，水田をはじめとする自然環境を未来へ継承する（循環性）ために何ができるかという視点を養いたい。

（ＥＳＤで育みたい資質・能力）

水田を守るプロジェクトを創る過程で，水田が減少してきた背景（システム）を捉え，収集した情報に基づいて，プロジェクトに効果がありそうか，実現可能であるかなど，見通し（長期的）を持ってプロジェクトを創ることができる思考の資質・能力を育てたい。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

水田は，まさに多種多様な生き物が数多く生息しており，生物多様性や自然環境を保全する上で重要な役割を果たしている。そんな水田のある自然環境を尊重し守ろうとする価値観を育てたい。また，水田のみでなく，海や河川・森林などのほかの自然環境のもつ役割や重要性についても取り扱い，全ての自然環境が重要かつ守っていかなければならないものであることに気づかせたい。

（ＳＤＧｓへの貢献）

水田を教材として，生物多様性の重要性に気づかせる本実践は，目標 15「陸の豊かさも守ろう」に関連する実践である。水田に生息する様々な生き物や水田の価値に目を向け，それらのサービスの保全，回復，および持続可能な利用について考える実践である。

５．評価規準

ア知識及び技能	イ思考・判断・表現	ウ主体的に学習に取り組む態度
①水田のもつ役割や，水田減少の実態とその影響について理解する。 ②自分が考える水田保全プロジェクトにつながる必要な情報を集め，発表資料を作る。	①水田の様々な価値について調べ，水田に関わる課題を考える。 ②既習の知識や経験をもとに情報を集め，自分なりの水田保全プロジェクトのアイデアを創り，工夫して発表する。	①自ら進んで情報を集め，発表資料の工夫や原稿の見直しを意欲的に行うなど，水田保全プロジェクト創りに積極的に取り組むことができる。

６．指導計画（全 15 時間）　　※【】内は，プロジェクト学習としてつけたい力

配時	主な学習活動	学習への支援	◇評価・備考
２	１．準備【課題発見力】 （１）自然環境の中で，次世代に残したいものをランキングする。 （２）ランキングした理由を中心に意見を交流する。 （３）水田がどのような役割をもっているか考える。 （４）水田の現状に着目し，その理由や影響について考える。	○「海・海岸線」「河川」「森林」「池・湖」「水田」を提示し，現在の認識（大切だと考えているもの）を確認する。 ○気候(空気・気温)・水の浄化・生物の住みか・防災・風景等に関わることに気づかせる。 ○社会科の学習を想起し、水田の減少や，農業人口の減少・高齢化，余剰米などの問題があったことを確認する。 →「水田を守る」ことの意識化	(※ルーブリックに沿って評価実施) ◇ウ① ⇒教師評価 ◇イ① ⇒教師評価

2	2．テーマ・ゴール【目標設定力】 計画【課題解決力】 （1）前時の内容から，水田を守るプロジェクトの必要性を知る。 テーマ：水田を減少から守るためのプロジェクトを考える。 ゴール：発表会で報告（学級） もちつき会で掲示 （他学年・保護者・地域） 評価：ルーブリック表を活用して，目標を決め，学びを進める。 （2）水田を守るためのアプローチの方向性について話し合う。 （3）グループ交流を通して自分のアプローチの方向性を決める。	○ゴールの形（発表・掲示）と日程を提示し，ゴールまでのイメージを持たせる。 ○ルーブリックを見て，本学習で伸ばしたい力を確認する。 ○付箋紙を使って，どのようなアプローチに効果がありそうか交流し，自分のアプローチの方向性を決定させる。	◇イ① ⇒自己評価
2	3．情報リサーチ【情報力】 ○　アプローチの方向性に沿ってプロジェクトに使えそうな情報を集める。	○リサーチに使えそうな本やリンク先を集めておく。 ○情報収集がうまくいかない児童が使えるような資料をいくつか用意しておく。	◇ア② ⇒自己／教師評価
1	4．整理分析【情報力】 （1）等質グループで情報を交流し，使えそうな情報は参考にする。 （2）集めた情報と（1）で得た情報を整理し，要・不要で分けたり必要な場合は統合したりする。		◇ア② ⇒教師評価
2	5．情報リサーチ【情報力】 ○足りない情報・アイデアの説明に必要な情報を集める。		◇ア② ⇒教師評価
3	6．制作【ビジュアル的構成力】 ○プレゼンテーションのための資料を作成する。	○レイアウトのしかたを簡単に例示し，見通しを持たせる。	◇ア② ⇒自己／教師評価
1 本 時	7．プレゼンテーション 【表現・コミュニケーション力】 ○プロジェクト交流会を行う。	○聞く側にはアドバイスカードで評価をしながら聞かせる。	◇イ② ⇒自己／他者評価

1	8．再構築【推敲力】 ○他者の考え・意見を取り入れ，アイデアを練り直す。	○アドバイスカードを参考に，付加・修正をさせる。	◇イ② ⇒自己／教師評価
1	9．成長エントリー【自己評価力】 ○自己評価し，学習を振り返る。	○学習前と学習後の自分を比較しながら評価させる。	◇ア①，ウ① ⇒自己評価

7．指導の実際と考察

〈　導入　〉

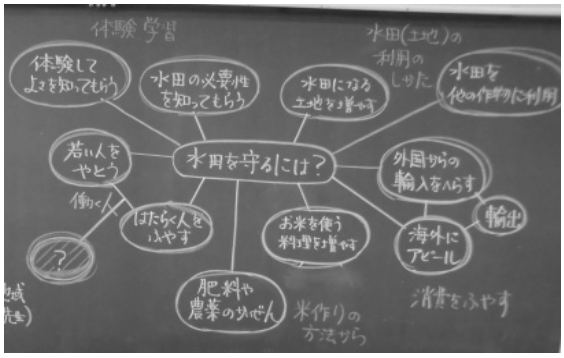
○　第１時のランキングを集計したところ，順位は１位：森林　２位：河川　３位：海　で，４位に同票で池・海／水田　となり，水田はこの時点で守りたい自然環境の中で下位となった。

【資料①左側】

【資料①　左：ランキング／右：水田の役割】

○　第２時で水田のもっている役割（気候・水・生き物・防災・風景等）を知った【資料①右側】後，プロジェクトのアプローチの方向【資料②】を決めたところ，

・米の消費量を増やす　　…８名
・米作りの方法から　　…８名
・体験学習　　…７名
・水田（土地）の利用方法…５名
・働く人を増やす　　…１名　となった。

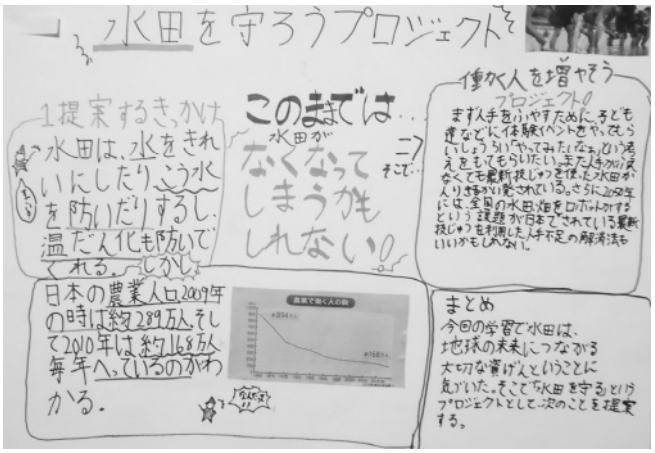


【資料②　プロジェクトへのアプローチ】

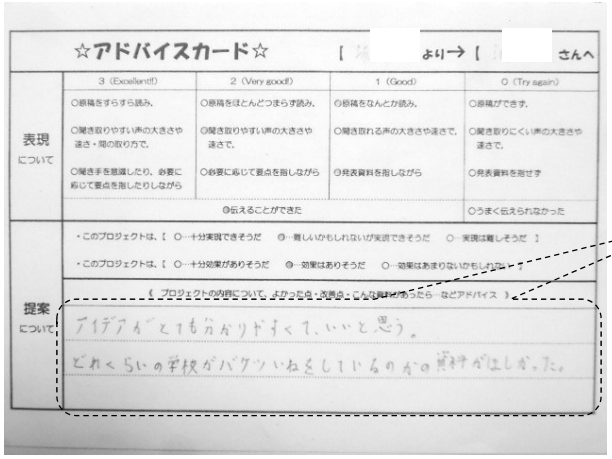
〈　第８時　〉

○　本時は，ランチルームを会場とし，ホワイトボードで仕切る形で６つのブースに分かれ，作成した発表資料【資料③】と原稿をもとに意見交流を行った。

聞き手役の子ども達は，発表を聞き，質疑応答をした後，アドバイスカード【資料④】に，表現についての評価と，提案についてのアドバイスを記入して発表者に手渡すようにした。



【資料③「水田を守ろうプロジェクト」発表資料】



☆アドバイスカード☆　[　　より→[　　さんへ

	3（Excellent!）	2（Very good!）	1（Good）	0（Try again）
表現について	○原稿をすらすら読み。 ○聞き取りやすい声の大きさや速さ・間の取り方で。 ○聞き手を意識したり、必要に応じて要点を指したりしながら	○原稿をほとんどつまらず読み。 ○聞き取りやすい声の大きさや速さで。 ○必要に応じて要点を指しながら	○原稿をなんとか読み。 ○聞き取れる声の大きさや速さで。 ○発表資料を指しながら	○原稿ができず。 ○聞き取りにくい声の大きさや速さで。 ○発表資料を指せず
	◎伝えることができた			○うまく伝えられなかった

提案について

・このプロジェクトは、[○…十分実現できそうだ　◎…難しいかもしれないが実現できそうだ　○…実現は難しそうだ]

・このプロジェクトは、[○…十分効果がありそうだ　◎…効果はありそうだ　○…効果はあまりないかもしれない]

[プロジェクトの内容について よかった点・改善点・こんな資料があったら…などアドバイス]

アイデアがとても分かりやすくて、いいと思う。
どれくらいの学校がバケツいねをしているのかの資料がほしかった。

≪アドバイスの例≫

・アイデアがとても分かりやすくて，いいと思う。どれぐらいの学校がバケツ稲をしているのかの資料がほしかった。

・実際に，水田で麦や豆などが育てられている様子の写真などをのせているとよかったです。

【資料④　アドバイスカード】

アドバイスカードについては、上半分で表現について、下半分は次の時間で資料の付加修正に生かすために、発表資料についてのアドバイスを中心にすることになっていた。しかし、指示の段階でそこをしっかり抑えていなかったため、発表の仕方（声・指し示し方など）について書いていた児童が多数いたことが課題となった。

〈　まとめ　〉

○　児童のふり返りより

○水田を守ろうプロジェクト…水田の役割や現状・環境について、知ったこと・考えたことなど

水田には、少子化、水田そのものが減ったりしていることなどたくさんの深刻な問題があることを知りました。水田には、たくさんの必要な役割を持っています。そのため、未来に水田を残さなければいけないと考えました。

水田の現状や役割を知って、水田は、たくさんの地球の環境によい役割をもっているのにその大切さを知られていないので現状は、水田が減ってきているなどのことが分かりました。そこで水田を守るために作ったアイデアが実現されたら水田が増えてほしいと思いました。

—・—・—・—・—　…水田の持つ役割の重要性について理解することができた姿

－－－－－－－－　…水田の現状について理解することができた姿

————————　…水田のこれから（未来）について考えることができた姿

○　ルーブリック表を使って，学習のふり返り（自己評価）を行った結果は次の通り。

評価	3	2	1	0
知：水田の役割や減少による影響への理解	9	１７	3	0
知：プロジェクトの必要性を説明できるか	１０	１１	8	0
技：情報の調べ方	１４	１３	2	0
技：情報の選び方	8	１５	5	1
技：資料作成	4	１６	8	1
ア：プロジェクトのアイデア	3	１５	１１	0
表：原稿の読み方	6	１８	4	1
表：声の大きさや速さ・間の取り方	6	１３	8	2
表：聞き手意識・要点の指し方	9	１５	5	0
主：調べ学習への意欲	6	２３	0	0
主：原稿作成や発表資料作成への意欲	１２	１６	0	1
主：発表への意欲	4	２０	5	0

【知識】…ほとんどの児童が水田の役割や水田の減少による影響について理解できたと感じ，プロジェクトの必要性について説明できるという児童も多い。

【技能】…複数の情報を調べた児童は半分ほどに留まり，選んだ情報がプロジェクトの効果を証明できているか自信がある児童は少ない。情報を集められず，資料を完成させられなかった児童がいたことについては手立てを反省すべき点である。

【アイデア】…情報と既習学習とをつなげることができなかったと感じる児童が多い。調べた情報を中心にプロジェクトを創ったことや，水田の現状を話し合ったところでも既習学習を扱っていたということに気づいていないことなどが考えられる。

【表現】…普段の音読でスラスラ読めない児童や，人前で大きな声を出すことが苦手な児童が低い評価をつける傾向に合った。練習で自信をつけるような取り組みが必要。

【主体性】…家庭でも情報集めを行った児童は少ないが，授業時間に情報調べはできている。発表資料を作ることに意欲的な児童が多く，分かりやすい発表を意識したという児童も多かったことから，学習全体への意欲は高かったものと考えられる。

○　自己・他者評価にルーブリック表を使ったことについてのアンケート結果は次の通り。

（1）ルーブリックを使ったことで，どんな姿を目指すか分かりましたか。
・分かりやすかった…１０名　・だいたい分かった…１９名　・分かりにくかった…０名
（2）ルーブリックを使って，自分のことをよく評価できましたか。
・よく評価できた　…１２名　・まあ評価できた　…１７名　・よく評価できなかった…０名
（3）ルーブリックを使って，友達のことをよく評価できましたか。
・よく評価できた　…１４名　・まあ評価できた　…１５名　・よく評価できなかった…０名

ルーブリック表は自己・他者を評価する際にある程度有効であったといえる。ただし，目指す姿が「だいたい分かった」とした児童が多く，もっと分かりやすい文言を検討する必要がある。

○　今回の学習では，地域に水田がない中で，水田のもつ役割を示すことで，学習への意識づけをすることができた。また，「米」の学習と「環境問題」学習とをつなぐ役割をもった学習ができたことで，総合的な学習の時間が１年を通して，より効果的に進めることができると考える。

８．成果と課題

○　養いたいＥＳＤの視点の『自然環境における「相互性」と「有限性」』において，水田の役割や減少による影響について２６名が「しっかり理解」または「だいたい理解」できたと回答しており，概ね達成できた。

○　育みたいＥＳＤの資質・能力の「システムズ・シンキング」において，社会科で学習したことを振り返ったり，新しい情報を提示したりしたことで，水田の減少の背景を概ね捉えることができて（上記回答より）いる。

○　育てたいＥＳＤの価値観の「環境への配慮」において，プロジェクトを創ることを通して「水田を守りたい」「なくしてはいけない」という気持ちを持ったというふり返りがたくさん見られ，環境に対する価値観を育てることができた。

○　ルーブリック表を使って自分・友達の評価をしたことに対し，学習後のアンケートでは「よく評価できなかった」と回答した児童は一人もおらず，ルーブリック表が評価をする際に有効であったと考えられる。

▲　養いたいＥＳＤの視点の「自然環境における『循環性』」においては，ふり返りに自分ができることについて書いている児童はほとんどいなかった。学習のまとめの際に，プロジェクトと別に今の自分ができることはないか，という視点についても考えさせるべきだった。

▲　育みたいＥＳＤの資質・能力の「長期的思考力」においては，プロジェクトとその効果について証明するために，どんな情報が適切かというところまで考えた情報収集，分析・整理ができた児童はそれほど多く見られなかった。

▲　ルーブリック表でどんな姿を目指すか分かったか，のアンケートに対し，「分かりやすかった」と回答した児童が３分の１にとどまった。文言については十分に検討する必要がある。

【参考資料：ルーブリック一覧】

	3（Excellent）	2（Very good）	1（Good）	0（Try again）
知識	水田の役割や減少による影響について			
	○しっかり理解し， ○プロジェクトの必要性を説明することができる。	○だいたい理解し， ○プロジェクトの必要性を簡単に説明することができる。	○かんたんに理解し， ○学習したことを説明することができる。	○ほとんど理解できず， ○この学習について説明することができない。
技能	発表会に向けて，			
	○いくつかの情報を調べた中から ○プロジェクトの効果を証明するような情報を選び， ○分かりやすくまとまった資料を作ることができた。	○一つの情報を調べ， ○プロジェクトの効果につながる情報を使い， ○ていねいに資料を作ることができた。	○先生に教えてもらった情報から， ○プロジェクトに関係する情報を使い， ○資料を作ることができた。	○情報源を決められず， ○情報を集められないで， ○資料を作ることができなかった。
アイデア	○新しく得た情報に，以前に学習したことを２つ以上つなげて	○新しく得た情報に，以前に学習したことを１つつなげて	○新しく得た情報から	○先生が示したモデルに沿って
	「水田を守ろうプロジェクト」を創ることができた。			
表現	○原稿をすらすら読み， ○聞き取りやすい声の大きさや速さ・間の取り方で， ○聞き手を意識したり，必要に応じて要点を指したりしながら	○原稿をほとんどつまらず読み， ○聞き取りやすい声の大きさや速さで， ○必要に応じて要点を指しながら	○原稿をなんとか読み， ○聞き取れる声の大きさや速さで， ○発表資料を指しながら	○原稿ができず， ○聞き取りにくい声の大きさや速さで， ○発表資料を指せず
	伝えることができた。			うまく伝えられなかった。
主体性	○進んで家庭でも調べ学習を進め， ○発表原稿や資料を何度も見直し， ○分かりやすい発表をすることができた。	○授業中に自分で調べ学習を進め， ○発表原稿や資料を作り， ○分かりやすい発表をしようと意識できた。	○先生から教えてもらって調べ， ○発表資料を作り， ○発表をすることができた。	○調べ学習が進められず， ○発表資料を作ることができず， ○発表できなかった。

小学校第６学年　外国語科　学習指導案

東京大学大学院教育学研究科
学校教育高度化専攻教育内容開発コース
修士課程１年　秋山　莉菜

１．単元名　「I like my town. 自分たちの町・地域」

２．単元の目標

・自分の町・地域、相手の町・地域にある施設やお祭りなどの語、その様子について尋ねたり答えたりすることができる。（知識・技能）

・町・地域について簡単な語句や基本的な表現で話される英語を読んだり聞いたりして、その概要を捉えることができる。また、慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分の町・地域について書いたり、自分の考えや気持ちを伝えたりすることができる。（思考・判断・表現）

・聞き手を意識しながら、自分の町・地域について伝えようとする。相手の伝えようとしていることを、工夫して理解しようとする。（主体的に学びに向かう態度）

３．単元について

（教材観）

本単元は、児童にとって身近である自分の町・地域にある施設、お祭りなどを、対面・オンラインで外国人児童と互いに紹介しあう活動をゴールとして進めていく。自分の町・地域における特に自分が好きな施設・お祭り、地域にあってほしいと思う場所を、クラスメイトや外国人児童と相互に伝えあう活動を通して、自分や外国人児童が住む地域への興味関心を育てることができ、かつそれぞれの地域への理解がより深められると考える。また、外国の小学校と連携し、外国人児童と本単元の学習内容を通して英語で交流する活動を単元の展開活動として加える事で、日本語が通じない相手と英語でコミュニケーションをとる真正な体験の機会を児童にもたらすことができ、加えて本単元、そして本単元以降の英語学習における児童の動機づけを高めることにも繋げることができる。また本交流活動は、日本語が通じない相手と伝えあうためにはどの様な工夫をするべきか、と児童が責任をもって互いに協働し活動に取り組む手立てにもなる。一学期のまとめにあたる単元として、児童がこれまでの外国語科における学びを活かし交流活動に取り組み、英語で相手とコミュニケーションを図る意欲を高め、その楽しさを味わい、二学期に個々人が深めるべき学びのポイントを見つけ出せるよう彼らを導くような単元としたい。

（児童観）

本校で昨年末行った「児童の自己評価」結果によると、本学級の児童は、全体的に前向きに学習に取り組み、授業にも一生懸命取り組もうとしている。各教科各単元におけるテスト結果を見ても、学習内容の定着度は概して高い。しかし、第５学年での学びを踏まえ、外国語科の授業へ自信をもち楽しんで参加する児童と、不安があり自分から進んで取り組めない児童との差が開けてきている。また、高学年児童の発達段階として、男女の垣根なく友達との交流を楽しみながら外国語コミュニケーション活動を行う児童がいる一方、異性との交流をためらう児童も一定程度存在する。本校の第６学年は、第３・４学年で外国語活動の授業を受けることがなく、学校外で英語の塾等に通うものも大変少ないため、一般的に英語へ慣れ親しむ経験が少ない中で、英語学習や英語での相互交流を楽しみながら、小学校外国語

科の学習内容として必要な英語を読み・書く基礎的な力をつけうる単元指導計画を考えた。

（指導観）

本単元では、ゲームやチャンツ、日本人児童・外国人児童との交流活動を通して、施設・お祭りの名前、その様子、I like～、We have/don’t have～などの表現に慣れ親しみ、町・地域のお気に入りを紹介したり、相手のお気に入りについての紹介を聞いたりする活動により、児童が英語でのコミュニケーションを楽しいと思えるよう指導したい。同時に、英語で外国人とコミュニケーションすることができる、といった自己有用感・自己肯定感や、外国人との交流に際して、単元後半の展開活動である交流活動に向けた学習の見通しをつけながら、グループで協働し準備をすることで、児童がそれまでの学びを深めつつ、彼らの計画性や助け合いの心も育てたい。交流活動への見通しをつけながら協働して学ぶ過程を通じて、自分の住む町・地域だけでなく、外国人の交流相手の住む町・地域にも興味関心をもたせたい。また、特に日本人・外国人との交流活動を通し、相手がなぜその事柄を紹介するのかなど、相手の表現内容の背景について考察する振り返り活動を、日本語を用い行うことで、ただの交流に終わらせず、考える力をつける活動としてとらえたい。英語４技能に関しても、交流で自分たちの伝えた内容・聞き取った内容を振り返る活動を日本語で行うことで、より相手に伝わる英語を使い、より相手の英語を理解するために、できていた事や改善点を把握する機会を与えたい。

４．ＥＳＤについて

（ＥＳＤの視点）

自分の町・地域における特に自分が好きな施設・お祭り、地域にあってほしいと思う場所を、クラスメイトや外国人児童と相互に伝えあう活動を通して、互いの意見が相互に共通する点や、互いの意見の多様性に気づくことができる。また日常の使用言語が違う人との交流は、相互に協力し合うことを生徒に求めることとなる。そこでは、互いに歩み寄って相手の意図を汲み取ろうとすることが必要であり、国際理解の場における連携性に関わる単元であると言える。

（ＥＳＤで育みたい資質・能力）

外国の人との交流を通して、コミュニケーション力を育成する単元である。ただ会話ができるようになるだけではなく、「なぜ相手がこの発表をするのか」「なぜこのような選択をするのか」を考えながら相手の発表を聞いたり、また自分が知っている相手の国の情報などを統合させたりしながら、相手の表現内容の背景について考察する振り返り活動を取り入れる。これは外国の文化や風習、慣習について体系的に理解しようとする能力の向上につながると考えている。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

外国の人との交流を通して相手のことを理解するということは、互いの人権・文化を尊重する価値観の醸成に関わる。人は物事に対して、所属する国や集団の文化により社会化された価値基準で判断をすることがあるため、相手や自分の社会的背景を踏まえ対話をすることが非常に重要である。一方、相手の社会的背景を気にしすぎることで、他者理解においてステレオタイプに陥るという危険もある。物事への価値の感じ方を反省的に使いつつ、相互理解の推進を進めようとする姿勢を身に付けさせたい。

（ＳＤＧｓへの貢献）

本単元は、様々な国の人との出会いを通して、ゴール１７（パートナーシップ）に関わる単元である。子どもたちは、日常的に海外の人と関わる機会が多いわけではない。しかし、現代社会の諸課題に取り組む上で、海外の人との協働は欠かせず、この単元を通して外国の人と関わる経験、そして能力の必要性に気づかせたい。

５．評価規準

ア知識・技能	イ思考・判断・表現	ウ主体的に学習に取り組む態度
①自分の町・地域について、学習した語・表現を発音し、聞き取りできる。 ②音声で慣れしたしんだ語を、大文字、小文字、スペース、記号に気を付けて書きあらわそうとする。	①自分の町・地域について、自分の気持ちを付け加えながら説明することができる。 ②相手の発表内容の背景や自分の発表内容について、考察することができる。	①自分の町・地域について相手と伝えあう際、工夫をして交流ができる。 ②相手の町・地域についての興味関心をもつ。

６．単元展開の概要（全５時間）

	主な学習活動	学習への支援	◇評価　　（みとり方）
1	①外国人児童と出会う(写真など) ②単元のターゲット語句・表現を、デジタル教科書やゲームを通して学ぶ	・第 4 時の外国人児童との交流活動を通した本単元の学習へ、前向きなイメージや見通しを児童が持てるよう心掛ける ・初出語・表現への慣れ親しみ	◇ア①　学習した語・表現を聞き、読み、それが何を示すか理解することができる （観察）
2	・単元のターゲット語句・表現を、チャンツ・ゲームを通して発音しながら学ぶ	・単元のターゲット語句・表現を発音練習する際、児童が語と音を結び付けられるよう心掛ける	◇ア①　学習した語・表現を発音することができる （観察）
3	①自分の町・地域のお気に入りについて、クラスの友達と伝えあう ②グループで外国人児童との交流の準備をする	・より多くのクラスメイトと交流できるよう支援する ・外国人児童との交流準備に用いるワークシートへの記入が難しいグループを補助する	◇イ①ウ①　自分の町・地域について、自分の思いを表現しながら友達と伝えあうことができる （観察・ワークシート）
4	・外国人児童と、自分の町・地域のお気に入りについて伝えあう	・本単元以前の既習事項(あいさつ表現、ボディーランゲージなど)を意識しつつ、前時で計画した交流が各グループできるよう支援する	◇イ①ウ②　自分の町・地域について、自分の思いを表現しながら、外国人児童を相手に工夫しながら伝えあうことができる（観察・ワークシート）
5	①外国人児童との交流を振り返る ②自分らが用いた英語を振り返る ③自分らが用いた英語・英語表現を英語で書く	・交流時に記入したワークシートや撮影したビデオを見ながら、自分と交流相手の話した内容、話す姿勢など振り返られるよう支援す	◇イ②ウ②　相手が伝えた内容の背景について、考察することができる ◇イ②　自分が伝えた内容について、省察することが

		る ・大文字、小文字、スペース、ピリオド、クエスチョンマークなどに気を付けて、交流で使用した英語・英語表現を適切に書き表せるよう支援する	できる ◇ア②　本単元で学習した語・表現を英語で書き表そうとする （観察・ワークシート）

中学校第２学年　社会科　学習指導案

広陵町立真美ヶ丘中学校

教諭　　丹後　七重

１．単元名　　「近畿地方　－大都市圏と私たちのまち－」

２．単元の目標

・長い歴史を持つ近畿地方の産業が都市と密接に関わり、その時代のニーズに合った形で発展していることを理解する。【知識・技能】

・真美ヶ丘ニュータウンと関西大都市圏とのつながりに着目し、関西大都市圏の形成における交通網の役割について考える。【思考・判断・表現】

・様々な資料から適切なものを取捨選択し、高齢化の進行が懸念されるニュータウンの公共交通機関の在り方について意欲的に追究する。【主体的に学びに向かう力】

３．単元について

（教材観）

本単元は、平成29年度告示中学校学習指導要領解説社会編第２章第２節１「地理的分野の目標、内容及び内容の取扱い」（２）内容Ｃ「日本の様々な地域」に位置付けられる。

> （３）日本の諸地域
>
> 次の①から⑤までの考察の仕方を基にして、空間的相互依存作用や他地域などに着目して、主題を設けて課題を追究したり解決したりする活動を通して、以下のア及びイの事項を身に付けることができるよう指導する。
>
> ①自然環境を中核とした考察の仕方
>
> ②人口や都市・村落を中核とした考察の仕方
>
> ③産業を中核とした考察の仕方
>
> ④交通や通信を中核とした考察の仕方
>
> ⑤その他の事象を中核とした考察の仕方　　（下線部：筆者）

大阪市、神戸市、京都市を中心とした関西大都市圏を有する近畿地方は、古代から多くの都が置かれていた長い歴史のある地域である。貴重な文化財は全国のおよそ５割を占め、また世界文化遺産も５か所あり、多くの観光客が訪れる歴史的都市がたくさんある。

長く日本の中心地であった近畿地方では、都市と結びついた産業がさかんに行われてきた。大消費地である都市の周辺では京野菜や大和野菜などが生産され、これが今の近郊農業につながっている。また、洗練された品質の良いものを求める人々のために作られた製品は、伝統的工芸品として現代の私たちの心を満たしてくれている。

江戸時代に入りさかんに行われた、河内木綿を使った綿織物などの手工業は、現在の奈良県広陵町の靴下産業に大きな影響を与えている。大阪湾沿岸の埋立地では鉄鋼・石油化学工業、大阪平野では家電製品や食料品の工場が多く立ち並ぶ。外国との激しい競争が課題である阪神工業地帯は今、転換期をむかえている。

奈良県広陵町にある真美ヶ丘ニュータウンは、大阪府のベッドタウンとして宅地開発された地区である。近鉄電車やＪＲ線で都心とつながり、いわゆる「奈良府民」の多いことが特徴である。一方で、1970年代に開発された地区ではすでに高齢化が問題となっている。

真美ヶ丘中学校区には近鉄五位堂駅まで運行する民間企業「奈良交通バス」があり、広陵町コミュニ

ティバス「広陵元気号」の需要がほとんどない。しかし、広陵中学校区では経営難によって「奈良交通バス」が撤退したことで「広陵元気号」の運行が始まった経緯がある。近鉄箸尾駅が北端に一つあるだけの広陵町は「陸の孤島」ともいわれており、高齢化が懸念される広陵町にとって、自動車に頼っている町民の生活は公共交通機関の充実が喫緊の課題である。

（生徒観）

授業を展開するにあたり、事前にアンケートを行った。自分たちが住む広陵町について、「緑が豊かな町」、「大阪へ行くのに交通の便が良い」など肯定的な回答がある一方で、中学生らしい「都会へのあこがれ」を記述する生徒が少なからずいた。また、『広陵元気号』に乗ったことのある生徒は 155 人中 7 人で、多くの生徒はその必要性を感じていないという結果になった。小学校で『広陵元気号』バスのデザインを考えるなど、深く関わっていると思いきや、「どこを走っているのかわからない」、「いつ走っているのか知らない」などといった声や、「車で行くほうが早い」、「高齢者が乗るバスだと思っていた」という公共交通機関の重要性を認識していないであろう声も多々見られた。また、「真美ヶ丘中学校区には『奈良交通バス』が通っているから、『広陵元気号』は必要ない」といった声もあり、現在・未来を含め広陵町全体の姿を考える視点を大切にさせたいと考えた。

（指導観）

まず、近畿地方の長い歴史は現在の都市や文化に影響を与えていることに気付かせる。人々の工夫や努力によって受け継がれてきた歴史的な街並みと伝統文化の重要性について考える 1 時間とする。

次に、近畿地方の長い歴史が農業や林業と深いかかわりを持っていることに気付かせる。かつて都のあった近畿地方では、その時代ごとに人々のニーズに合った農業や林業が発達したことを理解させる。

さらに、経済的地位の低下した阪神工業地帯が、研究機関の誘致や医療関連産業の集積などによって工業地帯の再生をめざしていることとともに、外国との競争にさらされる工業が今、転換期をむかえていることを理解させる。

これらの学習を踏まえて、視点を地域に移し、関西大都市圏と真美ヶ丘ニュータウンとのつながりを考えることによって、真美ヶ丘地区の開発と今後懸念される課題をとらえさせるとともに、鉄道網の発達によって都心と郊外が結ばれ、関西大都市圏が形成されたことを理解させる。

高齢化の進行が懸念される広陵町の課題に対し、コミュニティバス「広陵元気号」の今後の運営の在り方を考えさせる。広陵町の現在の姿を 20 年後の姿をふまえ、「広陵元気号」を活用し自動車に頼らない町民の生活を想定して、地域住民が利用しやすい「広陵元気号」の運行路線を考えさせる。最終的には「広陵元気号」の現在の運行路線と比較し、持続可能なまちづくりを考えさせることで、批判的に考える力（クリティカルシンキング）やコミュニケーションを行う力を育成したい。

４．ＥＳＤについて

（ＥＳＤの視点）

上述の通り、広陵町の課題として公共交通機関の充実が挙げられる。地域住民にとって住みやすいまちづくりを考えることは、住み続けられるまちづくりについて考えていくことである。広陵町の 20 年後の姿をふまえ、公共交通機関の在り方を考えさせることは、ＥＳＤの「公平性」、「連携性」といった見方・考え方を働かせることができる教材といえる。

（ＥＳＤで育みたい資質・能力）

地域の課題について考えるにあたっては、鉄道網の広がりを捉えることから、広陵町と関西とのつながりに気づかせ、自分たちの住む町に経済面、文化面において様々な影響があることを考えさせる。この学習を通してシステムズシンキングを働かせることになる。また、高齢化という課題に対する解決を考える場面では、コミュニティバスに目を向け、現在の運行状況や利用状況を見直し、代替案を考える活動を取り入れている。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

地域の課題である高齢化に目を向けることは、将来世代にとって住みやすいまちづくりを考えること

であり、また地域の格差に目を向ける、すなわち世代内の公正に目を向けることにもつながる。

（ＳＤＧｓへの貢献）

本実践においては、「ずっと住み続けたい町」を考えることが持続可能な社会づくりに関わると考える。人々が重視する住環境のうち、「陸の孤島」広陵町の課題である交通に焦点をあてることで、高齢者を含むすべての住民にとって住みよい町の姿を考えることができる。また、自動車に頼る生活から公共交通機関を利用する生活へのシフトチェンジを図ることで、地球環境問題にも考えを深めることができる。よって、ゴール３「健康・福祉」、ゴール７「エネルギー」、ゴール 11「持続可能な都市・居住区」に該当すると考える。

４．評価規準

ア知識・技能	イ思考・判断・表現	ウ主体的に学習へ向かう態度
①長い歴史を持つ近畿地方の産業が都市と密接に関わり、その時代のニーズに合った形で発展していることを理解している。	①真美ヶ丘ニュータウンと関西大都市圏とのつながりに着目し、関西大都市圏の形成における交通網の役割について考え、自分の言葉で説明している。	①様々な資料から適切なものを取捨選択し、高齢化の進行が懸念されるニュータウンの公共交通機関の在り方について意欲的に追究している。

５．単元展開の概要（全５時間）

主な学習活動	学習への支援	◇評価
第１次 〇近畿地方の地域的特色を大観する。 ・さまざまな歴史的都市の成り立ちを理解する。	・近畿地方の長い歴史が、都市や文化に影響を与えていることをとらえさせる。	◇人々の工夫や努力によって受け継がれてきた歴史的な街並みと伝統文化の重要性について考えることができる。
〇近畿地方の農林業の特色をとらえる。 ・農業や林業を守るための工夫を知る。	・近畿地方の長い歴史が、農業や林業と深いかかわりをもっていることに気付かせる。	◇「都」のあった近畿地方で、その時代ごとに人々のニーズに合った農業や林業が発達したことを理解することができる。
〇近畿地方の工業の変遷について考える。 ・軽工業から重化学工業、先端技術産業へと変化した工業のようすを読み取る。	・経済的地位の低下した阪神工業地帯が、研究機関の誘致や医療関連産業の集積などによって工業地帯の再生をめざしていることに言及する。	◇外国との競争にさらされる工業が今、転換期をむかえていることを理解することができる。
第２次 〇関西大都市圏と真美ヶ丘のつながりを考える。 ・真美ヶ丘地区の開発を理解する。	・真美ヶ丘ニュータウンが大阪のベッドタウンとして開発されたこ	◇鉄道網は、関西大都市圏を形成する要因の一つであることを

	とに言及する。	説明することができる。
○20 年後の広陵町の姿を想定し、持続可能なまちづくりを考える。 ・地域住民が利用しやすい「広陵元気号」の運行路線を考える。	・高齢化の進展が懸念される広陵町の課題をとらえ、コミュニティバス「広陵元気号」の今後の在り方について考えさせる。	◇広陵町の現在の姿と 20 年後の姿をふまえ、「広陵元気号」を活用し自動車に頼らない生活の在り方について、意欲的に追究している。

中学校第２学年　　総合的な学習の時間　学習指導案

練馬区立光が丘第四中学校
教諭　　木内　貴士

１．**単元名**　「共に生きよう まわりと世界と」人権感覚の伸長、世界平和への意識の向上

２．**単元の目標**

・文化理解体験や歴史学習を通して、和人とアイヌに関する理解を深める。　（知識・技能）
・読み物や学習課題への取り組みを通して、世の中の多様な人々への想像力を働かせ、連携してより良い社会を築くことについて多面的多角的に考察する。　（思考・判断・表現）
・個人や班での言語活動や意見交流を重ねたり、講師を招いて交流したりすることで、自分と異なる他者を積極的に理解し、共に生きようとする態度を育む。　（主体的に学習に取り組む態度）

３．**単元について**

（教材観）

学級活動ではいじめアンケートを教材として用い、同じ学校の生徒が互いを理解し尊重して学校生活を送ることについて改めて考えさせる。仲間との人間関係のことであり、生徒はまさに自分に関する問題として考えることができる。道徳においては、物理的構造的暴力にさらされる世界の難民についての資料を教材とする。難民に対して分け隔てなく積極的に、かつ具体的な援助内容を考えて関わっていくことができるかどうか自問することができる教材である。さらに社会科において、江戸時代に存在した被差別階級やアイヌへの差別の歴史を学ぶ。このような複数の教科や領域での学びを総合していくことよって、自分たちに関わりのある問題と現代的諸課題の関わりを見出させていく。そして、総合的な学習の時間では和人とアイヌ双方の文化を教材として取り上げる。アイヌに関して、中学校社会科では交易や差別の歴史を細切れにしか扱ってこなかった。ともすれば、知識理解がつながらず差別への理不尽さをさして深く抱かずに通り過ぎてしまう生徒も出てしまう。世間を見渡しても、政府がアイヌを先住民族と初めて明記した新法案がようやく平成３１年の国会に提出されるという動きであり、アイヌへの配慮がこれまで早くなされてきたとは言えない。身近にいるがなかなか理解が進んでいなかった存在としてアイヌを取り上げることで、現代的課題の解決への具体的な一歩を踏み出させる。

（生徒観）

少人数のクラスではあるが、人間関係に苦しむ生徒はいる。生活指導の積み重ねにより一人一人は徐々に成長しているものの、その苦しむ生徒に対してより良い接し方を探したり、級友としてあるべき自分たちの姿を具体的に考えたりすることについては、教員による継続的な指導や支援がまだ必要である。ましてや、身近な地域のみならず世界に目を向けること、その世界に多様な文化や価値観が存在し自分たちと同様に尊重すべきこと、共に手を携えて不平等な現実を改善していくことについては、計画的な学習活動の積み重ねでこれから身に付けていく必要がある。

（指導観）

学活、道徳、社会科では、級友への接し方を振り返らせ、手を差し伸べる意義と難しさに思いを致させ、理不尽な差別の歴史を扱う。それらを踏まえ総合では一歩前に進み、文化を体験することを通して相互尊重を考えさせていく。班でゲームに取り組み、また栄養士を招いて質問や交流をしつつ、和人文化を確認させる。また、アイヌ文化活動アドバイザーを招いてアイヌ文化への質問や交流を行う。

４．ＥＳＤについて

（ＥＳＤの視点）

普段、日本で生活している私たちは、日本の文化を無意識のうちに当たり前のことと感じている。しかしその日本の文化をアイヌの人たちから見た和人文化として見直してみること、そしてアイヌの人たちの文化そのものについて学ぶことで、自身を取り巻く文化を相対化して捉えることができる。これらの学習を通して、ＥＳＤの見方・考え方の「多様性」「連携性」を養う。

（ＥＳＤで育みたい資質・能力）

班員や講師、栄養士との交流により、「コミュニケーション力」の伸長を図る。自分たちが持つ文化とは異なる文化で生活する人々の考え方や振る舞いには、時に違和感をもつこともある。しかし、対話を通して相手と関わり多様な考え方や文化・慣習への理解を深めていくこと、そのために多様な他者と関わるという力は、本実践のテーマでもある「人権感覚の伸長、世界平和への意識の向上」には欠かせないスキルである。また、班活動に当たっては、たとえ自分が属するよく知った友達でもその中に自分と異なる意見を持つ人はいる。そのことを受け入れ、その人たちとも交流や調整をしながら意見を磨き上げていくことにより、「協働的問題解決力」を伸ばしていく。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

生まれたときから同じ場所で生活し続けている生徒たちにとって、自身の感覚や取り巻く文化を相対化して捉えることはなかなか難しい。そのために必要なのは、自分と他者は違って当然なのだと理解すること、そしてその他者の文化や人権を尊重することである。他者を学ぶことを通して、自分たちの人権や文化への意識を高める。そして自他ともに尊重し大切にするという価値観を育てたい。

（ＳＤＧｓへの貢献）

本実践は、多様な考えや文化、慣習をもつ人とどのように共生していくかをテーマにしており、ゴール１０（人や国の不平等をなくそう）、またはゴール１６（平和と公正をすべての人に）に関わる実践である。身近なところにあるいじめなど人間関係の問題は、ヘイトスピーチに象徴される異文化差別と根を同じくする人権問題である。さまざまな人と協力してより良い社会を築き上げる生徒の育成を目指し、生徒の心の中にある他者への壁を取り払い、平等、平和、公正といったゴールへとつなげたい。

５．評価規準

ア知識・技能	イ思考・判断・表現	ウ主体的に学習に取り組む態度
①自由交易を行っていたアイヌがやがて和人優位の関係に組み入れられていくこと、明治時代に入りさらに生活の場と伝統文化を奪われてきたことを理解している。 ②身近な文化の一例として、和食の魅力を理解している。 ③アイヌの文化を和の文化と比較しながら理解している。	①困っている人に対して真に手を差し伸べることを、現実的手段も含め真剣に考えている。 ②和人とアイヌ双方の文化や歴史の理解を踏まえ、これからの社会で双方が共に生きていくことについて前向きに、かつ多面的多角的に考察している。 ③今回の単元と関連する世界的な問題について理解している。また既習事項を生かし、より良い答えを追究している。	①学習課題づくりに意欲的に取り組んでいる。 ②江戸時代の身分制度について関心を高め、差別を許さない態度をとる。 ③和食すごろくに意欲的に取り組んだり栄養士の話をしっかり聞いたりして、和食の多様な魅力に関心を持っている。 ④アイヌ文化体験、交流等を意欲的に行い、興味をもって質問や会話をしている。

６．単元展開の概要（全 11 時間）

主な学習活動	学習への支援	◇評価　　・備考
第１時（学級活動） ・いじめアンケートに取り組む。公平で豊かな人間関係づくりに向けた意見を出し、クラスで集約して学習課題をつくる。	・班活動で一人一人に発言させる。チカップ美恵子氏の文章も活用し、考えさせる。	◇ウ①　いじめ撲滅について切実さをもって考え、学習課題づくりに意欲的に取り組んでいる。
学習課題例　さまざまな人と共により良い社会をつくるには、どうしたら良いだろう。		
第２時（道徳） ・物理的構造的暴力にさらされている世界の難民の存在を知り、彼らに対して自分は分け隔てなく、かつ積極的に関わっていくことができるかどうか自問する。	・「国境線が鍛える共生の思考」（あかつき）を活用する。発問を工夫し、日本も他国との関わりなしには存在できないことに気付かせる。班活動で意見を相互発表させる。	◇イ①　困っている人に対して同じ人という立場から助けていこうとする心情を持ち、難民の現状や、援助の手順等の現実を踏まえた真の国際貢献について真剣に考えている。
第３～５時（社会科） ・江戸時代の身分制度、特に被差別身分の暮らしを学ぶ。	・特に差別について「えた・ひにんとされた人々はどのような暮らしをしていたのか」と問い、調べさせる。	◇ウ②　同じ人間だが身分ごとに異なる暮らしをしていたこと、身分による差別があったことについて関心を高め、差別を許さない態度をとっている。
・アイヌと和人の交易史を学ぶ。	・「アイヌ民族：歴史と現在」を活用する。アイヌに対する中世日本と江戸幕府の対応を比べさせ、内容が変化していることに気付く。	◇ア①　中世のアイヌは自由交易を行っていたが江戸時代には和人優位に変化したこと、和人との間に３つの大きな戦いが起こった末に幕府が蝦夷地を直接支配したことを理解している。
・明治時代の「日本」とアイヌとの関係を学ぶ。また、第８時で招くアイヌ文化講師への質問を考える。	・終盤に発問「否定されたアイヌの文化とは、どんな文化？」「和の文化とは？」次回から、それぞれの文化をじっくり学ぼうと呼びかける。	◇ア①　明治時代に「日本」への同化政策や土地取り上げ、北海道旧土人保護法制定が行われ、生活の場や伝統文化が否定されてきたことを理解している。
第６～７時（総合） ・「和食すごろく」に取り組み、楽しみながら和人文化を学ぶ。また、アイヌ文化講師への質問	・和人文化の一例として和食を取り上げる。班で楽しませる。	◇ウ③　活動に意欲的に臨み、和食の多様な魅力に関心を持っている。

を引き続き考える。 ・ＰＣ室での調べ学習と栄養士による説明で和食の魅力を学ぶ。給食で実際に食べてみる。	・和食メニューの給食日の４時限目に実施。ワークシート配付、ＰＣ室で調べ学習。その後、栄養士を招いて説明してもらう。	◇ア②　和食の基本構成（一汁三菜）、価値観（いただきます、もったいない等）、技術（無駄が少ない＝持続可能性が高い）、歴史（平安末期から）、国際的な評価（ユネスコ無形文化遺産）などを理解している。
第８～９時（総合） ・衣食住に関わるアイヌ生活文化の体験を行う。アイヌ文化活動アドバイザーの講演を聴き、質問する。	・事後、学んだことや感想を書かせる。（宿題）	◇ウ④　体験、交流等を意欲的に行い、興味をもって質問や会話をしている。 ◇ア③　アイヌの文化について、和人文化と比較しながら理解している。
第１０～１１時（総合） ・「さまざまな人と共により良い社会をつくるには、どうしたら良いだろう」の問いに取り組む。和人とアイヌ双方の文化の良い点や二つが接近し連携するとどんな効果があるかないか、これまでの国としての日本の取り組みの改善点、今後のより良い政治のあり方や注意点等について考察する。	・班活動をメインにして、たくさん意見を出させるようにする。 　また、学習内容がＳＤＧｓにつながるよう発問も工夫する。 「今回の学習を生かすと、ほかにどのような問題を解決できる？」 Ｓ：世界の難民受け入れ問題 Ｓ：外国人労働者受け入れ問題	◇イ②　和人とアイヌ双方の文化や歴史の理解を基に、これからの社会で双方が共に生きていくことについて建設的に、かつ多面的多角的に考察している。
・前時で新たに挙げた世界的な問題を確認し、同様に班での話し合い活動、発表を経て個人で意見を形成する。	・班の回答は、あらかじめ告知の上、廊下に後日掲示する。個人の答えたワークシートは回収して評価する。	◇イ③　今回の単元と関連する世界的な問題について理解している。また既習事項を生かし、より良い答えを追究している。

＜第１時配布資料＞

〈資料〉 アイヌ民族であること－娘の選択（一部抜粋）

1988年４月末、雪もすっかり解けて、まもなく桜も開花というころにわたしは娘といっしょに札幌に引っ越してきた。わたしにとって、およそ20年ぶりの北海道での暮らしだった。

しかしわたし一人の稼ぎでは、食べていくのがやっとという経済状態で、そんな精神的負担が娘にも重くのしかかっていた。毎日が綱渡りのようなものだったのだから。

それでも、娘は娘なりに一生懸命やっていた。だが、貧しいことに加えて、アイヌ民族であるという理由で中学校で差別を受け、それにたえきれなくなって、１年あまりの札幌での暮らしにピリオドを打ち、東京に戻ってしまった。苦しいことの多かった札幌での暮らしは、娘にとって悪夢のようだったのだろう。北海道はわたしの故郷ではあっても、東京生まれの娘にとっての故郷ではなかったのである。傷つきやすい、小さな魂は一生懸命考えて、自分の道を探り、歩きはじめたのである。それ以来、わたしたちは別々に暮らしている。

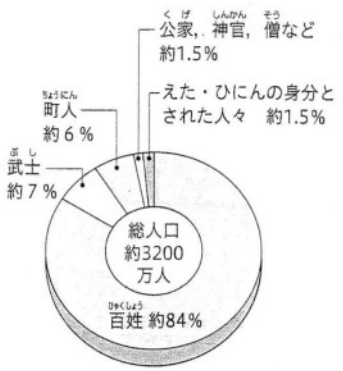
差別の痛みを知らない人は、よく、差別に打ち勝つ強さを要求する。しかしこれはどう考えてもおかしい。いじめられる原因を引き起こしたわけでもないのに、アイヌ民族の血を引いているというだけで、いじめられてしまうのである。いじめる側の問題を問うこともなく、目をつむってしまう社会の不条理に怒りを感じる。

（『アイヌ文様刺繍のこころ』 チカップ美恵子 1994年　岩波書店）

＜第３時配布資料＞

「中学歴史　未来をひらく」（教育出版）

より引用



身分別の人口の割合
（江戸時代の末『近世日本の人口構造』）

雪駄づくり
（雪駄は江戸時代の履物で、竹の皮と牛の皮が使われていました）

＜第４～５時配布資料＞

「アイヌ民族：歴史と現在」

（公益財団法人アイヌ民族文化財団）

＜第４～５時配布資料＞

江戸以前　自由な交易・対等な関係
アイヌは本州（東北地方北部）とも自由に交易
本州から武士が移住、侵入。**コシャマインの戦い（1457 年）**で**アイヌは生活圏を回復。**

江戸幕府成立　幕府→→→→→→→→→松前藩→→→→→→→→→家臣
「黒印状」
蝦夷地における
交易独占を認める

領地や米を与えられない
代わりにアイヌとの交易を認める
得た物を本州商人に売った金が家臣の生計
↓
和人とアイヌの住む場所を線引き
アイヌが本州と取引するのは禁止
↓

江戸前期　交換比率がアイヌ不利に
↓
シャクシャインの戦い（1669 年）
和人優位が確立
↓

江戸中期　家臣→→→→→→→→→→→→商人
商品経済の拡大で借金
商人がアイヌ交易に乗り出す
アイヌ民族を使役して漁業
こんぶ＝長崎へ　にしん＝肥料
さけ

ロシア→→→幕府
ラクスマン来航
貿易要請

松前藩　家臣→→→→→→→→アイヌの強い指導者・ツキノエ
国後島や択捉島などに
貿易要請
↓
アイヌ民族への
使役が激化

何度も断ったが受諾
↓
↓
和人を殺害
クナシリ・メナシの戦い
（1789 年）

江戸後期　幕府→→→→→→→→→→→→→→→→→→→→→→→→（商人）→→→→→→→アイヌ
ロシアへの対抗もあり、**蝦夷地を直接支配**（商人が仲介）
アイヌ民族の和人化。それまでなかった病気で人口激減。
↓

明治時代　同化政策（伝統的な生活習慣やアイヌ語の禁止。名前を日本風に。）
土地取り上げ（国有地（国。さけ漁しか猟禁止）と民有地（和人）に）
「北海道旧土人保護法（1899 年）」
（農業の強制、「アイヌ学校」で日本語強制　＝　生活と文化の否定）
↓

（　？　）　「アイヌ文化振興法」により廃止（　？　年）

中学校第３学年　社会科（公民的分野）学習指導案

墨田区立両国中学校
主任教諭　輪湖　みちよ

１．単元名　「私たちの暮らしと民主政治」
（使用教科書：教育出版「中学社会　公民　ともに生きる」第３章）

２．単元の目標

・資料から読み取った現代社会の特色や課題について、どのような政治のしくみを活用して改善したり、対策したりすればよいかを考え、理解を深める。（知識・技能）
・現代社会の特色や課題に対する改善策や対策を多面的・多角的に考え、SDGｓへの貢献と関連付けて表現する。（思考・判断・表現）
・現代社会の特色や課題を自分との関わりから捉え、よりよい社会・持続可能な社会を目指そうとする。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（教材観）

前単元までに学習した現代社会の特色や課題（情報化・グローバル化・超高齢人口減少社会・投票率の低下・人権課題・国際社会の諸課題）をよりよい方向へ導くために、どのような政治が求められているのかを学ぶ単元である。立法、司法、行政の三つの権利や選挙、税金といった政治の仕組みについて学んだことを踏まえて、身近な地域で生活する人々から聞き取り調査を行う。実社会で生活する人々の言葉は、より現実味があり切実な願いとして生徒が考えることができる。またこの調査を通して人々の願いに直にふれることでより良い社会の在り方を主体的に考えることができる。

（生徒観）

授業内で９月に行われた総裁選のニュースや現首相、内閣の人員について「知っている」と答える生徒の割合はおよそ２割弱であり、小学校で学習した内容についても「知っている」と答える生徒はおよそ５割いるが、「説明できる」生徒となると１割にも満たなくなる。このことから、政治に関する関心は高いとは言えず政治のしくみについての知識も差が見られることが予想される。前単元までに学習した現代社会の特色については、資料の読み取りを通して理解し、自分に身近なことがらと関連付けて説明できる生徒が８割近くいる。また、投票率の低下や人権課題の学習については、国民主権や自由権、平等権をめぐる討論に積極的に取り組む姿が見られたことから、関心の高さが予想できる。さらに、２学年で地域の防災・減災対策を考える際に野外調査や対策の提案等に主体的に取り組む姿が見られたことから、地域の特色改善策や課題解決策を考えることについての意欲も高いと予想される。

（指導観）

各時間において、現代社会の特色や課題を示す資料を読み取り、自分達が大人になっていく未来社会の特色や課題を想像することでデータに基づき、見通しをもつ力や世代間の公正、責任性についての見方を身に付けていくことができるようにする。また、知識として身に付けた立法・行政・司法と地方自治の役割やしくみを現代社会の課題解決や未来社会に向けた改善に生かす方策を考えることで、批判的思考力や代替案の思考力を各自で高めると共に、意見交換を通して方策の多様性に気付くことができる

ようにしていく。さらに、単元の課題として「未来社会をよりよくするためのアイデア提言」を設定し、各時間に身に付けた知識や技能及び考えたことを活用しながら個人や班でまとめ、互いに発表し合ったり、地域の方々や企業、関係団体の方にアドバイスをいただいたりすることで、相互性やコミュニケーション力、協働的問題解決力を養っていく。

４．ＥＳＤについて

（ＥＳＤの視点）

国民の願いは、立場や住んでいる地域、心情などに大きく影響される。政治はまさにそういった多様な人々の願いを受けて実現されようとするものである。さらに、すべての人に公正でなければならず、国民の生活に関わる重大な責任をもっている。

（ＥＳＤで育みたい資質・能力）

立法・行政・司法と地方自治それぞれの役割やしくみを学ぶ際に、現代社会の特色や課題を示す資料の読み取りを行う。資料に基づき、今後予想される未来社会の特色や課題への見通しをもつことで、長期的思考力を高める。また、立法・行政・司法と地方自治それぞれの役割やしくみをどう活用して改善や対策を行っていけばよいかを自分の身近なこととして責任をもって考えることで、批判的思考力や代替案の思考力を育てていく。さらに、各自が考えた改善策や対策について学級内で発表を行ったり、町会の方々や企業、関係団体の方々に対して提案したりすることで多様性を受け入れ、協働して課題を解決するコミュニケーション力を伸ばしていきたい。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

だれもが過ごしやすいまちをつくるための政治の働きは、すべての人が権利をもち、また様々な取り決めを守ることで政治は進められていく。これは世代内の公正という価値観に関わる。

（ＳＤＧｓへの貢献）

単元の導入として、これまでに学習してきた現代社会の特色や課題とＳＤＧｓとの関わりや自分が興味・関心のあるＳＤＧｓを考える。そして、単元の課題である「未来社会をよりよくするためのアイデア提言」の中に、ＳＤＧｓへの貢献という項目を設けることで、単元を通して各自がＳＤＧｓ貢献に向けた方策を考えることができるようにする。また、その方策を学級内や地域の方々等に向けて発表することで、各自のSDGｓへの貢献意識を高めることもできると考えている。

５．評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
①資料から、立法・行政・司法と地方自治の役割やしくみや現代社会の特色・課題を読み取ったり、未来社会を予測したりすることができる ②立法・行政・司法と地方自治の役割としくみについて理解している	①立法・行政・司法と地方自治の役割やしくみと、現代社会の特色・課題の改善策・対策をＳＤＧｓへの貢献を関連付けて考え、表現することができる	①現代社会の特色や課題を自分との関わりから捉え、よりよい社会・持続可能な社会を達成するための改善策や対策を意欲的に追究している

６．**単元展開の概要（全 20 時間）**※外部の方々への改善策・対策発表は、総合的な学習の時間で行う。

主な学習活動	学習への支援	◇評価　　・備考
単元の課題　「未来社会をよりよくするためのアイデア提言」		
①現代社会の特色とＳＤＧｓとの関わりを考える ・単元課題と学習の流れを知る ・ＳＤＧｓについて知る ・現代社会の特色や課題をＳＤＧｓとの関連から捉える ・各自が最も重要だと考える課題と関連するＳＤＧｓを考え、発表し合う	・政治学習への意欲を高めるために、政治を学ぶ意義を伝える ・ＳＤＧｓへの関心を高めるために、動画を活用する。 ・ＳＤＧｓと自分の課題意識を結び付けることができるように、事例を紹介する。	◇ウ①　現代社会の特色や課題を自分との関わりから捉えている。 （発言・話合い・ワークシート）
②政治の役割と国会・選挙の意義と課題を知る ・政治の役割と三権分立､国会の地位と仕事や選挙制度や選挙の意義を知る ・投票率の低下を資料から読み取り、その結果起こりうる課題を考える	・生徒会活動や生徒会役員選挙など身近な事例を題材にする。 ・１時に考えた課題やＳＤＧｓとの関わりについて、18 歳で主権者となることを意識してまとめる。	◇ア①　資料から、三権分立と立法機関の役割やしくみや現代社会の特色・課題を読み取ったり、未来社会を予測したりすることができる。 （発言・ワークシート）
③政党と世論の役割を知る ・政党･世論の定義や役割を知る ・各自が１時に考えた課題を基に政党をつくり、資料を根拠にした政策を考える ・模擬投票を行う	・インターネットの発達と政治の関わりについて触れ、現代社会の特色との関わりに気付くことができるようにする。	◇イ①　立法機関の役割やしくみと､現代社会の特色･課題の改善策・対策をＳＤＧｓへの貢献を関連付けて考え、表現することができる。（発言・ワークシート）
④国会のしくみと運営、国会議員の活動を知る ・国会のしくみや運営､国会議員の活動について資料から読み取り、まとめる ・各自の課題意識によって女性議員数の国別比較か議員立法の数について資料から読み取り、未来社会への改善策や対策を考える	・衆議院の優越や議員立法の内容に触れ、国民が政治の在り方に関わることの大切さに気付くことができるようにする。 ・18 歳で主権者となることを意識して改善策や対策を考える	◇ウ①　国会における課題を自分との関わりから捉え、よりよい社会・持続可能な社会を達成するための改善策や対策を意欲的に追究している。 （話合い・ワークシート） ◇ア②　立法の役割としくみについて理解している。

⑤議員内閣制のしくみと世論との関わりについて知る ・議院内閣制のしくみについて知る ・他国の大統領制などとの比較から、世論との関わりについて考える	・内閣不信任案や「首相公選制」の議論に触れることで、関心を高める	◇ア①　資料から、行政のしくみや課題を読み取ることができる。 （発言・ワークシート）
⑥内閣の仕事と役割について知り、選挙や世論の大切さを考える ・内閣のしくみと国務大臣の仕事、国のさまざまな機関について知る ・「政府に力を入れてほしいこと」の資料や「たてわり行政」の資料から行政の課題を考える	・これまでに進められた行政改革や行政の効率と公正についてふれ、選挙等によって国民自身が政治の在り方に関わることが大切だということに気付くことができるようにする	◇イ①　行政機関の役割やしくみと、現代社会の特色・課題をＳＤＧｓと関連付けて考え、表現することができる。（発言・ワークシート） ◇ア②　行政の役割としくみについて理解している。（小テスト）
⑦司法権の役割と民事裁判、行政裁判のしくみについて知る ・三権分立の資料から司法権の役割を知る ・民事裁判や行政裁判のしくみについて知る	・ＨＩＶ薬害訴訟など、過去の裁判事例を紹介し、人権保障という、司法権の役割に気付くことができるようにする。	◇ア①　資料から、司法の役割やしくみを読み取ることができる。 （発言・ワークシート）
⑧刑事裁判のしくみと裁判に関わる人々の役割を知る ・資料を読み取り、刑事裁判のしくみを知る ・裁判に関わる人々の役割を知る	・「国選弁護人」制度や憲法の条文に触れ、人権を尊重した刑事裁判が大切だということに気付くことができるようにする	◇ア①　資料から、司法のしくみを読み取ることができる。 （発言・ワークシート）
⑨裁判における人権を守るためのしくみを知り、憲法が保証する人権との関わりを考える ・三審制や再審制度について人権を守るためのしくみとして理解する ・被疑者・被告人や犯罪被害者の権利について考える	・被害者参加制度や犯罪被害者の人権侵害、裁判員制度や司法制度改革について触れ、憲法が保障する人権との関わりについて気付くことができるようにす	◇イ①　司法機関の役割やしくみと課題をＳＤＧｓと関連付けて考え、表現することができる。 （発言・ワークシート） ◇ア②　司法の役割としくみに

※この後、模擬裁判を行う（道徳２時間） ⑩地方自治のしくみや行政サービスと地方財政の現状・課題について知る ・資料を読み取り、地方自治のしくみや選挙権、被選挙権、行政サービス、地方財政の現状・課題について知る ⑪地方自治における住民の権利と参加について知る ・全国各地の住民投票や条例について知る ・直接請求のしくみについて知る ⑫⑬身近な地域の課題を予想し、改善策や対策を考えるための調査計画を立てる ・全国的に見られる地方自治の課題を知る ・ＳＤＧｓと自分が興味のある課題との関連を見付ける ・身近な地域の課題を予想し、改善策や対策を考えるための調査計画を立てる ⑭⑮⑯身近な地域の調査を行う ・計画に基づき、区報やＨＰを活用しながら、調査を実行する **調査に協力してくださった機関・人 墨田区役所広報広聴担当、総務省、行政相談員、高齢者見守り隊、両国駅、観光客（外国人・日本人）**	る ・墨田区の広報紙やＨＰを資料として用いることで、関心を高める ・墨田区や東京都の条例を紹介し、関心を高める ・住民の意識調査や墨田区に関わりのある課題を取り上げ、関心を高める ・前年度の野外調査や質問調査に触れたり、内閣府のリーサスを紹介したりすることで、主体的に調査計画を立てることができるようにする ・地域住民の方々や企業、関係機関の方々と連携し、生徒が計画したことを円滑に調査できるようにする。 ・リーサスの活用方法や区報・区ＨＰの見方等を助言する。	ついて理解している。 （小テスト） ◇ア①　資料から、地方自治の役割やしくみを読み取ることができる。 （発言・ワークシート） ◇ア①　資料から、地方自治における住民の権利と参加について読み取ることができる。 （発言・ワークシート） ◇ウ①　地域における課題を自分やＳＤＧｓとの関わりから捉えようとしている。（発言・ワークシート） ◇ア②　地方自治の役割としくみについて理解している。 （小テスト） ◇ア②　立法・行政・司法と地方自治の役割としくみについて理解している。（定期考査） ◇ウ①　身近な地域における課題を自分との関わりから捉え、よりよい社会・持続可能な社会を達成するための改善策や対策を意欲的に追究している。 （発言・調査の観察）

⑰⑱身近な地域の野外・質問調査でわかったことを基に改善策や対策をまとめる①② ・調査からわかったことと改善策や対策を個人でまとめた後、グループで話合い、グループとしての改善策や対策を原稿とプレゼンテーションにまとめる。	・内閣府のリーサス等、資料を根拠に解決策や対策を提言することができるよう、助言を行う。	◇ウ①　地方自治の役割やしくみと、地域の特色・課題の改善策・対策をSDGｓへの貢献を関連付けて考え、表現することができる。 （発言・話合い）
⑲未来社会をよりよくするための墨田区へのアイデア提言。（学級内発表） ・グループごとにまとめた提言を発表し合い、相互評価を行う。 ※この後、外部の方々への改善策・対策提案（総合２時間）	・評価規準を示し、自己評価や相互評価が適切に行えるようにする。	◇ウ①　地方自治の役割やしくみと、地域の特色・課題の改善策・対策をSDGｓへの貢献を関連付けて考え、表現することができる。（発表・ワークシート）

学級内発表で出た墨田区の課題等

①自然環境②子育て環境③防災④路上駐輪⑤路上生活者

⑥活性化⑦観光客の増加による生活への影響

学年発表班の課題と改善策（一部）

①北部の商店街に来る人が少ない→飲食スペースを設けるなどし、観光客を呼び込むことで商店街を活性化する（SDGs 8）

②路上駐輪が多い→子どもの描いた絵を地面に掲示したり、植木鉢を置いたりして駐輪を防ぐことで、高齢者を中心とした住民や観光客のために行う（SDGs 11）

発表に参加してくださった方々

墨田区役所広報広聴担当、総務省、行政相談員、すみほり隊

⑳未来社会をよりよくすためのアイデア提言を通して学んだことをまとめる。 ・これまでの学習を振り返る ・各グループの発表を基に、改めて自分が考える課題と改善策や課題についてまとめる。	・これまでに学習した政治の役割や意義とＳＤＧｓへの貢献とを関連付けてまとめることができるようにする	◇ウ-①政治の役割やしくみと、地域の特色・課題の改善策・対策をSDGｓへの貢献を関連付けて考え、表現することができる（ワークシート）

７．参考資料

12 時以降の感想シート（生徒が毎時間記入し、目標の確認や振り返りを行うもの）

［３章］私たちの暮らしと民主政治（P74～116）★P115～116「まちづくりのアイデアを提言しよう」

感想シート 7 ３年（　）組（　）番　氏名（　　）

単元課題グローバルに考え（SDGs）、ローカルで活動する（地方自治）。

１　授業ごとの評価

月日	**授業の目標：課題発見・調査計画「SDGs と地域の課題」**SDGs と自分が興味のある課題との関連を見つける			
①	**自己評価**			**一言**
／（　）	授業内容に関心をもった（　）	授業内容を理解した（　）	積極的に参加した発言等（　）	
月日	**授業の目標：調査計画①「地域の課題解決」**班ごとに調査計画書を作成し、相互評価を行う			
②	**自己評価**			**一言**
／（　）	授業内容に関心をもった（　）	授業内容を理解した（　）	積極的に参加した発言等（　）	
月日	**授業の目標：課題追究①「区報・HP 等から」**課題の実態を資料から読み取る※順不同			
③	**自己評価**			**一言**
／（　）	授業内容に関心をもった（　）	授業内容を理解した（　）	積極的に参加した発言等（　）	
月日	**授業の目標：課題追究②「リーサスから」**課題の実態を資料から読み取る※順不同			
④	**自己評価**			**一言**
／（　）	授業内容に関心をもった（　）	授業内容を理解した（　）	積極的に参加した発言等（　）	
月日	**授業の目標：課題追究③「調査から」**課題の実態を資料から読み取る※順不同			
⑤	**自己評価**			**一言**
／（　）	授業内容に関心をもった（　）	授業内容を理解した（　）	積極的に参加した発言等（　）	
月日	**授業の目標：調査結果まとめ「解決策の提案」**調査結果をまとめ、解決策の提案を行う			
⑥	**自己評価**			**一言**
／（　）	授業内容に関心をもった（　）	授業内容を理解した（　）	積極的に参加した発言等（　）	
月日	**授業の目標：調査結果発表「解決策の提案②」**解決策の提案を行い、相互評価をする			
⑦	**自己評価**			**一言**
／（　）	授業内容に関心をもった（　）	授業内容を理解した（　）	積極的に参加した発言等（　）	

③④⑤は、ICT 機器の状況によって順番が前後します。

⑦時間目終了後、各学級代表班による学年発表を行います。

２　単元のふり返り　～世界の課題について考えたこと・自分の身近な地域でできること～

単元課題 グローバルに考え（SDGs）、ローカルで活動する（地方自治）。	評価
1 2 3 4 5　B 6 7 8　A 9 10	行数 ＿＿＿ 内容 ＿＿＿

［評価のポイント］関心・意欲

A:授業内容を踏まえた具体的な感想と自分との関わりを書き、追究課題を考えている。

B:授業内容を踏まえた感想のみ書いている。C:感想のみ書いている。

※欠席した場合は、授業内容を聞いた考えや感想を記入する。

［自己評価の目安］

A：大変そう思う　B:そう思う　C:あまりそうは思わない　D:全くそうは思わない

［評価のポイント］

A:授業内容を踏まえた感想と追究課題を考え、書いている。B:授業内容を踏まえた感想のみ書いている。

C:感想のみ書いている。　※欠席した場合は、授業内容を聞いた考えや感想を記入する。

［自己評価の目安］

A：大変そう思う　B:そう思う　C:あまりそうは思わない　D:全くそうは思わない

中学校第１～３学年　人権・道徳　学習指導案

吹田市立第三中学校
教諭　天野 結

１．単元名

「すべての人が笑顔で過ごせる社会へ
～ セクシャルマイノリティの人たちについて考える ～」

２．単元の目標

・メディアや日常会話を題材に、世の中の性別による固定的なイメージを見直し、多様な性が存在することを理解することができる。（知識・技能）

・セクシャルマイノリティの人たちが社会で困っていることは何かを多面的に考え、全ての人が笑顔で過ごせる社会にするためにどのようにしていけばよいのかを考えることができる。（思考・判断・表現）

・班の仲間、クラスの仲間との話し合いに参加している。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（教材観）

メディア(CM や広告)や日常会話を題材に、世の中(日本)の性別による固定的なイメージについて考え、自己の性別に対する価値観を振り返る。そして、自分の言動を見直し、知らず知らずのうちに性的指向や性自認にかかわる暴力(言葉も含む)や差別をしていないのかを振り返る。また、セクシャルマイノリティの芸能人を題材に、性を考える４つのものさしを使用し、「男」、「女」という性別以外にも多様な性が存在していることを知る。そこから、セクシャルマイノリティの人たちにとってのバリアを考えることを通して、すべての人の人権が保障されなければならないことに気付き、互いの人権を尊重するためにどのように周囲と連携して社会を変えていけばよいのかを考える単元としたい。

（生徒観）

近年、情報化社会が進み、インターネットやテレビ、新聞などのメディアを目にしない日はないといっても過言ではない。その中でも、セクシャルマイノリティに関するメディアがここ最近急激に増えてきており、子どもたちは何気なくそれを目にし、学校生活の中でも話題に挙げている。特にドラマでは、セクシャルマジョリティの芸能人が配役されており、セクシャルマイノリティを現実的に捉えていない場合も少なくはない。

法務省の「主な人権課題」に、「性的指向」「性同一性障害」が明記されている。平成 27（2015）年に文部科学省が「性同一性障害等に係るきめ細やかな対応の実施等について」と題する通知を発行し学校での具体的な取り組みが要請された。自分のセクシュアリティ(性のあり方)を自覚するのは、小学生から高校生までの学齢期が多いとされており、自殺念慮を抱いたことがある性同一性障害の人は約 60%で、特に自殺念慮を持つ年齢の第一のピークは思春期である中学生の頃とされている。また、周囲の無理解等から「いじめや暴力を受けた経験」があるセクシュアルマイノリティは 68%にのぼり、「教職員の理解」のみならず、身近な同級生らの理解も不可欠といえる。

（指導観）

本単元では、メディア(CM や広告)や日常会話を題材に、世の中(日本)の性別による固定的なイメージについて考えさせ、自己の性別に対する価値観を振り返させる。また、セクシャルマイノリティの芸能人を題材に、多様な性が存在していることに気付かせ、班の仲間やクラスの仲間とセクシャルマイノリティの人たちにとってのバリアを考えさせる。そして、どのように社会を変えていけば、すべての人が笑顔で過ごせる社会になるのかを考えさせる。

４．ＥＳＤについて

（ＥＳＤの視点）

多くの生徒は性別について、「男」「女」という認識しかもたないが、多様な性があることに気づかせ、全ての人が公平に人権を保障されているかという視点で社会を見る目を養いたい。我々が「男」「女」という固定的な性しか認識していないということは、それ以外の多様な性をもつ人々に対して知らず知らずのうちに差別や構造的な暴力を与えている可能性に気づかせ、この問題を解決するためには、正しく性について知り、連携して解決に取り組む必要性があることに気づかせたい。

（ＥＳＤで育みたい資質・能力）

自身の性別に対する見方は、多くの場合固定的であり、新たな性別の認識を得るためには自身の見方に対してクリティカルに考えていく必要がある。また、性別に対する見方の固定化という問題を解決するためには、上述の通り連携して解決に取り組むことが必要であり、本単元においても、コミュニケーション力の育成を目指し、すべての人の人権が尊重されるためにはどのように社会を変えていけばよいのかを協働的に話し合わせていく。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

本単元では、身の回りにある様々な事例を通して「男」「女」という性別がいかに固定化されているかを実感させていき、ジェンダーハラスメントという現代社会の課題に向き合わせていく。この学習を通して、セクシャルマイノリティの人々を含めた全ての人権を尊重するという価値観に気づかせる。

（ＳＤＧｓへの貢献）

本単元は、ゴール５「ジェンダー平等を実現しよう」に関わる実践である。持続可能な開発目標(SDGs)で、ジェンダー平等の達成は掲げられているが、セクシャルマイノリティには直接的な言及がない。国連人権理事会は性的指向や性自認にかかわる暴力や差別からの保護を決議している一方、世界には、同性婚が合法の国から、同性間の性行為に死刑などの重罰を科している国まであり、SDGs 策定のための国連交渉では、セクシャルマイノリティの人々の権利を共通目標に含むことはできなかった。しかし、互いの人権を尊重し、誰もが住みよい社会を築いていくためにはセクシャルマイノリティに関する教育は必要であると考える。

５．評価規準

ア知識・技能	イ思考・判断・表現	ウ主体的に学習に取り組む態度
①メディアや日常会話を題材に、世の中の性別による固定的なイメージを見直すことができたか。 ②芸能人を例に、多様な性が存在することを理解することができたか。	①セクシャルマイノリティの人たちが社会で困っていることは何かを多面的に考えることができたか。 ②すべての人が笑顔で過ごせる社会にするためにどのようにしていけばよいのかを考えることができたか。	①班の仲間、クラスの仲間との話し合いに参加しているか。

６．単元の学習計画（全３時間）

	主な学習活動と内容	指導上の留意点	◇評価
1	○性別についての固定的なイメージに気づく ・画像資料を見て、感想を言う。 【写真１】 ・昔のランドセルの写真と、今のランドセルのカタログを見て、昔と今との違いを知る。 ・メディアの中に男女の偏りがないか考える。 【ワークシート1】 ○メディアから受ける性別のイメージについて話し合う。 ・昔と今のCMを観て、どのように変わったのか話し合う。 ・なぜこのような性別による固定的なイメージがついたのか考え、クラスで発表する。 【ワークシート２】 ・昔と今のCMを観て、どのように変わったのか話し合う。 ・なぜこのような性別による固定	・【写真１】のように身の回りにある様々な「性別をイメージさせる表示」を見せ、「男は青」「女は赤」という固定的なイメージがあることを気付かせる。 ・その他の写真の例…浴場の暖簾の色等 ・【参考資料】を読んだり、ランドセルについてのコラムを聞かせ、男女関係なくランドセルの好きな色を選びやすくなったことを伝える。 ・普段何気なくみているメディアの中に性別による固定的なイメージがあることを気付かせる。 ・栄養ドリンク、シチュー、家電製品等のCMをみせ、時代の流れに合わせてメディアも変化していることに気付かせる。 ・なぜこのような性別による固定的なイメージができたか考えさせ、クラスで発表させる。 ◇Key Pointを伝える。 『メディアから受ける男女のイメージに自分は染まっていたのか』	◇世の中の性別による固定的なイメージを見直すことができたか。（ア①）

	的なイメージがついたのか考え、クラスで発表する。 【ワークシート２】		
2	○日常生活の中にある性差意識について考える。 ・男らしい、女らしい、男のくせに、女のくせに等の言葉を言われた経験や聞いた経験を出し合う。 ・ジェンダーハラスメントとは何かを考える。 ・芸能人を例に性を考える４つのものさしをつかい、多様な性があることを理解する。 【ワークシート★】	・日常会話の中に、「男、女」という潜在的性差意識があることに気付かせる。 ・ジェンダーハラスメントとは何かを紹介する。 ・ワークシートを配付する。 ・性を考える４つのものさしを紹介し、多様な性があることを気付かせる。 ・Key Point を伝える。 『日常会話から受ける男女のイメージに自分は染まっていたのか』 『性を考える４つのものさしをつかってみて』	◇世の中の性別による固定的なイメージを見直すことができたか。（ア①） ◇多様な性が存在することを理解することができたか。（ア②）
3	○全ての人が過ごしやすい社会をつくる方法を考えよう。 ・セクシャルマイノリティの人たちが社会で困っていることは何かを考える。 【ワークシート１】 ・どのように変えれば過ごしやすい社会になるか考える。 【ワークシート２】 ④【差別用語】【文科省資料】【セクシャルマイノリティについての人権運動】について聞く。	◇セクシャリティに関わらず、過ごしやすい社会になるよう考えさせる。 ◇クラスの中にもセクシャルマイノリティの生徒がおり、【差別用語】【文科省資料】【セクシャルマイノリティについての人権運動】について紹介し、その生徒を手助けする。 ◇Key Point を伝える。 『セクシャルマイノリティの人たちが困っていることを考えてみて』 『差別用語、文科省資料、セクシャルマイノリティについての人権運動を知って』	◇セクシャルマイノリティの人たちが社会で困っていることは何かを多面的に考えることができたか。（イ①） ◇班の仲間、クラスの仲間との話し合いに参加しているか。（ウ①）

中学校　課外活動におけるチャリティー活動案

麗澤中学・高等学校
教諭　重松雅治

１．活動名　「チャリティー」

２．活動の目標

学習目標に即して記述する。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	繋がる力、繋げる力
どのような人がどのような支援を必要としているのか、そしてそのためにどのような支援の形があるのか、どのような団体や企業があるのかを理解する。	実施するチャリティー活動をわかりやすくポスターやリーフレットにまとめる。 どのようにして活動が継続的・効果的に実施的できるかを仲間とともに考え、実行し、反省から次の行動へ活かす。	ロジャー・ハート著「子どもの参画」に示される「参画のはしご※」では、子どもが何かの活動に参画する様子を８つに分けたが、その最上段「子どもが主体的に取りかかり、大人と一緒に決定する」にたどり着く。	活動を国内外の他の団体と連携して実施し、発信していく。

３．活動について

（教材観）

チャリティーとは、「慈善。慈善の心や行為。特に、社会的な救済活動」のことを指す。近年では、チャリティーコンサートや、チャリティーバザー、チャリティーランなど、別のイベントと共催することで楽しく参加できるチャリティーが増えている。体験型問題解決学習であり、かつ実際的な影響を社会に与える活動である。

中高生は皆、無意識に「支援」というものを知っている。つまり「支援する人」と「支援される人」がいることを知っている。多くの生徒は小学生の時に赤い羽根募金などを通じて「お金を寄付する」ことを経験している。ただし、そのような支援を自分ごととして捉え、積極的に支援に関わろうとする人は少ない。「偽善」という言葉が示すように、人によってはそのような活動を消極的に捉える人もいるし、募金で集めたお金が実は募金されていなかった、というニュースが世間を賑わしたように、マイナスのイメージを持っている人もいる。支援そのものは現在でも多く見られるが、それによって劇的に世界の課題が解決されることは少なく、生徒たちにとっても自分事にはなりにくい。

生徒たちにとっての自分ごとは「受験」であり「大学選び」であり「就職」である。悟り世代、という言葉があるように、彼等には大きな欲がなく、安定した暮らしを望んでいると言われることもある。しかし、彼らを待ち受ける未来には、マイケル・A・オズボーン准教授が提唱するように今ある仕事の多数がなくなり、今はない新しい仕事が生まれると言われている。そして、そのために学校が育むべき力

は、知識や試験で高得点を取ることではなく、人と良いコミュニケーションを取ることだったり、人を思いやる心だったり、様々なことに興味や関心を持つ好奇心だと言われている。そしてそれらを育む活動として、アクティブラーニングやプロジェクト型学習などが提唱されている。

チャリティー活動は、現存する問題の解決を目指し活動する点、その解決を目指す中で、小さなことから取り組むことができかつ、大きなインパクトにもつながる点、解決のためには継続的な活動が必要である点などから、その社会起業的な側面が持続可能な発展のための教育を体現する活動としてふさわしいと考える。また中高生の発達段階を考えた時、自分の行う行動によって他者に影響を与える活動は、彼らの自尊心の向上を促し、自分の生き方に自信と責任のある若者の輩出に貢献できると考える。

本校で取り組むチャリティー活動は以下の通りで、今後も生徒の活動状況や生徒からの意見を基に増減する予定である。

古本回収	株式会社 Value Books の Books for Japan 古本を送ると、その売価相当額と 1 冊につき 10 円を寄付することができる仕組み。古本という一旦価値を失ったものに、再び価値を見出すことができる。さらに処分の対象となりやすいものを寄付できるとあり、家庭の負担感が低い。
食品回収	認定 NPO 法人セカンドハーベストジャパンのフードドライブ 市場に回らないがまだ食べられるものや、一般家庭に眠る賞味期限を待つ食品を集めそれを必要としている人に届ける仕組みで、本校では賞味期限が 1 か月以上あり、かつ家庭で消費しないかもしれないものを回収。
衣料品回収	株式会社ユニクロの「服のチカラ」プロジェクト UNHCR(国連難民高等弁務官)との連携により、使用しなくなった子ども服を回収し、それを世界中の難民の子どもたちに送るもの。
レモネードスタンド	がん研究支援として、アメリカのアレックスという小児ガンの少女が自らもガンに侵されながら、小児ガン研究のために自宅でレモネードスタンドを開き売上 2000 ドルを全て寄付した実話がアメリカ全土だけでなく世界にも広まったもの。寄付につき 1 杯のレモネードを配布。
フェアトレード	フェアトレードコーヒーの販売により、購入して下さる方と共に、市場に出回るコーヒーの販売ルートや適正価格について考える。またその売上は、他のチャリティーも含めた活動資金となる。

（生徒観）

本校は私立の中高一貫校であり、生徒たちの居住地は様々であるが、中学受験という特殊性を経験しており、またそのために小学４年生頃から大半の生徒が塾に通い、他の生徒が遊んだり自分の好きな活動をしたりしている中で勉強をしていたという面がある。勉強に向かわせるため、お金やものを与える保護者も多い。経済的に裕福な家庭が多く、そのため生徒の使えるお金も多い。文房具やノート、辞書など学校で使用する道具を失くしたりどこかに置き忘れたりする生徒が多く、またそれをあまり気にしない傾向がある。一方で、誰かに自分のものを分け与えたりすることには消極的である。

（指導観）

この活動は、まずチャリティーに参加することから始まる。参加してもらう人を増やすためにポスターを描いたり、声をかけたりして行動することで、自身の内面にどのような変化があったのかをふり返らせ、チャリティーの意義や問題の解決方法について考えていく。

活動の成果や意味について対話を通して振り返ることで、より効果的な活動をしていくためには、どのような取り組みが求められるかを考え合っていく。体験を通した対話は、それぞれの多様な見方を共有し、新しい見方を得ることに効果があると考えている。さらに自分たちの活動をより広く実施し、久賀的なものにするために発信する方法を検討していく。

４．ＥＳＤについて

（ＥＳＤの見方・考え方）

支援を必要としている人について考える時、その背景には歴史的・経済的な要因が複雑に絡み合っていること、つまり相互性について学ぶことができる。また自分たちもその責任の一端を担っていることもあり、社会が以下にお互いに相互的であるかを実感することが出来る。また、支援をする場合、私たち１校の活動には限界があり、支援の輪を広げていくためには、周辺の学校に協力してもらうことも必要である。さらに、企業やNGO・NPOなどとの連携により活動の幅は大きく広がる。このことは課題解決の方法の一つとして連携性の重要性に気づくことにつながる。

（ＥＳＤで育みたい資質・能力）

チャリティー活動自体が問題解決のための１つの手段であることから、協働的問題解決能力の育成につながる。問題をよく理解し、どのような方法でチャリティー活動を展開するのがいいかを仲間と検討していく。実施後にはその反省を行い、活動を評価し、次回に向けてその改善策を考える。活動が継続的であるためには複数の意思のある仲間とのチームをつくり活動していく必要がある。また、価値がないと思われている古本・不要な衣料品などに再び価値を与える回収活動を通じて、物事の多面的な側面を見つめ直すとともに、フェアトレードコーヒーやフードバンクなど、社会構造が原因に寄与している問題に対する新しいアプローチを学び、１つのことをもっと大きな物事の一部として捉えることができるようになる。これはシステムズシンキングの育成につながる。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

支援が必要な人について知ること、そしてそのために行動することは、世代内の公正に関わる活動である。支援が他人事になっているうちは、その活動に意味を見出すことはできないが、自分たちにもできることがあるという有用感をもち、また支援が必要になっている切実な状況を知ることで問題は自分事になっていくと考えている。

（ＳＤＧｓへの貢献）

現在の活動で貢献できるSDGsの目標は１．貧困、２．飢餓、３．健康と福祉、８.経済成長、10．不平等、12．生産と消費、17．パートナーシップの６つである。活動内容によって選出したものもあるが、特に10、17については、チャリティー活動そのものの意義と深くかかわるゴールである。

５．評価規準

ア知識・技能	イ思考・判断・表現	ウ主体的に学習に取り組む態度
◆ 支援の必要性 ① 世界には支援が必要な人がいることを理解している。 ② どのような支援の形があるか理解している。 ◆ チャリティーを受ける側	◆ ポスター等による表現 ① 支援して下さる方にわかりやすいポスターを作成する。 ◆ 文章による表現 ② 学んだことや考えこと、活	① チャリティー活動に参加する。 ② 活動の反省をし、改善点を示す。 ③ 進んで代表やリーダーに手を挙げられる。

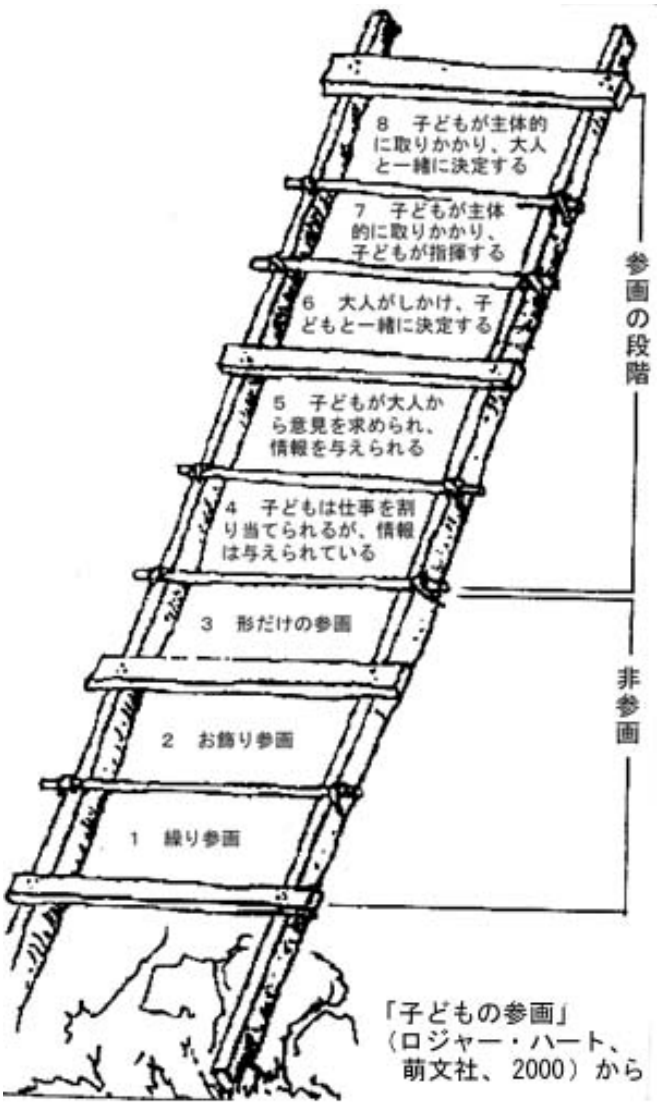
③ 支援が必要な人々について偏見なく理解できる。 ④ 支援が必要になった背景について複合的な理由から考えることができる。 ◆ チャリティーをする側 ⑤ チャリティーに参加している学校・NGO・NPO・企業などがどのような組織か理解できる。	動したことを文章にまとめることができる。（日英） ◆ プレゼンテーションによる表現 ③ 学んだことや考えたこと、活動したことを、仲間とチームでパワーポイントなどを利用したプレゼンテーションにまとめ発表できる。（日英）	④ 自分たちから先生やその他の大人に向けた提案ができる。 ⑤ 活動継続に向けた組織化に積極的に貢献できる。
エ繋がる力・繋げる力		
①他校・他団体・海外に自分たちの活動を発信する。 ②他校・他団体・海外と一緒にチャリティー活動を実施する。		

６．チャリティー活動の展開例

主な学習活動	学習への支援・評価	◇評価 ・資料など
課題：動機はどうあれ、人のために何かすることが自分の内面の変容をもたらすことを知る		
様々なチャリティーを体験してみる	・ ニュースになっている問題など、生徒にとって身近な話題をチャリティーのテーマに設定する。	◇ウ① ・ニュース ・HP ・Facebook
・ 必要なポスターなどを作成する	・ 支援して下さる方にわかりやすいポスターやチラシを作る。 ・ 指示を待つのではなく、何が必要かを考えながらうごくよう、指示を最小限にとどめる。	◇イ① ◇ウ③④
・ 解決したい問題について考える	・ 解決すべき問題の原因を考え、そのために実施するチャリティーの有効性を知る。	◇ア④⑤
課題：問題解決に向けた継続的な支援のために必要な「組織化」には何が必要か考える。		
振り返り・評価 ・ 自分たちの活動の結果を確認する	・ 自分たちがやっていることにどんな意味があるのかを改めて振り返り、支援について考える機会にする。	◇ア①② ・支援のデータ
・ 活動前後で変化があったか考える	・ “Did we make a difference?”という問いを立て、前後の変化（ソフト面・ハード面）を見る。	◇ウ②
・ 改善点を洗い出す	・ 上記の振り返りが見えない場合にどうすれば評価できる活動となるかを考える。	◇ウ⑤

・問題についての深い調査活動や次回活動への調査活動	・問題について多角的な視点でとらえる。 ・他のチャリティー活動について調査する。	◇ア③④ ・HP、パンフレット等
課題　活動実績をさらに見える化し認知してもらうことで活動の幅を広げる。		
報告活動（支援者、HP、外部など）	・わかりやすく活動をまとめ、活動前後の変化についても触れさせる。	◇イ②③エ① ・HP
講演会の開催 ・該当領域の専門家や団体企業の方をお招きし、講演会を実施	・自分たちで連絡をとる。企画書を作成する。 ・教員側で事前に連絡をするか、連絡をとる練習をさせるなど、相手に迷惑がかからないようにする。	◇ウ③④
他校・他団体・海外と連携したチャリティー活動	・自分たちの取り組んだノウハウなどを共有し、他の人たちと一緒に活動することでチャリティーの渦を巻き起こす。	◇エ②

（資料１）



「子どもの参画」（ロジャー・ハート、萌文社、2000）から

上の段に行けば行くほど子どもの主体的な参加の程度が大きくなる。また下の３つについては「非参画」とし、大人が子どもの参画を促す際に気をつけるべきこととして注意を促している。

高等学校第１学年　国語科　学習指導案（国語総合）

宮城県富谷高等学校
教諭　小林　愛香

１．単元名

「文章の叙述に即して的確に評論を読み，自らのものの見方，感じ方，考え方を豊かにしよう。」

２．単元の目標

・語句の意味・用法を的確に理解している。（知識・理解）
・文章の内容を叙述に即して的確に読み取っている。〔指導事項（１）のイ〕（読む能力）
・文章の内容を叙述に即して的確に読み取ろうとしている。（関心・意欲・態度）

３．言語活動と学習材

言語活動：読む，説明し合う
学習材：評論　岩井克人「広告の形而上学」（東京書籍『国語総合（現代文編）』）

４．単元について

（教材観）

本教材で筆者は，広告という身近なものの役割について読者に問いかけ，本来は商品そのものの価値を見定めるべき消費者が，広告という媒介をとおしての価値しか見えていないという現状に言及している。主張そのものは，生徒たちにとって身近な事柄であるが，文章中では比喩的でかつ抽象的な表現が多く用いられている。論理構造を読み取るだけではなく，本文に書かれた具体例や文脈を丁寧にたどりながら，筆者の主張を具体化して読むことが求められる。また，筆者の主張は，日常生活の中で目にする広告について結びついている指摘がなされており，それについて考えることで，生徒自身のものの見方や考え方を深め，批判的思考力を高めることもねらいとしたい。

（生徒観）

生徒たちは，これまでに二つの評論を教材とし「読むこと」について学習している。「水の東西」では，評論の基本構造や二項対立を見つけて読解することを，「〈顔〉という現象」では，本文中から同一表現を見つけ，文脈から文章を構造的に読解することを学んだ。今回の学習では叙述に即して読解することを学習する。生徒は，これまでの学習で論理構造に従って読むことに慣れてきたものの，評論特有の表現や筆者が意図的に用いた表現について本文中での意味を読解し，理解した内容を的確に説明する力が弱い。今回の学習材では，抽象的な表現に慣れさせながら，比喩的でかつ抽象的な表現について的確に読解し，理解させ，それを具体的に説明する力を身につけさせることを目標とする。毎時間の授業後の振り返りシートでは，「説明し合うことで自分も考えを深められた」，「友達の説明を手がかりにして提示された問いが解けるようになった」という感想が多く，協働して問いを解決していくことに対する達成感も得られている。

（指導観）

今回の指導においては，指導事項（１）「文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり，必要に応じて要約や叙述をすること」について指導する。まずは，本文の構成を確認して概略を把握させた後，本文の語句の意味について理解を深める。評論を読む上で大切な言葉が多く出てくるため，評論における

語句の使われ方について理解を促したい。その上で，読解の核となる問いをいくつか設定して提示し，生徒が本文の叙述に即して考えられるように，論理構造をたどって丁寧に読解させていく。特に指導において大切にしているのは，単元をとおして全員で分かることである。そのために適宜「説明し合う」活動を取り入れている。この活動によって，主体的で対話的な深い学びを実現する一つの手立てとしている。

５．ＥＳＤについて

（ＥＳＤの視点）

学習活動において期待しているのは，互いに理解し合えるよう説明をしたり，生徒自身が分からないところを分かるまで聞いたりして教え合うという，相互に理解を深めていく対話の機会の構築と，生徒の主体性の涵養である。学習活動の中で，生徒が問いに向き合ったとき，二つの学習活動が生まれる。一つは，読み取った内容を本文に即して組み立て直し，解答として記述していく活動をとおして，読解力を養うこと。もう一つは先に理解することができた生徒が周囲を見渡し，まだ理解できていない生徒に説明をする（教えに行く）ということである。後述の活動は，自分と他者が同じ問いに対して解決を目指し，時間を共有して話し合うという機会を生み出すこととなる。この活動は，持続可能な社会づくりの構成概念（Ⅰ～Ⅵ）における「人・集団の意思や行動（規範概念）」の三つの概念「公平性（Ⅳ）」「連携性（Ⅴ）」「責任性（Ⅵ）」（国立教育研究政策所 同上）を育むことに関連する。これらは，ＥＳＤ教育の目指す「持続可能な社会づくりに関わる課題を見いだし，それらを解決するために必要な能力や態度を身に付ける」（国立教育研究政策所 同上）ことの基盤となるものである。

（ＥＳＤで育みたい資質・能力）

本実践で行っている，先に理解することができた生徒が，まだ理解できていない生徒に説明をする（教えに行く）という活動は，一つの問いに向き合い，解決を目指す協働的な学びである。この活動は，ＥＳＤ教育の視点に立った学習指導で伸ばしていくべき能力の「①批判的に考える力」，「③多面的，総合的に考える力」，「④コミュニケーションを行う力」，「⑤他者と協力する態度」，「⑥つながりを尊重する態度」，「⑦進んで参加する態度」（国立教育研究政策所 教育課程研究センター「ＥＳＤの学習指導過程を構想し展開するために必要な枠組み」による）をはぐくみ，伸ばしていくことが可能であると考える。国語科として，単元をとおして「読む能力」を身に付けさせることはもちろんであるが，それと同時並行的に生徒相互のパートナーシップを高め，他者と連携しながら問題解決を図る能力を養うことで，ＥＳＤの視点を学習活動に取り入れた教育を行っていくことが可能であると考える。

（ＥＳＤで育てたい価値観、ＳＤＧｓへの貢献）

本実践は，直接的に地球的課題に向き合うものではないが，国語科において育成が求められる能力の向上をとおして，協働的に学ぶこと，そして長期的にはＳＤＧｓゴール１７「パートナーシップで目標を達成しよう」に関わる力を育成することをねらいとしている。そのために，課題に対して向き合い，互いの考えを尊重しながらも，クリティカルに物事を捉え，よりよい解決策を主体的に見いだしていく態度を育てていくことが求められる。

６．単元の評価規準

ア知識・理解	イ読む能力	ウ関心・意欲・態度
・文や文章の組立て，語句の意味，用法および表記の仕方などを理解し，語彙を豊かにしている。	・語句や表現に注意して文脈を捉え，書き手の考えなどを，間違いなく過不足なく読み取っている。	・語句や表現に注意して文脈を捉え，書き手の考えなどを，間違いなく過不足なく読み取ろうとしている。 ・文章を読み，自分のものの見方，感じ方，考え方を広げたり深めたりしようとしている。

学習活動における具体の評価規準

ア知識・理解	イ読む能力	ウ関心・意欲・態度
①評論特有の表現を踏まえ，語句の意味を理解し，語彙を豊かにしている。	①筆者が指摘する問題点および抽象的表現の本文中での意味を的確に理解し，読み取っている。	①筆者が指摘する問題点及び抽象的表現の本文中での意味を的確に理解しようとしている。 ②本文に提示された問題を自らの問題として考えようとしている。

７．単元の指導と評価の計画（全７時間）

学習内容	学習活動における 主な具体の評価規準	評価方法
①本文の概要を把握する。	それぞれの指示語の内容や接続語の役割について，的確に捉え，本文の読解に役立てている。	発表の観察 記述の点検 （知識・理解）
②第一段落～第三段落の語句の意味を文脈に即して読解する。	①評論特有の語彙について，語句そのものの意味から文脈の中でどのような意味合いで用いられているかを理解している。 ②具体例をもとに本文の内容に理解し，分かりやすく説明している。	ワークシートの点検 話し合いの様子の観察 （読む能力） （知識・理解）
③第一段落～第三段落の本文の内容を読解する。	①叙述に即して筆者の主張を的確に読み取っている。 ②抽象的な表現（「過剰な差異」）について理解している。	ノートの点検 話し合いの様子の観察 （読む能力）
④第四段落と第五段落の語句の意味を文脈に即して読解する。	①評論特有の語彙について，語句そのものの意味から文脈の中でどのような意味合いで用いられているかを理解している。 ②本文を叙述された具体例と関連させて，理解している。	ワークシートの点検 話し合いの様子の観察 （読む能力） （知識・理解）

⑤第四段落と第五段落の内容を読解する。	①叙述に即して筆者の主張を的確に読み取っている。 ②抽象的な表現（広告のもつ「差異」）について理解する。 ③「逆説」とはどういうことか理解して叙述内容を論理的に捉え，筆者の考えを理解している。	ノートの点検 話し合いの様子の観察 （読む能力）
⑥第五段落の内容を読解する。	①叙述に即して筆者の主張を的確に読み取っている。 ②筆者の主張を踏まえ，身近な問題と関連させながら考えを深めている。	発表の観察 ノートの確認・分析 （読む能力） （関心・意欲・態度）
⑦本文と関連する文章を読み，社会に対するものの見方，感じ方を豊かにし自分の考えを持つ。	関連する複数の文章を読み，日常との関連を見出し，ものの見方，感じ方を豊かにし，自分の考えを深めている。	記述の分析 （関心・意欲・態度）

高等学校第３学年　特別活動　指導案

山梨県立甲府工業高等学校
教諭　諏訪　めぐみ

１．単元名「防災教育」

２．単元の目標

・シミュレーションを通して災害時に起こりうる状況や起こりうる課題を知り、被災時に利用可能な代替品について理解する。（知識・技能）

・災害時に状況に即してとるべき行動を判断し、課題への対処方法を協働的に考える。（思考・判断・表現）

・災害シミュレーションゲームを通して自身の役割に気づき、避難訓練や災害時代用品制作作業に仲間と協力して取り組む。（主体的に学習に取り組む態度）

３．単元について

（教材観）

我が国は災害大国と言われるように、地震や水害など様々な災害に遭い、それを乗り越えてきた。これからの社会を担う生徒たちにとっては、災害時にどのような行動をすべきか、何が起きるのかを想定する学習は、いつ起こるとも限らない災害に対処する力として必要不可欠である。また、老人や小さな子供も被災することが想定されている中で、高校生は体力もあり、大人たちとともに災害時に多くの人の頼りとなりうる存在である。多くの学校では避難訓練を実施し、「逃げる」ことを災害時の対処方法として身に付けるよう指導することが多いが、本校生徒のように工業科学生としての知識と能力を生かして、避難後の生活に貢献する術を学習することは、多くの人の助けとなる可能性があり、生徒たちにとっても自己有用感を高めることができると考えている。さらに、災害時シミュレーションを通して、避難後の様子を理解させ、具体的な行動を考えさせる必要性があると考えた。

（生徒観）

本校は、工業高等学校として、多くの技術者を輩出している。卒業生の多くは学んだことを生かして就職することが多い。実践を行った学年は男子 237 名、女子 22 名とほとんどが男子で、明朗活発な学年である。防災についての学習については、多くの学校と同じように高校１，２年では防災避難訓練のみ経験しており、避難後を想定した学習や取り組みは行われていない。

（指導観）

まず避難訓練の時に、東日本大震災のときにどのような被害が起きたのかを学習する。ここでは、避難する方法を考えるにとどまらず、家族と出会う、避難後の生活を考えるなど避難後にどのような行動が求められるのかを考えさせたい。シミュレーションでは一層混乱している状況を想定し、課題解決に取り組ませる。多くの情報が飛び交っている中で正しい情報のやり取りを行い、人と協力しながら状況に即した判断をすることができる力を育むことを狙いとしている。

これらのことを踏まえて、振るライト、ペットボトルピザの制作を行う。ここでは、災害時に協力して取り組む必要性や、リサイクル品・身近なものを代替品として使うなど物が不足する中でどのよ

うに工夫をすればよいかを考えさせたい。

４．ＥＳＤとの関連

（ＥＳＤの視点）

協力して課題に向き合うこと、災害時に自分たちの学びを活かし避難後の生活に貢献する役割を見出すという点で【Ⅵ責任性】に関わる。またシミュレーションを通して、情報を適切に扱い、協力して災害に向き合うことは、【Ⅴ連携性】が学習者に求められる教材であると考える。

（育みたいＥＳＤの資質・能力）

シミュレーションを通して、自分が持っている情報を伝え、相手の持っている情報を聞き取ることが求められる。これは災害時にも重要な力であり、【コミュニケーション力】の育成につながる。またこうした情報はチームで収集・精査し、協力して被害に対応することでより役立つものであると考えられる。本実践においても協力して課題を解決していくことが防災グッズの政策やシミュレーションの活動の中で求められ、こうした活動を通して【協働的問題解決力】の育成につながる。

（ＥＳＤで育てたい価値観）

災害時に求められるものや情報を想定することは、被災者の立場に立って考えるということである。これは非常時においても互いの人権・文化を尊重することを重視している。

（ＳＤＧｓへの貢献）

本実践は災害時の対応方法を考える取り組みを中心にしており、ＳＤＧｓのゴール１１「住み続けられる町づくり」である。また、被災地での生活を考え、人々の安全と安心を守る活動に取り組んだり考えたりする学習は、３「健康な生活」に関わる実践である。これらの学習を踏まえて育てられる価値観は、人命を最優先して行動していかなければならないため、互いの人権を尊重することだと考えている。

５．評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ主体的に学習に取り組む態度
①災害における身の回りの代用品を活用する方法を理解し、実行する。 ②シミュレーションを通して災害時に起こりうる状況を理解する。	①起こりうる課題についてその対処方法を、状況に即して考えることができる。 ②災害時にとるべき行動を自分で判断し実行することができる。	①災害シミュレーションゲームを通して自身の役割に気づき、避難訓練や災害時代用品制作作業に仲間と協力して取り組む。

６．単元展開の概要（全 11 時間）

主な学習活動	学習への支援	◇評価　　・備考
１．防災避難訓練（２時間）	・避難経路を確認する。 ・東日本大震災時の教訓をいかした記録映像を視聴する。 ・災害時の家族と連絡の取り方を確認する。	・防災訓練に真摯に取り組んでいる。 ◇ウ①
学習課題　災害時にどのような行動をとればよいのだろう		
２．災害協力シミュレーションゲームに取り組む（２時間）	・チームビルディングできるよう助言する。 ・適切なタイミングで、ヒントを与える。 ・振り返りでは、災害時の混乱をイメージし、どのような情報や物が求められるのかを想定させる。	◇ア②、イ② ・指示書を完成することができる。
３．振るライトの作成（3 時間）	・災害時の電源がないときのお役立ちグッズを作成する。 ・コイルと磁石で発電することを学習する。	◇ア①、イ① 作品を完成することができる。
４．ペットボトルピザを作成する。（4 時間）	・災害時でも温かい食事をとる方法を指導する。 ・段ボールを利用したオーブンの作り方を指導する。 ・ペットボトルを利用したピザ生地の発酵を指導する。	◇ア①、イ① ・段ボールを利用したオーブンの作成。 ・ピザを作ることができる。

2018 年度　奈良教育大学 ESD-SDGs コンソーシアム
全国版 ESD ティーチャープログラム報告書

近畿 ESD コンソーシアム／奈良教育大学 ESD-SDGs コンソーシアム
発行：2019 年 2 月

＜問い合わせ＞
奈良教育大学次世代教員養成センター　中澤静男
奈良教育大学附属小学校　河野晋也
奈良教育大学　教育研究支援課　ESD 事務担当：中城、池田
TEL：　0742（27）9367　　FAX：　0742（27）9147
Mail：　k-soumu@nara-edu.ac.jp